

とりあえずサクっと人理修復

十六夜やと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

FGO世界にオリキャラ勢のキチガイ共をぶち込んでみた。

そんなお話。

目 次

序章 特異点F 炎上汚染都市 冬木	
プロローグ	
流石です、所長！	
この詠唱は恥ずかしい	
南国育ちに雪山は辛かつた	
新しい武器を手に入れた	
宝具使用講座～基本すつ飛ばして実践編～	
おつと心は硝子だぞ？	
寡兵だと奇襲するしかないっしょ	
キチガイの前に死亡フラグは無力	
裏舞台でキチガイは舞う	
俺たちの戦いはこれからだ！	
第一特異点 邪竜百年戦争 オルレアン	
抑止力の英靈（対キチガイ用）	
影響されやすいお年頃	
お前が新選組になるんだよつ！	
黒歴史の上でタップダンス	
行動力のあるキチガイは面倒	
ジヤンヌ二人はややこしい	
これは何の二次創作ですか？	
どんどんしまつちやおうねー	
オルタV S オルタ	
共に地獄へ参りましよう	
第二特異点 永続狂気帝国 セブテム	

113 107 101 96 91 85 79 73 66 60 54 48 42 37 32 27 22 17 12 7 1

これが私の日常

魔術師とはキチガイのこと

マシュ・キリエライトの歴史教室

つまり薩摩もローマ

暴君とキチガイ

皇帝は聞く相手を間違える

集え！ 我等が夢想の軍勢よ！

さらば、レフ・ライノール

序章 特異点F 炎上汚染都市 冬木 プロローグ

——どこもかしこも燃えている。

——安全な場所などないと嘲笑うかのように。

——そこは地獄以外の何物でもなかつた。

「おい、マシユ！ マシユ！ しつかりしろつ！」
「せん……ぱ……い……？」

『システム レイシフト最終段階に移行します 座標 年 1月30日 日本 冬木』 西暦2004

——機械音が鳴り響く。

——警告音が鳴り響く。

——その音が耳にこびりつく。

「花子、この瓦礫どかせつ！」

「熱い」

「……ああ、もう、クツソ……とにかく俺も手伝うから——」

『ラプラスによる転移保護 確立 特異点への因子追加枠 確立』

「うつせーなあ！ さつきからさあ!?」

「マイケル、どいて。その壁の破片壊す」

「壊したらマシユ」と御陀仏だろうがいい加減にしろ！」

『アンサモンプログラム セット マスターは最終調整に入つて下さい』

「せんぱい……私はもう……助かりません……ですか？」

「助かる助からない以前の問題なんだよっ!? 生憎だが女の子見殺しにするような教育受けて育つてない身なんでねえ！ そこまで落ちぶれちやいねえんだよなあこれがあ！」

「上に同意」

『観測スタッフに警告 カルデアスの状態が変化しました』

『シバによる近未来観測データを書き換えます 近未来百年の地球上において 人類の痕跡は 発見 できません』

『人類の生存は 確認 できません 人類の未来は 保証 できません』

「カルデアスが……真っ赤に、なつちやいました……」

「そりやこんな周囲燃えてりや真っ赤にもなるわなあ！ ああ！？ クツソがマジでふざけんなよ！ こんなことならジョンもボブもダニエルも連れて来りや良かつたわつ！」

「——よつこらせつと」

「ナイス脳筋！ ついでに俺の上着引きちぎつて紐状にしてくんねえか！？ 止血だけでもしどかねえと大変だぞこれ！？」

「はや……く……にげ」

「ふんぬらばー」

「だあれが俺の上着を木つ端微塵にしろつつた!?」

『コフイン内マスターのバイタル 基準値に 達していません レイシフト 定員に 達していません 該当マスターを検索中

・・・・・・・発見しました 適応番号47 ××
×× を マスターとして 再設定 します』
××××××× 適応番号48 ××
××

「いけるつ！俺の応急手当のセンスが輝いてるつ！ ぶつちやけ初めてだから詳しくは知らんけどワンチャンいけるつ！ 生存フラグ立つたぞコレ！」

「あの……せんぱい……手を、握つてもらつて、いいですか……？」
「ばつちこーい」

『アンサモンプログラム スタート 靈子変換レイ
シフト開始まであと3 2 1 全行程 完了クリア ファーストオーダー 実証 開始 します』

◆◆◆

「視界オールクリアつと」

「先輩、こちらも敵性生物となるような存在は確認されておりません。ひとまずは安全であると断言できます」
「こつちにもいなかつた」

「フォーウ」

——どこもかしこも燃えている。

——安全な場所などないと嘲笑うかのように。

——そこは地獄以外の何物でもなかつた。

しかし、少し前までの空間とは違つていたのは、ここには密室による息苦しさのようなものがなく、その代償として不思議な生命体が闊

歩している、まさに『魔境』とも呼べる場所だった。

一見すれば現代日本の都市。廃墟でなければ人が盛んであつたことが容易に想像できるだろう。

俺は生真面目に報告する紫髪の少女——マシユ・キリエライトと、仏頂面を崩さない金髪の少女——花子の言葉に溜め息をつきながら、瓦礫の山から器用に飛び降りた。花子の頭には白いモフモフとした謎生物フオウ君までいる。

マシユは若干エロい鎧を身に纏つて大きな盾を装備し、花子は身長は小さいながら大きな胸を強調するような制服に身を包み、俺は上着を金髪女に木つ端微塵にされたため黒いジーパンに紺色のインナーを着ていた。これに白い制服姿だつたんだけどなあ。

「さて、こつからどうするよ。つかココどこよ」

「……おそらくではあります、だいたいの想像はつきます。しかし、今の私には詳しい説明ができるほどの知識はありません。ただ、私たちの世界にも存在しないような生命体がいるため、ここが先輩の知る場所ではないのは確かです」

「死んで異世界転生する王道異世界物ラノベ展開だと思つたんだけどねえ。まあ、まだ世紀末覇者みたいな世界じゃなかつただけでも感謝するか」

ここまで来る途中で、よくわからん生命体から姿を隠しながら逃げて来た背景もあり、俺は頭を搔いて大きく溜息をつく。

「らのべ?」と疑問符を浮かべているマシユの姿に和んでいると、ふとマシユの目の前に青い画面が浮かび上がった。一瞬ブルースクリーンかと身構えたが、青い画面には最近どつかで見たことあるような冴えない青年の姿が映されていた。

その男は反射的に叫ぶ。

「ああ、やつとつながった! こちらカルデア管制室だ、聞こえるかい?」

「こちらAチームメンバー、マシユ・キリエライトです。特異点Fにレイシフトしました——」

ここでマシユと画面の青年は軽い情報交換を行う。

まず彼の名前がロマニ・アーキマン——通称『Dr. ロマン』だと
いうこと。ここが西暦2004年の日本の冬木市と呼ばれる場所で
あること。マシユは『デミ・サーヴァント』という存在となつて一命
を取り留めたこと。

ロマンに告げられた新しい情報を吟味しながら、内心は引きつった
笑みを浮かべるのだつた。

「——現在データを確認中ではあるが、これによるとマシユは金髪の
キミ……えーと、花子ちゃんだつたかな。キミの使い魔サーヴァントとして成立し
ている。キミ達にはサーヴァントの説明すらしてなかつたから、戸惑
うこともあるだろう」

「そりやそうだ。こちとらマクドナルドのバイト面接会場だと勘違い
してカルデアに来た一般人だからな。ぶつちやけ過去に来たとか魔
術とか英靈がどうのこうのだと全然分からん。助けてくれ」

「へるぶみー」

「……そう言えばそうだつたね」

苦笑いを浮かべる画面内の青年だつたが、その画像にノイズが走
る。

マシユはそれに気付いて表情を少し固くし、ロマンは早口で会話を
切ろうとする。

「……しまつたな、予備電力に切り替えたばかりでシバの出力が安定
していないらしい。三人とも、そこから二キロ移動した先に靈脈の強
い場所がある。詳しい場所はマシユが分かるだろうから安心してく
れ。そこなら通信が安定するだろう」

「なあ、これだけは教えて欲しいんだが、他の三人は無事なのか?」
「他の三人……ああ、キミ達と一緒に居た子達か。彼らなら無事だよ。
今はカルデアの復旧に——」

そこで映像は途切れた。

通信出来るだけの電力とやらがなくなつたのだろう。

こつちはこつちで時間旅行という名の面倒なことに巻き込まれて
いる最中だが、被害に見舞われたカルデアの方も大惨事になつている
のだろうか?

ここに居ても始まらない。

俺は肩をすくめながら指示を出した。

「というわけで、靈脈つつーのが何なのかは知らんけど、マシユちゃん案内よろしく」

「分かりました。もしかしたら戦闘になるかもしませんが、その時は私がマスターと先輩を守ります！」

「頼もしい限りだけど今回はよしておこう。君もデミ・サーヴァントとかいう不思議パワーで強くなつたらしいけど、本調子になつてないのは確かだ。ここは時間をかけてもいいから敵に見つからないように移動しよう。花子もそれでいいな？」

「よくわかんないけどマイケルに任せる」

わずかに緊張した面持ちで返事をするデミ・サーヴァントの少女と、思考を完全に放棄した仮面の少女+よくわからん白いモフモフを引きつれ、俺は周囲を注意深く見渡しながら移動するのだった。

流石です、所長！

「もうすぐドクターに指定されたポイントに到着します。……先輩は凄いですね。一度も敵と遭遇することなく到着しそうです」

「はははっ、褒められるのは嬉しいけどフラグなんだよなあ、それ」

良く言えば隠密行動重視で移動し、悪く言えば臆病者のようにコソコソ隠れながら移動した俺達は、目的のポイント近くまで、敵性生物と遭遇することなく現在に至る。その過程で闊歩してた骸骨みたいなクリーチャーにビビリましたが、どうにかこうにか巻き込まれることなく来れた。

屈んで歩いたり、転がつて移動したり、物陰に隠れたり、石を投げて注意を逸らしたり、道中の木に擬態したり——どうして特殊訓練を受けた軍隊のような行動をしてるのか疑問に思う自分がいたが気にはしない。『いのちだいじに』が最優先だつたから仕方ないんだけど。

「しかし……見渡す限りの炎ですね。資料で見たことのあるフユキ市とは全然違います」

「そうなん?」

「資料ではフユキ市は平均的な地方都市であり、2004年にこのような大災害が起きた事はないはずですが……」

「2004年、か。ここ本当に過去なんだなあ」

あんまり気にせずマシユとドクターとの会話で流してはいたが、今ここに居る俺達は過去の世界にタイムスリップしたようなものだ。それよりもっと大変な目にあつて いるから仕方ないにせよ、空想上の体験に感慨深く思う。

……ん?

俺そりいえば過去の世界に来てるんだよな? タイムパラドックスとかその辺つてどうなつてんの?

「ねえ、マシユ——」

俺がマシユにそこら辺の仕組みの解説を求めようとした瞬間、女性の金切り声のようなものを耳にして、マシユが盾を構えてすぐさま俺達を守る。

瞬時に厄介事の気配を察知した俺は肩をすくめるのだつた。

「女性の悲鳴です。急ぎましよう、マスター、先輩！」

「行かなくちゃ、ダメなんだろなあ……」

「りよーかい」

◆◆◆

「何なの！ 何なのコイツ等！ どうして私ばかりこんな目に合わなくちゃいけないのよ！ もう嫌！ 来て、助けてよレフ！ いつだつて貴方が助けてくれたじやない！」

悲鳴のあつた方へ行つてみると、何かショチョサンが骸骨兵と一戦交えている光景があつた。

何か指から弾丸みたいなの出してる姿は様になつてているのだけれど、言つてることは情けないの一言に尽きる。そりや変な化物に襲われてたらそうなるのも無理はないけどさ。

マシユは急いで所長さんを助けに行こうと赴くのだが、それを俺は片手で制止した。

彼女は俺に理由を求める。

「このままではオルガマリー所長が——っ！」

「よく考えてみ、マシユちゃん。こんな大声出してたら敵が集まつてくるのは明白なのに、どうして我等が麗しき所長さんが子供みたいに泣き叫んでいるんだと思う？ というか本当に助を求めてると思つてんの？」

「それはどういう……」

「つまり所長さんは自分の身を挺して囮役とし、他の誰かがこの特異点？ つてのを修復するまでの時間稼ぎをしてるつてわけさ。俺達はその意思を汲み取つて、さつさとフユキ市の異変を解決するのが当然だと思わないか？」

「な、なるほど」

マシユも敵が集まるリスクを犯して泣き叫んでいる所長の意思を

汲み取つたようだ。考え込んでいたマシユは真剣に領いて、彼女を救出するのを諦める。

本当は面倒なの増えても困るから見捨てるだけである。

さて、さつさと靈脈つてところに行こ——

「ちよ、マシユ!? と……馬鹿二人組!? 何逃げようとしてるのよ!

早く助けなさ——あ、待つ、だづげでええええええええええ!!」

と思つたけど無理だつたわ。

◆◆◆

「戦闘終了です。お怪我はありませんか、所長」

骸骨兵を「盾で殴り殺す!」という戦法を真っ向から信じ込んだデミサーヴァントのマシユと、魔術使えないなら物理で殴ればいいじゃないの精神で何故か骸骨兵を無双した花子。それを畠然とした表情で見ていた俺と所長の図。

戦闘後に骨を集めてる花子を他所に、マシユは所長の安全を確認した。

「……どういうこと?」

「所長? ……ああ、私の状況のことですね。信じがたいことだとは思いますが、デミサーヴァントとして融合を果たすことが出来ました」

「そつちじやなくて! いや、そつちも予想外だつたけど! それ以上に私の演説で馬鹿な事言つてたそこの一般人!」

花子と一緒に骨を拾つてた俺は、所長さんの言葉に首を傾げながらそちらの方を向く。何に使うか分かんないけど、なぜか必要になつてくると思つた俺と花子は律儀に紅い骨を回収して いたのである。

その様子を見て所長は更にキレる。

「なんでそこの一般人がマスターになつてんのよ! サーヴァントのマスターになれるのは一流の魔術師だけ! あんな何考えてんのか分からぬ奴がマスターになれるはずがないじゃない! マシユにどんな乱暴なことして言いなりにしたの!」

「おいおい冗談は錯乱状態だけにしてくれよオルガ所長。花子が無理やり言いなりにするとかいう高度な思考を持ち合わせてるわけないだろうが。フリージア流すぞ？」

「誠に遺憾」

「それは誤解です、オルガマリー所長」

マシユはオルガ所長に俺達がここにレイシフトしてきた経緯、なぜマシユが花子と契約したかの事情を簡単に説明した。もちろん靈脈に向かいながらである。

同時に所長のおかげで俺達がなぜレイシフトできたかの理由も知ることが出来た。

——レイシフトできたのが、ここに居るメンツだけということも。「困ったなあ。マスター候補者とかいうエリート共に厄介事全部押しつけて、こちとらフユキ市観光と洒落込もうと思つてたのに。これじゃあ俺達が特異点を攻略しなきやいけないじやないか」

「よくもまあ崩壊した冬木市を観光しようつて思うわね……」

「だつて時間旅行とか中々にリアな経験だぜ？」

とりあえず所長からの指示でベースキャンプを作ろうという話になり、靈脈に辿り着いたカルデア御一行は警戒しつつ馬鹿話に花を咲かせる。

マシユの盾が何らかの装置になるらしい。

ちなみに花子は白いモフモフを頭に乗せて彼女の仕事を仮頂面で眺めている。

「で、これでカルデアと安定した連絡が取れると」

「ついでに貴方のサーヴァント召喚のための媒介でもあるわね。見たところ貴方にも魔術回路があるわけだし、戦力が足りないのだから契約してもらわないと」

「……サーヴァント、ねえ」

英靈とは『英雄が死後、祀り上げられ精霊化した存在』のことであり、そのため世界の法則から解き放たれており、世界の外側にある『英靈の座』とか呼ばれる場所から『世界の危機』に際して『世界からの要請』によつて過去・現在・未来を問わずあらゆる時代に召喚され

る……らしい。そこで、人々に祀り上げられ英靈化したものを、魔術師が聖杯とかいう物の莫大な魔力によつて使い魔として現世に召喚したものを作成する魔術師と呼ぶのだとか。

よくわからん。

これでも所長が言つてたことを俺自身が要約してみたものであり、他の業界もあることなのだが、専門用語を専門用語で解説しないでほしいと思うのは俺だけだろうか？

特に彼女だけなのかもしねいが、知らないことに対する蔑視が激しい。魔術師って連中特有のことなのか、単純に彼女の問題か。そういうしているうちに召喚サークルは完成し、俺達はカルデアとの連絡に成功した。

同時に——俺達はカルデアの惨状を知ることとなる。

〔カルデアで生存しているスタッフは20人にも満たず、レフ教授の生存は絶望的です。加えて、マスター候補者全員が危篤状態です〕

この詠唱は恥ずかしい

「46人のマスター候補者は凍結保存、カルデアはレフ教授も失い8割の機能が動いていない状態、そして生き残つてのスタッフは二十人未満。いやー、言葉にしてまとめてみると悲惨な状態だな。これ詰んでね？」

「こんな状況で君は本当に呑気だね……」

「同じ場所どころか同じ時間軸にすらいないんだから、焦つたところで何もできないだろ？　ただでさえ帰れるのかどうかさえも怪しいのに、他人の心配までする余裕はないぞ」

責任がどうのこうの騒いでいる所長を無視して、俺は画面の奥にいるロマニと会話していた。責任も何も帰つたら責任追及してくる奴等が存在してるかも怪しいのに、ここまで今は亡き（不確定）レフ教授に助けを求めるくらい取り乱すとは、彼女は想像以上にポンコツなのかもしれない。マシユのマスターには敵わんがな。

当方での目標が『特異点Fの調査』に定まつたところで、俺は頭をかきながら「それはそれとして……」と話を切りだす。

マシユは花子と文明的なコミュニケーションを図つている最中なので、聞かれることはないだろ。

「この一連の大事故は誰が原因なんだろうね」「……誰が？　何がじやなくて？」

『何か人類滅びそうなんで調査しようぜ』つて段階での、大事故なんだぞ。人為的なものしか俺は感じないんだが？　俺は魔術に関しちやド素人だから、不思議パワーを持つ未知の生命体が不思議パワーで何かしたんなら打つ手がないだろうが、完全にカルデアが崩壊しないことを鑑みるに、俺達と同等か想像の範囲内の高度な知性を持つ何かが仕掛けてきたって考えるのが妥当だろ？』

犯人の詰めの甘さ。

現在進行形で俺達に攻撃してこない現状。

カルデア修復への追撃がない。

以上のことから、俺は人為的な犯行であると適当に推測する。ぶつ

ちやけ合つても合つてなくとも俺は困らないから、俺が考える限りの範囲内で考察を述べた。もしかして身内の犯行だつたりして。

真剣に考え始めたロマンに「まあ、本当はどうか分からんけどねー」と言葉を付け加える。

「んな悲観的な話は置いといて……俺はどうやつたらサーヴァントつて奴を召喚できるんだ？ なんか戦力不足だから一応マスター候補者の俺も駆り出されることになつたんだけど」

「それは私が説明するわ」

「あ、所長。レフ助けて症候群は収まつたん？」

「その物凄く理不尽な病名つけるの止めてくれない？ ……ほら、これを使いなさい」

不機嫌そうな所長から手渡されたのは、角ばつた金平糖のような虹色の石三個。大きさは普通の中華料理屋で出されそうなゴマ団子くらいの大きさで、手で転がしてみると石同士がぶつかり合つてカラーンと心地よい音が鳴る。

良く言えば神秘的な石に、悪く言えば日本人の一部の心を狂わせそうな石に、俺はこれをどうすればいいのか所長に問い合わせる。

いつの間にか花子とマシユも集まつて来たようだ。

「その石——聖晶石を媒介として、カルデアの英靈召喚システムを用いて、貴方のサーヴァントを召喚するの。その際に詠唱が必要なんだけど……」

英靈なるものを召喚する詠唱を忘れてしまつた所長に代わり、ロマンが新しいウインドウを出して詠唱の一節を画面に出してくれる。想定していた以上に長く、ある程度流し読みした俺は、率直な感想を魔術の造詣に詳しい二人に叩きつけるのだった。

「恥ずかしくない？ この詠唱」

「あ、貴方、敢えて私たちも言つてなかつたことを……」

少なくとも人様の前で口づさめるような文章ではなかつたことに、英靈を呼び出せる事実に若干ワクワクしていた俺は萎えて、眉間を揉みながら所長が溜息をつく。

この詠唱が生まれたのが数百年前だということで納得せざるを得

なかつたが、俺のテンションが下がつてしまふのも理解してほしい。できればこの詠唱を昼休みの学校のグラウンドで大きな声で詠唱できるような猛者と代わつて欲しいものだ。少なくとも花子ならできる。

さつさとやれと足を蹴り始めた所長に流されるが如く、観念した俺は石を片手に例の詠唱を紡ぐ。

もう二度としないことを心に誓いながら。

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、

王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我是常世総ての善と成る者、

我是常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言靈を纏う七天、

抑止の輪より來たれ、天秤の守り手よ——！

刹那——吹き荒れる暴風。

それが自然現象で起こつたものではないことは場にいる全員（除・花子）が理解し、腕で顔を覆いながら風が鎮まるのを待つ。特に発生源の間近にいた俺は、本能的にそれが俺の内に眠る何かが生み出したものであることを察する。

「これはエクストラクラス……っ！」 アヴエンジャー！？ マイケル君、そこを離れるんだっ」

ロマンが何やら大切なことを呟いていたが、急に暴風が何事も

なかつたかのように収まつた今、俺の耳には聞こえてなかつた。そして召喚の起点となつた盾の前には、マシュー花子天マシュー花子使や脳筋お荷物所長とは違う、正体不明の何かが顕現している。

その姿に俺は目を見開いた。

黒を基調とした軽甲冑にマント。真新しい衣装であるはずなのに、マントの端々がボロボロになつており、まるで燃やされたような風になつていて。

長い白い髪が靡く姿は見惚れるほどに美しいが、それ以上に印象に残るのは金色の瞳。まるで人類全てを憎んでいるかのようなドス黒い感情を、隠そともせずに目前にいる俺へと向けているのだ。その有様も彼女の美を際立たせているのだが。

彼女が一步步くと軽甲冑の鎖が擦れる音が響く。手に持つた大きい旗を地面へと突き刺す。それによつて生じる鈍い音。

「サーヴァント、アヴエンジャー。召喚に応じ参上しました。……どうしました。その顔は。さ、契約書です」

アヴエンジャー。復讐者、か。

我が友人ダニエル曰く、『美人というのは声までもが美しい。何故なら美人の美しい骨格が美声を奏でるからである』と。外見だけは美少女な花子と所長、言わざもがな可愛いマシューの例からするに彼の言葉は正しかつたのだろうが、英靈である彼女は違うベクトルの美しさを醸し出す。

ここまで美女と言うのは中々お目にかかるない。俺は無意識に息を飲んだ。

「えつと、失礼かもしれないけど、君の真名は何だい？」

本来なら俺が言うべき台詞を口マンが言う。

画面越しだから彼女の威圧に当たられることがなかつたのだろう。

「真名……そう、真名……」

一瞬だけ美しい顔が歪む。

だが本当に一瞬だつた。彼女は卑屈そうに口を歪めながら、俺達を卑下するように名乗る。

「ジャンヌ・ダルク……の『贋作』かしらね。あの女の在り得たかもしない復讐者としての姿。聖杯の力を受けて、本来在り得ることのない形に変転した反英靈。どう、幻滅したかしら？」

自分はジャンヌ・ダルクの偽者である。

堕ちた魔女であり、忌むべきフランスへの復讐者だ。

どうだ。こんなはずれサーヴアントを引いた感想は？

見ていて痛々しいまでに卑屈な彼女の歪んだ笑みに、俺は大きく息を吐いて所長へと顔を向ける。肝心の所長はジャンヌ・ダルクの偽者を名乗る英靈が求める答え……つまり『使えないハズレ』を見るような表情で彼女を眺めていた。

「所長」

「……何かしら？」

「何かジャンヌ・ダルクのパチモン召喚したんだけど、これどこに訴えたら石返つてくるん？ 消費者庁？」

「ぶつ殺すわよクソマスター」

南国育ちに雪山は辛かつた

ジャンヌ・ダルク。

農夫の娘として生まれ、神の啓示を受けたとしてフランス軍に従軍し、イングランドとの百年戦争で重要な戦いに参戦して勝利を收め、後のフランス王シャルル7世の戴冠に貢献した英雄。コンピエーニュ包囲戦で捕虜となり、『不服従と異端』の疑いで異端審問にかけられ、19歳で火刑に処せられた悲劇の聖人。

つてwikiに書いてあつた。

火刑で殺されたことはジャンヌ・ダルク本人は恨んでいないらしい、つまり俺の召喚したジャンヌ・ダルクは『よくも魔女認定して殺してくれたなあ？　ああ？』つて考えるタイプのIFジャンヌ・ダルクということらしい。

通常の聖杯戦争……というかカルデアの召喚システムでは、剣士・弓兵・槍兵・騎兵・魔術師・暗殺者・狂戦士の七クラスのいずれかで召喚するのが基本なのだが、今回のジャンヌさんはエクストラクラスと言われる特別なクラスなのだとか。

聖人と謳われた彼女の暗黒面の擬人化つてわけね。

「つまり俺は君のこと有何て呼べばいいん？」

「適当にアヴェンジャーとでも何とでも呼びなさいよ。こんな贋作の名前に意味なんて」

「よつしや言質とつたぞ。後で正式に決めるとして、仮名は『荒川・

ジョセフィーヌ・万次郎』つて——」

「ジャンヌ・オルタ。おk？」

新たな仲間としてジャンヌ・オルタ・荒川・ジョセフィーヌ・万次郎が加わった。

所長はピリピリかついライラしているが、どうやら俺と花子が無能である以外にも、彼女が精神的に情緒不安定である理由があるらしく、特に彼女のことは気にせず探索を続ける。触らぬ神に祟りなしつてコトだ。

「オルタ、あそここのモンスター倒ってきて」

「はあ？ 何で私が

「じゃあいいや。おーい、マッシュちゃん。忙しいとこ悪いんだけど、ウチの穀潰しが働きたくないんだってさ。だから——」

「誰が働くかないつて言つた!? あんな雑魚モンスターくらい私が瞬殺してあげるわっつ!!」

基本的に命令すると反発する。だけど、プライドが高いので自分が無能扱いされるのは耐えられない。恐らくオリジナルの彼女に大きなコンプレックスを抱えてるのが原因かもしれないが、そこのところを上手く突いて、俺は危険因子となりうる目前のモンスターにオルタを突撃させる。

黒い炎でモンスターが消し炭になつてている様を満足げに頷いていると、どこか批難めいた表情を浮かべる所長が労いの言葉をかけてきた。

「……貴方、いつか彼女に刺されるわよ?」

「刺される理由が分からぬんだが……」

俺は別に彼女に命令を強要してるわけじゃない。実際マスターになつた際に『令呪』と呼ばれる強制コマンドがあるので、無理矢理社畜にさせることも本来ならば可能なのだ。これは正式な聖杯戦争の令呪よりも強制力は弱いらしく、それでもマスターである俺には絶対権がある。

だが、俺はオルタに命令する理由で令呪を使おうとは今のところ思わない。今後どうなるか分からんから保留の段階だけだ。

ロマン曰く英靈との信頼関係というのは割と重要らしく、それを損なう可能性はできるだけ排除したいと考えているからだ。それやるくらいなら誘導させて騙して彼女に判断させる方が楽である。

だから令呪の説明を聞いたときに俺は彼女に言つた。

『俺は君に無理な命令はしないと約束しよう』

『……何馬鹿なこと言つてるの？ そもそも信用できる訳が——』

『【令呪を以て命じる。そこでコサツクダンスを披露しろ】』

『はあ！ ちよ、身体が……』

『【重ねて令呪に命じる。髪ダンスも追加で】』

『何乙女にアホなことさせんのよおおおおおお!!』

『これで俺の令呪は一つだ。これを失えば俺は君にコサツクダンスと髪ダンスをさせた報復が待ってるから使えない。ほら、君に命令できなイだろ?』

『アンタねえ……!』

『あ、ちなみに令呪つて回復するらしいんだけど、1画回復させる度に踊つてみた披露な?』

『クソマスターああああああああああああああああああ!!』

「やっぱ俺が刺される理由が分かんないんだけど」

「……オルタよりも先に私が刺してやろうかしら、マジで」

次はモリヤステップだな。知らない人は検索してみよう。

スマホで面白そうなダンスを探してると、モンスター消し炭にしてきたオルタが俺を睨みながら帰ってきた。ちゃんとモンスターが落とした素材を持つてくるあたり、根は良い子なのかもしれない。

「お疲れさん。俺じゃあアレに対抗できないからね。助かるよ」

「……チツ」

「はい、報酬のアメちゃん」

「そんなんで私が喜ぶとでも? どうやら私のマスターは頭がお花畠のようね。いつそ燃やし尽くせば花畠よりも綺麗になるかしら?」

「いらんの?」

「……いる」

不機嫌そうにオルタが受け取った飴を大事そうになめてる姿に苦笑しながら、今度は仕事を果たして来たマシユと花子にも飴を提供する。ここで我が友ボブから袋ごと押収した飴が役立つとは思わなかつた。

棒付きキヤンディーが何気に世界を救つてゐるのだ。

「……ところでマシユ、貴方宝具が使えない?」

「はい……どうやらそのようです」

先ほどの戦闘で何か思うことがあつたのか、所長の問いに影を落と

す。

マシユが敵の攻撃を的確に防御し、花子が敵を殴り殺す連携は素晴らしいと思つたのだが、所長は『宝具』が使えないことに焦りを覚えているらしいのだ。

『宝具』とは簡単に言えば必殺技。

相手に弱点を悟られないためにクラス名で呼び合う彼等にとつて、まさに伝承や偉業を切り札とする宝具は利点でもあり欠点でもある。マシユ自体は半ば強制的にデミサーヴァントとなつたため、どの英靈と融合したのかが分からず、宝具が使えない状況だと語る。

マスターたる花子が一人前の魔術師となれば情報を閲覧できるところだが……このアホタレが一人前になるより先に人類が滅びそうである。

「宝具が使えない程度、どうつてことないだろうって思うのは俺だけか？」

「ちよつとはその小さい脳みそで考えなさい。自分の四肢が思うように動かなかつたらどうなるかを」

「……あー、そういう感覚なのね。納得」

オルタに指摘されて考えを改める。

やつぱり花子にはマシユちゃんのためにもマスターとして精進してもらおう。望みは薄いが確率はゼロじゃない。

「まあ、カルデアのレイシフト機能が回復すれば一流のマスターをシフトさせることもできるわ。そうなれば貴方達はお払い箱よ。魔術の素人はカルデアの隅で震えていなさい」

「マジかあ。カルデア雪山の上にあるから寒いんだよなあ。逆にココは暖かいから楽」

「アンタを暖めるために街が燃えてるんじゃないわよ！」

とうとうアンタ呼ばわりである。

近くの燃える一軒家で暖を取つていたら怒られた。

だつて雪山クソ寒いんだぞ？ 何月だと思ってんだ？

氷点下なんて数えるほどしか体験したことのない南国育ちには辛すぎる環境なのだ。気温マイナスとか舐め腐つてるとしか思えない

自分がいる。

「マシユは戦闘大丈夫?」

「はい、マスター。武器は上手く使えませんが……」

「ごめん、話は後! そこから逃げるんだ! 新しい敵性反応だ……しかもこれはっ!」

次から次へと問題が生まれるとは、どうやらこのパーテイメンバーの中に不運の女神に愛されてる奴がいるようだ。さては所長オメードだな? 特に、ロマンが唐突に通信を開いて撤退を促した瞬間、ズシンと重い地響きが聞こえた瞬間に、今回の「あ、これはヤバいやつだ」と直感的に感じる。

黒い霧のようなもので正しく認識できないが、それが人型をしたものが現在の特異点だという情報から察するに――

「サーヴァントだ! マイケル君と花子ちゃんにはサーヴァント戦は早い……!」

「いつちよ殺つたりますか……」

「ウォーミングアップには飽きた」

「どうしてそんな君達は好戦的なんだい……!?」

ポキポキと指の関節を鳴らしながら向かうマスターと、

「が、頑張ります!」

「クソマスター、いちご味とオレンジ味を用意しどきなさい」

従順なサーヴァント達の初めての対サーヴァント戦が幕を開けた。

新しい武器を手に入れた

対サーヴァント戦に入った瞬間の俺の指示は個人的に早かつたと思う。俺より早く的確な行動が出来る魔術師様がいるのなら代わって欲しいものだ。

目の前に現れた黒いサーヴァントに対し、俺から見て右側にいつも不機嫌そうなジャンヌ・オルタ、左側に緊張で表情を強張らせたマシユと、いつも通りの仏頂面を崩すことなく八極拳の構えをする花子。俺の後ろに青ざめながら隠れてる所長のフォーメーションである。

「オルタ、攻撃に徹しながらマシユのサポート。出来るだけ敵の攻撃はマシユに受けさせろ」

「……ふん」

「マシユは防御だけに徹してくれ。タンクの君が倒れたら後方が崩壊するから、とにかく耐えて」

「わ、分かりました！」

「花子は殴れ。とにかく殴れ」

「あいあいさー」

そろそろ花子は『魔術師はサーヴァントに勝てない』という理論を理解してほしいんだが。何で俺の指示に疑問を抱かずにサーヴァントへ特攻してるのだろうか？

各自行動を始める姿を確認した俺は、少し遠目に敵であるサーヴァントの正体を見極める。サーヴァントの真名さえ知ることが出来れば、その攻撃手段や宝具の効果などを予測できるとロマンが言つていたからだ。魔術師としての知識が皆無なのだから、オルタの魔力タンク以外で魔術に頼らない貢献をするべきだろう。

とは言つても俺に英雄の知識があるわけじやないんだが。

外見は紫色の髪をした眼帯をしている女性の英霊。衣服は人前で気軽に言えなさそうな仕事をしている人みたいな服装。鎖を巧みに使いながらオルタとマシユの攻撃を受けている。

全く分からん。どこの偉人だよ。

かろうじで理解できるのは、彼女が『蛇』に関する英靈だということ。服装や眼帯に鱗のような装飾を施していることから推測——

「打つべし、打つべし、打つべし、打つべし」

「……つ！ ……つ！」

——する必要はあるのだろうか？

敵対してははずのサーヴァントに馬乗りになつた花子が、リズミカルに顔面フツクを決めている姿に啞然とするカルデア御一行。しかも容赦もクソもないから逆に敵サーヴァントが可哀そうに見えるくる。

あ、敵が光の粒子になつて消えたわ。

「——つ！ ——つ？ ——つ!! ——つつつつ!!??」

「分かつた分かつた。とにかく声にならないほど驚いたのは分かつたから落ち着け。何でアレが無双してんのか俺も知らんから落ち着け」
「……私を呼んだ意味つて」

「オルタも落ち込むな。俺だつて想定外なんだから」

涙目で花子を指差し声にならない声で今だに叫んでる所長と、若干不機嫌そうに拗ねているオルタを宥める。あれ見て最初は『サーヴァントはサーヴァントでしか倒せない』という所長の理論そのものが間違つてると思ったが、どうやらアレがおかしいだけらしいな。うん。当の話題となつてている本人は呑気に背伸びをして、マシユは周囲の警戒を怠ることなく見渡している。

「マシユちゃん、敵はいない？」

「はい、恐らくは——先輩つ！」

「オルタつ！」

ガキンつと鈍い金属がぶつかり合う音がした。

オルタが寸でのところで奇襲してきた新しいサーヴァントの攻撃を旗で受け止めたのだ。異様に右手だけが大きい黒色のサーヴァントは、片言ではあるが口から言語を紡ぎ出す。

「——見ツケタゾ、新シイ獲物。聖杯ヲ、我ガ手ニ！」

「ひいいいいいいいい！」

さつきは敵サーヴァントが距離を取つてたから正氣を保つていた

所長も、金切り声を上げながら俺の背中にしがみつく。役得感よりも先に鼓膜が再起不能になりそうである。

「マイケル君！ それはアサシンのサーヴァントだ！ ……いや、ランサーのサーヴァントも来たぞ!?」

「チツ、こりや所長の日頃の行いって相当悪いな」

加えて多量の武具を背負つたサーヴァントも現れただことにより、状況がさらに悪化の一途を辿る。これは所長のお祓いに行っている場合ではなさそうだ。

とりあえずお望みのままに所長の盾となりながら、盾のサーヴァントと俺の相棒に大声を投げかける。

「マシユとオルタはアサシンを足止めしてくれ！ 花子は槍持つてる奴をシバき倒せ！」

とは言つても状況が悪い。

さつそく花子は敵ランサーに仰向^マけの体勢^ウを取る相手に馬^ト乗り状態となり、反撃を許さず顔面を一方的に殴りつけている。しかし、戦闘そのものに慣れていないマシユと魔力供給素人を主と仰ぐオルタは、暗殺者を生業とする敵に苦戦している様子である。

そりや相手は『英靈』と称される程の腕を持つ存在。今回初ランサー・ヴァント戦の少女と旗ブンブン丸な元聖女が勝てる要素の方が少ない。

せめて花子が早くランサーにトドメを刺せれば、彼女等が一気に優位になるのだが、流石は三騎士と持て囃されるクラス。あの神話生物モドキの攻撃を耐えていることを称賛するべきなのか、苦痛が他サーヴァントより続くことを憐れむべきなのか。まだまだ時間がかかりそうである。

俺達カルデア御一行の主戦力が素人マスターなのは気にしない。しゃダメだ。

「まだ耐えられるかマシユ!?」

「せん……ぱ……い……つ！」

「面白い！ 殺シタイイイイタイイイイイイ！ タノシイ！」

「クッソ……こっち向けての……つ！」

目に見えてマシユの負担が大きくなっていることを見兼ねたオルタは、注意を自分に引きつけようとする。しかし、アサシンは一点集中でマシユを狙う。実に合理的で厄介だ。

さつき回復した令呪でオルタの魔力をブーストさせようと口を開こうとした瞬間、

「つたく、見てられねえぜ」

突如アサシンの真上から業火球が飛来し、暗殺者の猛攻を中断する。

俺は声のした方を振り向くと、そこには蒼色の髪をした杖を持つ青年が立っていた。俺の知らない国の文字を周囲に浮かび上がりながら、猛犬を彷彿とさせる笑みを浮かべた。

「貴様、キヤスター!? ナゼ漂流者ノ肩ヲ持ツ……!?」

「ああ? んなの言うまでもねえ。テメエらよりも嬢ちゃん達の方がマシだからに決まつてんだろうが。それとまあ、見どころのあるガキは嫌いじゃない。ついわけで加勢するぜ!」

氣前の良いアニキ肌の魔術師^{キヤスター}の英靈は、さつそく呪術らしきものを口ずさみながら、先ほどの業火球を出現させて攻撃を再開しようとした。

しようとした。過去形である。

実際には実際には出来なかつた。

死の縁から青い騎士を召喚するように。

月の王が己が英靈と出会うように。

素人の魔術師が復讐者と契約するように。

人にはそれぞれの『運命』^{fat e}がある。

そして彼女には——これが運命^{stay night}の夜だつたのだろう。

「見つけた」

「んあ? どうしたちつこいガキ」

まだ彼女が美少女の皮を被つた未確認生命体だと知らないキヤスターは首を傾げる中、ランサーを仕留めた花子は有無を言わさずキヤスターの胸倉を掴み、力を込める。

バチバチと紅い稻妻が彼女の周囲を逆り、キヤスターが紅く輝き始めた。

「アサシン、その心臓を貫い受ける——」

「は、え、ちよ、テメ工待」

「真明封鎖、疑似宝具展開——」

もはや人間かどうかすらも怪しくなってきたアホの子は、大地を踏みしめ助走をつけ、

「——ゲイ刺し穿ボルつ死棘クの槍クつク!!」

「それ俺の宝具うううううううううううううううううう!!」

直立不動の姿勢のままのキヤスターをアサシンにブン投げ、螺旋状に回転をしながら、アサシンに迫る。どれだけ逃げようとも『心臓に槍が命中した』という結果を作つてから『槍を放つ』という原因をもたらすチート宝具を疑似的に再現している(?)ため、何人たりとも逃れることはできない……のか?

そんなわけで花子の新しい宝具は、アサシンの心臓を理不尽に貫くのだった。

宝具使用講座（基本すつ飛ばして実践編）

「……もう座に帰つていいか？」

「何を急に」

「急にじやねえだろ!? さつき思いつきり武器にされたんだが!?」

クーフーリン」とフユキのキャスターは化物でも見るような感じで、ボーツと何考えてんのか分かんない仮面で俺の後ろをトコトコついて来る花子を指差した。

俺達は今回の特異点の黒幕とも呼べる『セイバー』のサーヴァントを討伐するため、キャスター先導の下に大聖杯のある場所へと向かっている。燃えている冬木市を歩いていたカルデア御一行+αだったのだが、キャスターは頑なに花子へと近づこうとしない。分からんでもない。

あの後アサシンとランサーを仲良く（当社比）討伐し、（表面上の）同盟を締結させたキャスターは冬木市で起きている惨状を語った。

前に所長が語った通りに『聖杯戦争』という魔術師同士のお祭りが開催されたまでは情報通りだつた。しかし、街は燃えて人がいなくなっているという異常事態、急に強化されたセイバーのサーヴァント、黒い何かに汚染されたキャスター以外のサーヴァント達。イレギュラーばかりが起こる中、汚染されたサーヴィアントは何かを探しているらしい。

キャスターは早くこのトチ狂つた聖杯戦争を終わらせたい。でも、他6騎を相手にするには荷が重すぎる。

そんなわけでキャスターは俺達に同盟を持ちかけてきたわけだ。「しつかしクーフーリンねえ。まさかケルトのビッグネームと早々にお知り合いになれるなんて光栄の極みだな。後で握手してもらつていい?」

「お、おう……小僧は魔術師なんだよな？ 普通の魔術師なら俺達みたいな本体^{サバゲント}の写し身なんて道具みたいなもんだろうに、随分と変わつた奴なんだな」

「魔術師つて自覚はないけどね。歴史上の英雄と出会えるなんて中々

にない経験だろ？ いくら『座』とかいう場所に登録されてる奴のコピードラッグ、俺は個人的に敬意を払うべきだつて考えてる」

あと男女比率が極端な我等がカルデアチームに、男のサーヴァントが加入してくれるのは実に素晴らしい。よくつるんでる悪友共の男とチンパンジーの比率が4：1だったため、あえて言葉に出してないが非常に肩身が狭いのだ。女子と接したことのない童貞のチキン力をナメるなよ。

要するにクーフーリンは神。マジ神の子。

んな反応をしていると、横から俺の方を引っ張つてくる英霊ジャンヌ・オルタ。

ジト目で明らかに不機嫌そうだ。彼女が機嫌がいいところを見たことはないが。

「……じゃあ、私は」

「ジャンヌ・ダルクのパチもん」

「消し炭をお望みの様ね」

「え、じゃあ『ジャンヌ・ダルク』として認識してほしいの？」

痛いところをつかれたのか押し黙る元聖女様。

あの聖女様と一緒にすんないと本人が口にしていたため、俺は自分のサーヴァントをフランスの救世主とは見ていない。

そもそも本物に出会ったことないから、彼女を偽者と見るには少々難しいところではあるが。

◆◆◆

「先輩、敵性勢力の排除完了しました」

「おう、お疲れさん。マシユは頼りになるなあ」

「上に同じ」

やっぱマシユつですげえよ！

非戦闘員の俺と、マシユをタンクとして敵をフルボッコにしてきた花子はマシユを称賛するが、当の彼女は表情に陰りを見せていた。どうもアサシンとランサー戦の時以降からこれだから、宝具云々かんぬ

んで思うことがあるのだろうか？

最初は俺の思い違いかと考えもしたが、キヤスターが様子を見ては嘆息したり、アヴェンジャーがチラチラ確認したりと、思い違い疑惑は確信へと変わる。

……どうして主従関係ではない俺が心配しているのだろうかと、マスターたる花子が相変わらずボケーっと何も考えてなさそうな仏頂面をしている姿を横目に考えなくもない。

しかし、俺のことを先輩と慕ってくれる健気で天然な後輩が困っているのだ。久しぶりにキチガイじやない人間と接したのが後押しするかのように、主従関係がなくとも何とか力になりたいと俺は思うようになる。

「……おい、カルデアのマスター」

「ん？ どしたのキヤスター」

冬木のキヤスターは俺を手招きし、そつと耳打ちする。

その内容を吟味して俺はあまり乗り気じやなかつたが、あの様子からすると荒療治も致し方なしと判断する。

俺は財布のポケットから日本円を出すと花子に握らせる。

「喉乾いたから近くのコンビニで何か買ってくれ」

「え？ こ、こんびに？ というか買うも何もこんな廃墟じや——」

「俺はコーラでいいや。マシユは無難にお茶かな？ オルタはおしごと。所長は……醤油でいいんじやね？」

「ちびっ子、俺は酒だ。酒なら何でもいい」

余計なことを言いそうになつた所長の発言を遮つて、荒廃した冬木市にあるはずもないコンビニへのおつかいを頼む。正直買って来るものは何でもいい。

普通の良識ある人間だつたら信じなさそうな注文だが、チンパンジーを引き合いに出すのすらチンパンジーに失礼なレベルで知能の低いマシユのマスターは、自信満々に頷いてコンビニを求め走り出す。どこから来るんだろう、あの自信。

魔物を蹴散らしながら姿の見えなくなつた花子を確認したキヤスターは、「よし、んじや始めつか」とマシユ（と彼から見て後ろにいる

所長)に杖を構える。

俺は邪魔にならないようにオルタを連れてキヤスターの背後へと回る。

「俺は今から殺す氣で盾の嬢ちゃんと騒がしい嬢ちゃんとローンをぶつ放す。勿論生半可な防御じや受け止められねえ攻撃だ。いいか、宝具つてのは英靈に自然と備わってるもんだ。つまりはまあ……宝具なんて気合で何とかなるつてわけだ」

「な——!?」

「ちよつと、え、はあ!? 待つて待つて待つて、そんなの聞いてな

最近みんなの所長の扱いが雑になつている気がすると、いきなり四大元素全てのローンをバ火力でマシユにぶつけるキヤスターを見て思つた。

キヤスターの提案した『土壇場なら宝具発揮できるんじやね? 作戦』だが、その是非を英靈じやない魔術使いモドキな俺は知らなかつた。宝具なくとも何とかしそうな花子には退場してもらつた。

しかし、キヤスターの作戦を信じてマシユを任せたのだが、時間経てどもどうも上手くいっている様子がない。

むしろマシユが物理的にマジで潰れそうである。所長は精神的にマジで潰れそうである。もしかして効果ないんじや?

仕方ないので仮契約を結んでいるキヤスターに見える位置で令呪をこれ見よがしに振る。

最後の手段だ。俺のキヤスターへの魔力供給が追い付かない。

「キヤスターさんや。もしこれでマシユが宝具使えなかつたら、聖杯回収するまで『みさくら語』で話してもらうからな?」

一瞬何だそれはとキヤスター他全員が怪訝な顔をしたが、聖杯は英靈に現代の知識をサポートする機能が備わっている。つまりはそういうことである。

クーフーリンは意味を理解した刹那で顔が真っ青となり、ジャンヌ・オルタは逆に顔を真っ赤にする。ぶつちやけ令呪を使つた場合の

未来は誰も幸せにならないが、俺も泣いて馬謖を斬ることにしよう。
間違つて自分ごと斬りそつだが。

「早く宝具を使つてくれ盾の嬢ちやあああああああああああああああ
あああああんつっ!! そうしないと俺が死ぬうううううううううう
!! コイツ目が冗談言つてねえんだよおおおおおおおおおおおおお!!」
「は、はい！ ——はああああああああああ!!」

これ本当に気合で何とかなんの？

そう思つた矢先に——それは現れた。

爆発的な魔力を開放させたマシユは地面に盾を刺す。

すると背後に白銀の要塞を顕現させた。いや、あれは城なのか？
どちらにせよ純真無垢な少女が発動させるに相応しい、どんな攻撃を
も跳ね返せると確信させるような素晴らしい建物だ。

美しき白の女王は社会的危機に立たされたキャスターの攻撃を難
なく防ぎ、攻撃の終わりと同時に城は跡形もなく消失した。

「よく頑張つたな、マシユ！」

「嬢ちや……いや、マシユ。本当にありがとう……！」

「ふんつ、やるじやない」

「ましゅううううう！ ジヌがどおぼつだああああああ！」

「——ただいま。言われたもの買つてきた」

「「「ゑ？」」」

こうしてマシユは宝具を手に入れることが出来たのだつた。

おつと心は硝子だぞ？

花子がコンビニから買ってきたコーラを飲みつつ、安心と信頼を七割くらい誇るWikipediaで調べ物をしながら、俺は聖杯があるとされている洞窟を目指して歩いていた。スマホがなぜ使えるのかというツッコミは受け付けない。ドコモの電波が未来からココまで届いてんだろ。

あー、このシユワシユワ感がたまらん。

「こんな廃墟でもコンビニ経営してるとか社畜の鑑だなあ」

「その感想はどう考えてもおかしいでしょ!? 冬木市滅亡してるのはよ！ あとアンタの飲んでいるそれを寄越しなさい！ これ尋常じやないほど塩辛いの！」

「人類の生命力舐めんなつてコトだろ。つか醤油飲んだん？」

醤油のボトルを大事に抱えながら俺のコーラを要求する所長。カルデアが半壊しているので、食糧になるものはたとえ調味料でも確保しておきたいのだろう。

マシュは人生初の『おくいお茶』にご満悦し、オルタは甘つたるい小豆にほつこりし、キヤスターは度数の低い酒にご機嫌な様子。オルタつて甘いものが大好きなのだろうか？ そもそも彼女の生きていた時代に甘いものが回っているイメージがないため、仕方ないと言えばそうなのだが。

それについても……と俺はスマホの画面を見る。

画面には『キヤメロット—Wikipedia』と。

「マシュに力を貸した英靈はイギリス出身の英雄だつたのか。でもキヤメロットって単語だけじゃ特定するのは難しいかも。もうちょい他の情報ない？」

「す、すみません。ふと頭に浮かんだ言葉だつたので、それ以外の情報となると……」

「ああ、別に怒つてるわけじゃないよ？ これするのだつて本来はそこでカルピス原液をラップ飲みしてる花子がやることなんだから」

甘いものが気に入つたオルタでさえ噴き出したカルピス原液を、ゴ

クゴクと腰に手を当てて一気飲みする姿は異様に見えた。俺としては普段こんな感じなので特に気にしないが。

しかも数十箱買いした原液をリヤカーで引いている。どこで手に入ってきたんだろうね。

歩くこと数十分。

俺達は聖杯があるとされている寺——柳洞寺を訪れた。

本来ならば普通のお寺なのだが、長い階段を上つた先にある本堂の前に、一つの影が居座つていた。俺達を視認した瞬間に黒い影は俺をピンポイントで睨む。

「——來たか」

「……顔黒たまごちゃんの擬人化!?」

「私はＮＨＫのキャラではないぞ?」

あ、よく見れば浅黒い肌はいいとしても、髪は銀髪じやないか。全然似とらん。

反対にキヤスターとアヴエンジャーはしやがんで地面をバシバシ叩くぐらいにはツボつたらしい。昔の人の笑いの基準つてよく分かんないわ。

その空氣を変えたいのか影は咳払いをする。

……というかＮＨＫ?

「……もしかして近現代の日本人の英靈?」

「英靈などという大層なものではない。世界に酷使される守護者の成れの果て……とでも言うべきか。叶わぬ夢を追い続けた愚か者……も正しいかもしけん」

「なるほど。ただの厨二病か」

「魔術師など皆そういうものだろう?」

それもそつか、と俺は妙に納得してしまった。

所長の自分に酔つっていた演説然り、俺が半強制的に唱えさせられた黒歴史ポエム然り、キヤスターの意味不明かつ無駄にカツコいい詠唱然り。世間一般では『痛い』と称される言動も、魔術師の間では普通の言動なのだろう。

場所が変われば文化も変わる。価値観も思想も変わる。頭ごなし

に否定するのは失礼だな。

俺は魔術師の厨二臭い言動を『ウナギをゼリーにぶちこむようなもの』と言い聞かせる。どちらも日本人にとつては理解できないものだ。

むしろ中学二年生男子のロマンとも呼べる文化を楽しむのも一興かもしれない。

情報量が多くすぎて軽くスルーしていたが、よくよく考えてみれば俺達を襲つてきた汚染された英靈の中では初めて意思疎通が可能なのが彼（？）だ。しかも俺の『日本人の』という部分も否定しなかつた。ダメ元でも交渉を試みることが出来ないだろうか？

「できれば同じ日本人のよしみで見逃してくれると嬉しいんだけどなあ」

「……君の名前は？」

「M y n a m e i s M i c h a e l」

「本当に日本人か？」

「それ最大のブーメランじやね？」

外見や名前云々はお互い様だろう。

褐色肌の英靈に、名前が英語圏の俺は肩をすくめる。

「ふむ……まあ、いい。君の提案についてなのだが、悪いが私も仕事なのでね。どうしてもこの先に行きたいのならば、力づくで押し通つてもらう他ない」

「暴力は趣味じゃないんだけど……」

俺は、な。

他は知らんが。

「さーて、マシユは安定のタンクをお願いするよ。相手は弓兵だが近距離もイケるクチらしいから、オルタとキヤスターは花子の援護を。花子は以下略」

「はいっ！」

返事して答えてくれたのはマシユちゃんだけだった。マジ天使。キヤスターは詠唱に入つてゐるし、花子は無言で頷くだけだから仕方ないか。オルタは安定の無視。

目の前に居る影——アーチャーは、キャスターによると『いけ好かない近距離遠距離こなせる器用貧乏』らしい。良く言えば手数の多いサーヴァントなので、花子以外はマシユのサポートを受けられるような配置を取る。たぶん俺の思考はマスターとして非常識だろうけど。隣の所長が何か言いたそうにしているが気にしない。

自分の小柄な体格を生かした俊敏な動きでアーチャーの顔を狙つた花子の殴打は寸での所で回避されたが、バーサーカーよりバーサクしている人外の化物は勇猛果敢に攻撃を繰り出す。彼の英靈は双剣で応戦しようとするが、ことごとく花子に手刀で破壊される。時には握り潰す。どういう構造してるんだろう、あの手。

しかし、破壊されたはずの武器は次の瞬間に手元へと戻っている。キャスターの言っていたアレだったのだろう。どこの英靈だろか？

少なくとも彼の英靈は『格上との戦闘に慣れている英靈』だと理解できる。

マスターの方がサーヴァントより格上つて事実もおかしな話だが、ランサーを一方的に殴り殺した花子の猛攻を耐えているのがその証拠だろう。

素人の喧嘩のようで洗練されている化け物マスターの動きを紙一重で避けているのだ。

こうなると俺達の仕事はなくなる。

悟空とセルの戦いを見守る一般人の気持ちだ。下手に援護なんて出来やしない。

「はいドロー4。マシユ4枚引いて」

「えつと……あ、私も同じのがありました！　ドロー4です！」

「げつ、嘘だろオイ。せつかく後2枚だつたのによお……」

「幸運Eがざまあないわね……って、何リバース出してんの!?　私に

出番回しなさい！　燃やすわよ!」

「……手札が全部消えたら勝ちなのよね。……この38枚の手札を使い切れば勝ちなのよね」

だからUNOするしかないだろう?

とうとう猛攻に耐えきれなくなつたアーチャーが花弁みたいな盾を展開し、それを何食わぬ顔で破壊していく花子を横目に、所長が新しく27枚引いていく。

もうデツキと見間違えるレベルで所長の手札が増えしていく様をみんなで笑つていると、ボケにも耐えきれなくなつたアーチャーが叫ぶ。

「貴様等眞面目にやる気あるのかつ!?」

「あるわけないだろうが弓兵の英靈さんよ。つか、よそ見して余裕があるの?」

「——つ!? しま」

それがアーチャーの最後の言葉であつた。ツツコミ氣質の浅黒近代英雄が、対立している化物から目を逸らしてしまつたのが最大の敗因だろう。

彼の鳩尾を蹴り上げた容赦のない小柄の少女は、いつの間にか右手でキヤスターの胸ぐらを掴んでいた。

やることはただ一つ。

「——ゲイ刺し穿ボルつ死棘クの槍クつ!!」

「またかよおおおおおおおおおおお!!」

UNOのカードを舞い散らせながら、紅い閃光は弓兵の身体を貫いた。

寡兵だと奇襲するしかないつしよ

私は静かに聖杯に背を向けて俯く。

淡く、そして強く輝く金色の杯は、薄暗い洞窟を鈍く照らすが、私はあえて万能の願望器に背を向けていた。アーチャーが消滅したのは既に知っているため、洞窟前で待機しているであろう外来の異邦人を迎える形を取っているのだ。

地面に刺した聖剣の柄を握る力が強くなる。

聖杯戦争に水を差し、聖杯に毒を入れた人ならざる者は語った。

この時代に特異点を作り、人理を焼却せよ、と。

所詮は聖杯に招かれた英靈の現身のため、供給源そのものに毒を入れられた私達サーヴァントに抵抗するすべはなかつた。加えて監視もされている。

キヤスターを除く他のサーヴァントは闇に染まり、私でさえも自我を保つのがやつと。せめて今の特異点を維持し、来訪者に望みを託そうとし、カルデアのマスターがレイシフトして来たことで私の目的の半分は達成している。

問題はカルデアのマスターが『グランドオーダー』を達成する器であるかどうか、だ。

生半可な人間では——それこそ『英雄』たらしめる存在でもなければ、あの連中の計画を阻止することは困難だろう。

それこそ私を討つことすらままならない惰弱には不可能だ。

故に私は聖杯の前で待つ。

異邦の者を迎え撃つために。

さて、カルデアのマスターはどうのように来るだろうか？ 撥め手を使つてくるのか、真っ向勝負を挑んで来るのか。

そう考えていると洞窟の入り口から一組の少年少女が現れた。盾を持つ小娘と黒髪の小僧だ。

……ほう、面白い。

彼の湖の騎士の息子を宿した小娘か。汚れ無き円卓の騎士を彷彿とさせる。

そのような感慨深い気持ちに浸つていると、マスターらしき小僧が懐から何かを取り出す。それは折り畳まれた紙のようなもので、開きながら小娘に何か耳打ちをする。何を書いているかまでは読むことが出来ない。

しかし、私の直感が不思議なほどに警報を鳴らしている。ただ紙を出して広げただけ、ただそれだけなのに、どうしてこうも不安になるのだろうか？

小僧は咳払いをした後、大きな声で紙に書かれた内容を読み上げる。

それは洞窟によく響いた。

「——それは全ての疵、全ての怨恨を癒す我らが故郷——顕現せよ、『ロード・キヤメロット』！」

「えーと、マーリン監修『王の話を語る』としよう、私生活の秘密を丸裸編『エクスカリバー・モルガアアアアアアアアアアアン！』

〔約束された勝利の剣〕
脳が理解するよりも先に私は宝具を使用する。

カルデアのマスターの力量を試すだとか、己のかつて抱いた願いだとか、小僧が宝具を撃つてくることを予想して防御を固めていたとか、んなのはどうでも良かつた。

とにかく口を開こうとしている小僧を宝具で跡形もなく吹き飛ばすことこそが最優先事項であると判断したからだ。自然と自分が持つ全魔力を聖剣へと注ぎ込んでいた。

なぜカルデアのマスターが知っている？

思い当たる秘密が多すぎて、カルデアのマスターが何を口にするかが全く予想できなかつた。

もしやマーリンのアホが直々に教えたのか！？……十分あり得る。だからこそ、私は小僧が持つ紙が白紙である可能性を微塵も考えはしなかつた。

非力な小娘の外見と相反するように、かつてはバラバラとなつた円卓は、碎けることなく聖剣の魔力を受け止める。それは反転した私へ

の壮大な皮肉とも呼べるが、同時に私が渴望したものだつたのかかもしれない。

細い腕は確かに星の一撃に耐えていた

「頑張れ頑張れできるできる頑張れもつとやれるつて、やれる気持ちの問題だ頑張れ頑張れそこだ！ そこで諦めるな絶対に頑張れ積極的にポジティブに頑張る頑張る、北京だつて頑張つてるんだから！」

「は、はいっ……うああああああああああああ！！」

やがて魔力は尽き、肩で呼吸する私の前には、盾の少女と諸悪の根源たる小僧が健在であつた。しかし、盾の少女は小僧に支えられて立つのがやつとという具合だ。

奇襲は素晴らしかつたが、所詮はその程度だ。

これでは人理の修復どころか、特異点の解決すらおぼつかない。

「——つ!?」

「へえ……！ 天下のアーサー王様にしては、ちよつとばかり隙が多すぎるんじやない……!?」

直感のスキルの御蔭だろう。

とつさに反応したことで致命傷は免れたが、大きく弾き飛ばされる。

追撃を防ぐために受け身を取つて態勢を立て直すが、奇襲を仕掛けてきた白髪の英靈の顔を目視したことが最大の敗因だつた。

「はつ——!?」

「笑つてる余裕があんの？ ああ!?」

それを鼻眼鏡を付けた英靈に言われるの腹が立つ。

互いに剣を出して鍔迫り合いが起ころ。本来ならば星の聖剣の前に生半可な武具などないに等しいのだが、鼻眼鏡の無様な顔をちらつかせているせいなのか、聖剣を握る力が上手く入らない。

あと個人的にその胸も気に入らない。

「貴様には恥じらいという概念が存在しないようだな……！」

「生憎だけど恥じらいとかそんなもん氣にするようなマスターじゃないんでね……！ アンタのようなスカした王様ボコれるんなら、あの

クソみたいな令呪に意味があるつてもんよ！ 勝てば官軍じやあああああ！」

自暴自棄にも受け取れる攻撃ではあるものの、鼻眼鏡を見る度に力が抜けてしまうためか、上手く目の前のクソ女を屠ることが叶わない。

その結果が何十合と続く打ち合いであり、ついには腹に蹴りを入れられる始末。

こんな田舎娘に出し抜かれるなど一生の不覚だ。

「確かにこりや『騎士の果たし合い』じゃなく『戦争』だわな。同情するぜ、心から、な。焼き尽くせ木々の巨人——『ウイツカーマン 灼き尽くす炎の檻』！」

「——つ!? 貴様キヤスターかつ！」

「じゃなかつたら何だつてんだよ！」

直後、私の足元から無数の細木の枝が生え、拘束するかのように形作り、やがてそれは植物で構成された構成された巨人へと変貌する。形を成した巨人は炎を纏い、檻状になつた胸部に拘束される私を有しながら荒れ狂う。

この宝具はドルイド信仰における人身御供の祭儀が大本となつており、ルーン魔術ではなく、キヤスターを『ケルトの魔術師』たらしめるものなのだろう。

つまりキヤスターは光の御子だと推測する。

抜け出そうと檻を切り刻もうと試みるが、どうにも上手くいかない。盾の少女との戦闘で想像以上に魔力を使つたようだ。

ケルトの魔術師は鼻で笑う。

「いつものテメエならまだしも、嬢ちゃんに全力出した奴に俺の檻は壊せねえぞ？ 不本意ながらキヤスターしてるとはいえ、何も弱くなつたわけじやねえ！」

「だが私は対魔力が高い。貴様の宝具で燃やし尽くせると思つているのか？」

「んなわきやねえだろ。——だが何も俺が仕留める必要はねえ」

キヤスターの意味ありげな言葉の真意を理解するよりも早く、この

戦闘において何度も発揮した直感が新たな脅威を察知する。しかし、この狭い檻の中ではどうしようもなかつたが。

顔を上げるとキャスターの宝具を粉々に粉碎する拳を持つ金髪の小娘が映つた。

この描写だと助けに来たように思えるが、神代の魔術師が創造した檻をいとも容易く破壊した拳は、私の鳩尾めがけて振り下ろされた。なるほど。カルデアのマスターに注意を引きつけ、宝具を打つ最中に三人が洞窟内部に移動、鼻眼鏡の英靈が奇襲することで私を再度誘導し、キャスターが私の動きを封じ、最後に天井に張り付いていた摩訶不思議な小娘が仕留めるわけだ。

「あんぱーんち」

気の抜けた言葉と共に、小娘の拳は私の身体を貫通させ、ついでに大地を穿つ。

洞窟を破壊しかねない衝撃は余波ですら災害となり、聖杯ですら後方に吹つ飛んでしまう。私の下には若干のクレーターが形成され、洞窟の壁に無数の亀裂が生まれる。そもそも初撃で身体に穴の開いた私には関係ないことだが。

ああ、これは文句のつけようがないだろう。

謎なことが多かれど、カルデアのマスター達は人理を守るに相応しい力があつたのだ。これで満足せずして何とする？

致命傷を受けながら消えゆく意識と肉体の中、私はひそかに笑みを浮かべるのであつた。

「で、これ誰？」

やつぱ不満が大きい。

キチガイの前に死亡フラグは無力

特異点の原因となるアーサー王を討伐したことにより、聖杯戦争そのものが終了してしまったようだ。

ついでと言わんばかりにキャスターも消滅してしまい、去り際に「次があるんならランサーとして……でも勘弁だわ。今の言葉は忘れてくれ。マジで呼ぶのは勘弁な。な?」とか言つてた気がする。呼んだ方が面白そうなんだけどな。

残つたのはカルデア組の面子のみ。

あと転がつていつた聖杯。

「これで特異点は修復された……って扱いになるんかね?」

「ああ、みんなよくやつてくれたよ!」

「ええ……そこの鬼畜マスターの非道な手の内を知れてよかつたわ。どんな脳みその構造してたら、あんなゲスなこと思いつくのよ」

「さあ? 生んだ親に聞いてくれ」

まつたく、非力でか弱い素人マスターの俺が、無い知恵振り絞つて考えた作戦だつたつてのによ。手札も情報も時間もないんだから、突貫で見栄えが悪い作戦になるのは仕方ないだろう?

つか作戦指揮とか本来なら所長の役目でしょ。

給料分の仕事をして。

「ジャンヌ・オルタちゃん。あのクソ小生意気な騎士王様を出し抜いた感想をどうぞ」

「お前を殺す」

「人理修復が終わつたらね」

とりあえず彼女の刃から逃げる方法を探さないとな。

まったく、カルデアがアパマンショックしてから考へることが多すぎて嫌になつてくる。同郷のアホ共と行動するよりかは幾分かはマシだが、今のメンバーは頭脳面で信頼できる対象が少ないのでいただけない。

個人的にはもつと楽して人類史を救いたいんだけど。

「先輩、私は聖杯の方を回収してきますね」

「……ん？　ああ、お願ひ」

マシユに聖杯をまかせて、俺は情報を整理しようと思考の海に沈もうとした瞬間、

「——いや、まさか君達がここまでやるとはね。計画の想定外にして、私の寛容の許容外だ」

マシユが回収しようとしていた黄金の器は突然浮遊し、声が聞こえる方角に飛んで行く。もちろん飛んでった方を振り向くと、案の定と言えばそうかもしれないが、ここに居るはずのないカルデアの者が立っていた。

俺は彼の姿を確認した刹那、大きく溜息をついて肩を落とす。

今日は溜息をつくことが多い。溜息をつくことに幸せが逃げていくのなら、今頃俺の幸運はEだろうと現実逃避するくらいには。

「47・48人目のマスター適性者。まったく見込みのない子供だと、善意で見逃してあげた私の失態だよ」

「レフ、教授……」

深緑の帽子にスーツ、ふつさふさのマフラーみたいな髪型、穏やかそうな表情の裏に潜む言いしれぬ不気味さ。カルデアで俺と花子を案内してくれた、所長の保護者みたいな人物、レフ教授がそこに立てていた。

マシユは彼の言葉に、様々な感情が入り交じった状態で名を呼ぶ。いや、それだけじゃない。

所長やモニター越しのロマン、カルデアで彼と共に過ごしてきたであろう面々も青ざめていた。

想定していた反応とは違ったのだろう。レフ教授は嘲笑うかのように口元に笑みを浮かべる。

「その反応だと……もしかして私の正体に気づいていたのかな？　クズ共に感づかれることは私も詰めが甘かった」

「僕も教授を疑いたくありませんでしたよ……」「レフ、そんな……どうしてっ！」

確かに普通なら疑わないであろう。

彼らにとつてレフ教授というのは、人理を守るために共に過ごした家族みたいなものだから。

だから今まで半信半疑だつた。

『——なあ、ロマン。カルデアの修復は終わつたんだよな?』

「まだ完全とは言い難いけど、七割くらいかな? 管制室と重要な場所はあらかた片付けたつて言つても過言じやないよ。不安定だけど君達のバックアップはできるから安心してほしい」

『……管制室に散乱していた死体は片付けたんだよな?』

「え、ああ、まあ。うん」

『そこにレフ教授の死体は?』

「なかつたけど……それがどうしたんだい?』

『なるほどなあ。つまりレフ教授がカルデアを爆破した犯人の可能性もあるわけだ』

『アンタは何を言つてるのよ! レフがそんなことをするはずないじゃない!』

『だけど彼が犯人じゃない証拠もない。自爆して死体が残らなかつた可能性、そもそも内部犯じやない——考えられることは多いが、俺は内部犯の可能性が高いと睨んでる。俺的にはこの際犯人なんざ誰でもいいんだよ。確固たるアリバイがない限り、俺はレフ教授を犯人から除外する気はないぞ』

『確かに死体がないのは不自然だ……管制室が爆破されたのに、肝心の指令室にいた教授の痕跡がないのはおかしい』

『まあ、これも予想の域に過ぎない。だけど、今後レフ教授を始めとするカルデアの誰かが立ちはだかる可能性が極めて高いのは覚悟していくくれ』

なんて一幕もあつたからなあ。

できれば外れていて欲しかつたが、悪い予想ほどよく当たる。

「ほう……本当に消すべきは君だつたのかもしれないね。ゴミの分際

が

「それはどうなんだろうな。どうせカルデアを使えなくするんだつたら、きちんと一匹残らず始末するべきだつたんじやないか？ アンタのは善意じやなくて怠慢だよ。記憶したか？」

「ふん、人間の癖に口ばかりは達者なようだ」

「達者で結構。というか図星だつた程度で達者と抜かすんなら、どうやら人類の敵は大した存在じやないらしい。良かつたな、所長」

肝心の所長は目に涙を含んでいるが。

ちよつと酷だつただろうか？ 現実だから受け入れてもらうほかないけどさ。

「それにしても一番の予想外は君だ、オルガ。どうして足元に爆弾を設置した君が生きているんだい？」

「「……は？」」

おつとこれは急展開。

「いや、生きているのとは違うな。君はもう死んでいる。肉体的にはね。トリスメギストスはご丁寧にも、残留思念となつた君を、この土地に転移してしまつたようだ。レイシフト適性のなかつた君が、死後に適性をてにいれるなんて皮肉な話じゃないか」

まさかの所長死んでた説。

魔術師つて死んでもレイシフトできるんだね。

「そ、そんな……私、し、死んで……え？ う、嘘……」

「あー、そのことなんですが」

ここで申し訳程度にロマンが申し開きしてくる。

〔所長の肉体生きてます〕

「……は？」

今度は啞然とするのはレフ教授だつた。

さつきまでの悪役っぽい笑みは鳴りを潜め、瞳孔が開いたまま顎が落ちるという間抜け面を晒す。

ロマン曰く所長の肉体が死んでいた……否、死にかけ寸前だつたの

だが、どうやら外的要因で治療は完全成功。このままレイシフトして帰つても、所長が死ぬことはないらしい。

魔術師つて死んでも簡単に生き返るのか。すつげー。

そのことを黙つていたロマンだつたのだが、現在進行形で所長にめっちゃ怒られてる。給料半減で済めば恩の字であろうと考えるくらいには怒つてる。

「つ！ まだだ。君達に今のかルデアの様子を見せてあげよう。何、聖杯さえあれば時空をつなげることだって可能なんだよ」

聖杯を掲げたレフの頭上にバキュームみたいな空間が生まれる。あれが特異点と現在を繋げているのだろう。奥にはカルデアで見た地球儀みたいな装置『カルデアス』を見ることが出来た。

しかし、それは俺が見てきたものとは様子が違つた。

確かに俺はレイシフトする前にカルデアスをマシューと花子と見た。それは瓦礫が撤去されて綺麗になつた部屋に向けてではない。そう、カルデアス本体は――

――業務用冷蔵庫の中でキンキンに冷やされていた。

「カルデアスうううううううううううううう！？！」

「お、カルデアスが一部青になつてんじやん。冷蔵庫で冷やしてる御蔭かな？」

「……先輩が想像している方法では青くはならないんですけど

まだ赤いところが目立つけれど、カルデアスは確かに一部青さを保つていた。

レフ教授なんて予想外の連続で思考が停止してんじやん。
だが――これはチヤンスだ。

俺は所長の腰を抱きかかえて、オルタとアイコンタクトで領き合
い、花子に指示を出す。

「花子！ やれ！」

「えいっ」

花子は隙を見てカルピスの一本をレフに投げる。

ただの人間の投擲であれば効力はないに等しいが、ライダーやランサー、セイバーをシンバキ倒した花子の投擲は弾丸の速度を軽く超える。

ちようど聖杯を持つ手に当たったカルピスは、ついでに聖杯を弾き飛ばし、こちらに落ちてくる。

「ロマン！ 例のアレよろしく！」

「君は本当に何なんだい……？ 千里眼でも持つてるの？」

「んなわきやねえだろ！ 最低を想定してたら悉くすべて当たつてんだよ察しろ！」

事前にレイシフトできるよう手配していたので、すぐさま特異点から脱出しようと試みる。

俺は去り際に大声でレフを煽る。

「レフ教授！ 残念だが俺達はここでお暇させてもらうぜ！ アンタ等の親玉に伝えとけ！ 地べた這いざり回つても人類史なんざ消させねえってな！ 俺以外の誰かが」

レフ教授は何か言葉を吐こうとしたのだろう。

けれどもタイミングが悪かった。俺が落ちてきた聖杯を所長を抱えていないほうの手でキャッチした瞬間、レイシフトの光に飲み込まれた。

裏舞台でキチガイは舞う

通信が終わり、僕は画面から視線をそらす。

まだまだシバは安定しないが、どうにか所長たちへの最低限のサポートを行うことは可能となつた。管制室にはカルデア内で生き残つたメンバーが交代でフル稼働している。それでもカルデアの管制室を中心的に爆破された影響は少なくなく、思うようにサポートを行ふことが出来ない。

ひとまず他の職員に復旧を頼んで管制室を出ようとする。
理由は分かつていてる。

僕が現段階で生き残つてているカルデア職員の最上位だからだ。
このような非常事態に上手く指示を出すことが出来ない自分が嫌になると同時に、心を蝕むやるせなさで思わずため息をついてしまう。

どうしてこうも自分がやることは上手くいかないんだろう。

今すぐにどうこうすることが出来ないだけに、なら今までの時間を僕は何をしていたんだろうと思考の悪循環に陥る。

「——まつたく、君らしくない顔だよ。鏡でも見たらどうだい？」
「……やつぱり？」

出ようとした扉の横で腕を組みながら待つていたのは、彼の有名な絵画『モナ・リザ』を彷彿とさせる——いや、モナ・リザそのものの姿をした美女だった。

「無理をするな……なんて今の状況下でそれを言うのは無理があるのかもしれないけど、そう自分を追いつめるような自虐は止めたほうが多いと思うよ？ 自分にも他人にも良い影響は与えない」

「あはは、確かに分かつているんだけどね。それが出来たら苦労はないよ」

「努力ぐらいは見せて欲しいね」

僕は彼——レオナルド・ダ・ヴィンチその人の厳しい評価に肩をすくめる。

その反応を不審に思つたのか、レオナルドは声を潜める。

「……もしかして彼の言葉を気にしているのかい？」

「もしかしなくても気にするよ。さつきからそのことしか考えてないくらいだ」

ここで僕達が共通の話題として出す『彼』は、四十八番目のマスター適正としてレイシフトしてしまった彼だ。どう考へても彼の経歴にある『マイケル』という名前は偽名だが、肝心の本名を確認しようにも情報もないし、外部にも連絡できない。なので僕達は彼を『マイケル君』と呼ぶことにする。

それに今重要なのは彼の素性じやない。

彼が僕たちに残した警告とも受け取れる言葉だ。

『この一連の大事故は誰が原因なんだろうね』

『明らかに人為的なものしか俺は感じないんだが？』

『俺は内部犯の可能性が高いと睨んでる』

魔術師として素人同然の、今回偶然に巻き込まれた普通の少年は、鋭い洞察力と冷徹なまでの疑惑で、僕達カルデア職員の心を大きく揺さぶつた。戯言と切り捨てるには理にかなっている推理である上に、その口から発せられる提案は無視できないものである。

カルデアに勤める者としては否定したい内容であつたけれど、肝心の反論が思いつかないくらいだ。

だから今のカルデア職員の仕事は、緊急時にレイシフトしたメンバーを確実に呼び戻す調整を行つてゐる。

「……彼は本当に何者なんだろうか？」

「一般人じゃないのかな？ 彼はそう言つてたが」

「少なくとも十代後半の少年が、唐突に過去にレイシフトしても動搖せず、戦闘で自分の役割と限界を理解し、司令官さながらの命令を的確に出して、黒幕の推測を行うことが普通だとは言わないよ。彼の友人曰く『悲観主義のチキン野郎』らしいけどね」

「僕も前に同じようなこと言われたなあ。まあ、僕は彼ほど有能ではないけど」

あそこまでテキパキと他者に指示を出し、自分のやることを精一杯している人間に、羨望や嫉妬に近い感情を覚える。彼が今ここに居住指示を出してくれたら、レフ教授のいないカルデア職員にどれほど希望を与えてくれるのだろうか。もしかしたら所長以上に適任かもしれない。

一方でレオナルドは彼のことを疑つてゐるようだ。どうにも年相応の人間がするような言動じやないと勘繰つてゐるのだろう。

「有能かどうかは別として、確かに君は有能ではないね。未だにオルガマリーに例のこと話をしていないんだからさ。どうせ近いうちに知ることになるんだから、言うべきじやないのかな？」

「……そう、だね」

嫌なことから逃げ続けると、大抵後には取り返しがつかなくなる。そう自分では分かつていても、僕はオルガマリー所長が既に死んでいることを打ち明ける勇気を持ち合わせていなかつた。あの理不尽な上司ではあるが、決して悪い子ではない彼女に、自分が既に死んでいるとどうして告げられようか。

損傷の激しい彼女の身体はかろうじで医務室に保存してあるが、恐らく数日で遺体に変わらるであろう。

現実逃避に現実逃避を重ねた結果がコレだ。

レオナルドは自己嫌悪のループに陥つてゐる僕に、今思いだしたと言いたげに話題を変える。

「ああ、そうだ。私が君に言いたかつたのはその件じやなくてね。ダニエル君達の掃除が完了したらいいんだけど、その確認をしてほしいとのことだ」

「ダニエル……ああ、あの黒髪の彼か」

あの笑顔が胡散臭い黒髪で長身の青年の顔を思い浮かべ、無理なことを頼んだと苦笑する。

現在特異点で活動してゐるマイケル君の友人達の一人であり、幸いにも爆破されたカルデア内の生存者である。ダニエル君はマイケル君と花子ちゃんの送迎、他二人はノリと勢いでついて来たんだとか。色々とおかしなことが多すぎるが、今はそのことは指摘しない。

彼等は崩壊寸前のカルデアを復旧している際に、自分達にも何かで起きることはないかと手伝いを買って出てきたのだ。管制室関係は彼等には専門外だろうと、カルデアの住居区画や崩壊している部分の掃除をお願いした。

「三人だけに掃除を頼んだのは申し訳なかつたかな？　彼らにも一通り目途がついたらお礼がしたい」

「もちろんだとも。というか君達カルデア職員生存組が自室に戻らないから、掃除も頼んでしまつたぐらいだ。まあ、住居区画に戻る余裕すらなかつたけどね」

何人かは管制室に寝袋を持つて来てるぐらいだ。

何時間寝れるかと時間を確認しながらレオナルドと管制室を出た僕は、

「——は？」

新品同様の真っ赤な絨毯の敷かれた通路と、数メートル間隔で置かれた調度品、頭上に煌めく高価なシャンデリア、真っ白に塗装された壁に言葉を失つた。静かで穏やかなオーケストラのBGMが僕の心を癒し、極寒だつたはずの通路は適温に設定されている。

一見すると高級ホテルの通路と間違う。

そこに機能のみを追求したカルデアの通路はどこにも存在しなかつた。

「……僕は夢でも見てるのかな？　え、ちょ、これ何？」

「——ああ、ここに居ましたか。探しましたよ」

脳が正常に働かない僕に声をかけたのは、作業着に身を染めたダニエル君だった。どちらかというと燕尾服が似合いそうな彼だが、なぜか作業着も完璧に着こなしている。

「内装に関しては特に指示を受けなかつたんで、このような形に改裝させて頂きました。あ、ここにタブレットがあるのですが、住居区画、食堂、医務室……他多数の改裝はこのようになつておりますが、ご確認いただけますか？」

医務室は最先端技術の結晶とも呼べる機器が元々揃つていたが、住居区画はスイートルーム、食堂はお洒落なレストラン……改裝というよりは改築とも言える変化を遂げていた。

あまりにも全ての部屋が見違えるように改裝されていたので、「カルデアスと呼ばれていた機械も、熱かつたようなので業務用冷蔵庫に保管しておきました」というダニエル君の発言を聞き逃す。後から考えるとやつぱりおかしい。色々と。

「——以上となります。これでよろしかつたでしょか?」

「いやいやいや、よろしいとか言うレベルじゃないよ!? これどうやつて改裝したんだい!?

「とりあえず、ここにあるもので適当に見繕つてみました。もう少し材料があれば、カルデア周辺に作物を作れる場所もできたらんですがねえ……。まあ、非常事態なので無理は言いますまい」

無理とか言う次元の話じゃないんだけど。

呆然としている僕とレオナルドだが、それだけでは終わらなかつた。

タブレットの画面が切り替わり、ダニエル君と一緒に作業着を着た、灰色の髪をした少年が映し出される。いかにも不良少年っぽい彼の背景は雪山だった。

『オイ、ダニエル。洗濯モン関係の部屋はどんぐらい広くする』

『ジョンですか。そうですね……食堂と同じぐらいにしましよう』

『材料が足りねエんだよゴミカスが』

『Amazonにでも注文しなさい』

『テメエ名義で注文すつからな?』

そこで通信は終わる。

次に映し出されたのは白髪の少年だった。僕と同じような白衣に身を包んだ彼のエプロンには多数の血が付着している。マスクを外しながら笑う彼は、メスを回転させながらダニエル君と会話を始める。

『こちら医務室のボブ。所長さんの手術終わったよー』

「お疲れ様です。まさか貴方の医師免許がこのようなどころで役立つとは思いませんでした。人生何が起くるか分かりませんね」

『ユーキヤンで資格取つてて正解だつたね』

「どうやら所長さんは魂が特異点にいるようです。このようなケースは初めてでしようが、ボブの判断で所長さんの本体をお願いします」

『りょーかい』

唚然とした僕とレオナルドを他所に、ダニエル君はタブレットを僕達に見えるように構える。

「えーと、次に発電システムの完全自動化ですが——

「君達本当に何者なんだい!?」

——後に時計塔では今回の改築劇を「新しい魔法か何かか?」と議論されたとか、しなかつたとか。

俺たちの戦いはこれからだ！

起きたら見知らぬ天井だつた。

というか、やけに豪華な内装の部屋で、凄くふつかふかなベッドの上で横になっていたと言うのが正確だろう。混乱している記憶を整理して、面影が微塵も残つていないが、ここがカルデアであることを確認する。

ついでに俺が最後に記憶していたカルデアの一室は、ここまでスイートルームさながらの設備を兼ね揃えていたとは記憶していない。さては他のガイジ共が何かやらかしたな？

「フォーウ」

「お、白モコモコやんけ。お前も生きてたんか」

白モコモコことフォーウ君の確認もあり、ようやく特異点にレイシフトした組が全員帰還できただけを実感する。一般人の俺と動物の白モコモコが生きているのなら、デミサのマシユや死んでも生き返る所長、謎生物の花子も生きていることだろう。

俺は適温に設定された室内で微睡む。

つかココめっちゃ暖かいyan。

加えて白モコモコが絶妙にフワフワしている。

これはもう寝るしかない（確信）。

「んなこと言つてないで起きろつての」

「あ、オルタ居たんだ」

「あ、？ ここに私がいたら悪いの？」

やけに不機嫌なオルタ。

俺が寝ているベッドの端に腰掛け、俺を蔑むように腕を組んでいる。

「そりや俺の自室らしき場所に超絶美女がいたら困るだろう？ 俺だつて思春期真っ盛りの男子なんだぜ？」

「……ふん」

俺の言葉にオルタは立ち上がつた。しかし、さつきの不機嫌さは一瞬にして霧散したようだ。

コイツ感情の揺れ幅が激しいなあ。

……え、まだ確定してないけど俺の部屋なんだよな？

万が一にも俺の部屋がオルタと兼用だと仮定するならば、ベッド一つしかないって時点で嫌な予感しかしないんだが。まさかのオルタと添い寝パターンですか？ まあ、起き上がった拍子にソファアーム見えたから、場合によつては俺がそこに寝るんですけどね。

「クソマスター、ロマニとかいうアホが呼んでたわよ。管制室まで来てつて」

「了解。オルタも一緒に行く？」

「……」

「んじゃ行くか」

オルタが用意してくれた上着（最初で花子に破かれたアレ）を羽織り、フォウ君を胸に抱えて、オルタを伴い管制室へと向かった。

◆◆◆

「あ、おはようございます、先輩。無事で何よりです」

「よつ」

「そつちもね。いやー、大変だつたなあ」

業務用冷蔵庫の前で待つっていたのは、純真無垢で若干天然のマシユ、画面越しでしか会つたことのなかつたロマン、画面越しですら会つたことのない謎の美女、筋金髪幼女がいた。マシユがいち早く気づいて挨拶をしてきたので、笑いながらそれに応える。花子は無視。

そして先の特異点でサポートを請け負つてくれたロマンとも軽い握手。表情を鑑みるに、相当心配されていたらしい。

「そんなわけで、俺の名前はマイケルだ。以後お見知りおきを」「特異点の修復、本当に感謝しているよ。私の名前はレオナル・ド・ダヴィンチ……と言えば知つているかな？」

「……ああ、所長が言つてた召喚例か。なるほどなあ。えつと、俺はどう接すればいい？」

「私のことは気軽に『ダヴィンチちゃん』とでも呼んでくれたまえ」「りよーかい、ダヴィンチちゃん」

アーサー王が本当は女性だつたという事実を先に知つてゐるためか、ダヴィンチが女性であることに違和感を抱かない自分がいる。聞くところによると、美を追究するために自分を『モナ・リザ』に似せているんだとか。

つまり中身は男。

変態だね。友人に同じような居るから気にしないけど。

ところで他のアホ共はどうしているのだろうかと周囲を見渡すと、管制室の自動扉が開く。

そこに居たのは車椅子に乗つてゐる所長だつた。最後に見たときより若干痩せており、彼女の精神が肉体と解離してゐることによる結果だということは、魔術に詳しくない俺でも察することが出来た。つまり、オルガマリー所長は本調子ではないのだろう。

車椅子を押してゐるのは白髪の少年。俺達はコイツのことを『ボブ』と呼んでいる。ボブらしい見た目ではないが。その後続に胡散臭い紳士な見た目をしたダニエル、髪を灰色に染めている不良少年のジョン。

管制室の扉が完全に開——

「所長を業務用冷蔵庫にシユウウウーッ！」

「超！エキサイティン!!」

「口、マ、ニ、だづげでええええええええ!!!!」

いた瞬間にマイページな性格のボブは、車椅子に乗つてゐる人間のことを顧みず、思いつきり助走をつけて車椅子をこちらに転がしていく。時速二十キロは出てるのではないだろうか？ もしかして所長がやつれている理由は、単純にコイツ等に遊ばれたからでは？

某水の駄目神様みたいな顔面作画崩壊させながら、ちょうど冷蔵庫の前にいた俺の方に突進してくる所長を見て、俺は瞬時にロマンを盾にする。

「卑遁・身代わりの術」

「ちょ、マイケル君!?」

ロマンに当たる直前に花子が車椅子の車輪に足を引っかけ、所長は面白い具合に前のめりで転ぶ。つまり、所長はドクターの胸にダイブする形で倒れ込むわけだ。羨ましいですね。

思わぬ形でラッキーをつかみ取ったロマンなわけだが、彼女が彼に對して当たりが冷たいのは知っている。ロマンからしてみれば「この後何言われるんだろう?」つて気持ちが強いのだろう。というか女性の上司の身体を支えるとかセクハラ案件じやないか? 南無三。

だが、そんなドクターを所長が責めるることはなかつた。

逆に涙と鼻水で顔がぐちやぐちやである。

「……ロマニ、貴方は今日から給料100%アップね」

「はい!?

「私気付いたわ! 目覚めたわ! あの頭のネジのはずれたキチガイ共に比べたら、ロマニは聖人だつて! というか私を車椅子で押してくれるのは別にいいけど、カルデア内で爆走するつて何なの!? ドリフトで火花が散るつて何なの!?

そらキチガイ三人衆に比べたら誰だつて聖人だよ。特に、マシユとか何なんだつて話だ。恐らく人類が持ちうる言語じや表現することのできない、とても尊い存在になるはず。

この言葉に三人は微笑ましく眺めている。反省せんかボケナスが。荒んだ現代社会に舞い降りし純真無垢な天使の化身マシユは訳も分からず首を傾げ、ダヴィンチちゃんは察したように溜息をついた。全然興味のない花子は業務用冷蔵庫からカルピスの原液を取りだしてラッパ飲みしている。カルデアスがカルピスの原液のボトルに囲まれている姿は滑稽だ。

彼女を安定させること数十分後。

危険なドライブにより錯乱していた所長は正気を取り戻した。彼女は俺とマシユ、ついでに花子に頭を下げる。

「特異点を修復してくれてありがとう、ございます。貴方達の御蔭でカルデアは救われたわ」

「……所長、熱もあるんですか?」

「おいおいマジかよ。おいらボブてめえ全然治つてないじやねえ

か

「あつれー？ パーツはちゃんとつなぎ合わせたんだけどなあ」

「マシユにマイケル！ 別に熱なんて出てないわよ！ 特に、そこの白髪はグロテスクなこと言わないで！」

所長は咳払いして話の流れを戻す。

「未だに外部との連絡が取れないことから、恐らくレフの言つてたことは本当よ。……なぜかカルデアスが一部青いけど、これが真つ赤になつてるつてことは人類が滅んだつてこと。カルデアは通常の時間軸にないから、かろうじで存続できていると推測するわ」

「そう簡単に歴史を変えたところで未来は滅亡しない。歴史には修正力つてのがあるからね。でも特異点を回復させてもカルデアスが赤いままつてことは、他に要因があるつてことだ。僕等が調べた結果一七つの特異点が発見された。どれも人類のターニングポイントだ」
冷蔵庫カルデアの真つ赤な部分が消え、今度は青い放射線の光がカルデアに満ちた。これが時空の歪みつてものであり、これを正さなきや文字通り人類は終わるのだろう。
もう終わつてるけど。

ここで手を挙げたのは不良少年のジョン。

年上にも敬語を使わず、ナメた口調で口マンに質問を投げかけた。
「あア？ つまり七つある特異点を修復しろつてか？ カルデアの人材不足を考慮すりや……そこのマイケル^{アホ}と花子にレイシフトしろつて言うンじやねエだろうな？ 素人同然のガキを？」
「……ええ、そうよ」

それは苦痛に歪めたオルガマリー所長の返答だつた。

人類と未来の存亡がかかつてゐるのだ。そう答えるを得ない。
だから、俺は溜息をついて承諾するのだつた。

「このままじゃ帰つても何もないんだろ？ つたく、選択しないとか笑えない冗談だ。——いいぜ、とりあえず世界でも救つてみようか」「上に同じ」

「改めてお礼を言うわ。ありがとう」

拳をきつく握りしめたオルガマリー所長は高らかに宣言する。

その小さな身体にどれだけの重圧がのしかかっているのかは俺に走る由もない。それでも、彼女は腹をくくつたのだろう。

世界を救うために。

人類を救うために。

「これより、カルデアはオルガマリー・アニムスファイアの名において、人理継続の尊名を全うする。目的は人類史の保護・及び奪還。探索対象は各年代の原因となる聖遺物及び聖杯。私達は人類を救うために、人類史に挑む！ 魔術師最高位の使命——

——これより、人理守護指定グランドオーダーを開「ぶえつくしよい！」今いいところなのにつつ!!」

やつぱ雪山は寒いわ。

第一特異点 邪竜百年戦争 オルレアン

抑止力の英靈（対キチガイ用）

外界の人類は滅亡している。

現段階で生き残っているのはカルデアの数十人のみ。

これが人類史が滅亡しかけている俺達の現状である。もうすでに救うべき人類のフレンズが滅亡しかけているのに、一般人の俺がどうしろとつて話である。

カルデアにレイシフトシステム……タイムマシンみたいなものがあつて本当に良かつたと思う。なかつたら既に詰んでるじゃん。こういう人類の逆転のチャンスを残しているあたり、今回の黒幕の能力がある程度推し測ることが出来るだろう。

それとも余裕の表れだろうか？　まあ、ナメてくれるならそれに越したことはない。

俺は所長に呼ばれてカルデアの廊下を歩いていた。

外側はガラス張りになつており、雪が深々と積もる様子が見える。へえ、雪つてこんなに積もるんか。

「——おう、人類最後のマスター様じやねエか」

「それなら人類最後のアルバイター様とでも呼べばいいのか？」

T字路でばつたり会つたのは、灰色の長髪を後ろで束ねた、少し俺より身長の低い、ガラが物凄く悪い少年。もちろん外見通りの粗野で野蛮な言葉使いから、コイツがどのような人物かは察することが出来るだろう。

こんなのをカルデアの臨時職員として雇わなければならぬところからも、カルデアがどれほど切羽詰まつた状態なのか容易に想像できるだろう。カルデアの職員の制服すらまともに着こなせないようだ。上着の前のチャックが全開である。

学校の制服感覚かよ。

俺の皮肉が同郷の人間に効くことはない。

その言葉に不良職員は鼻を鳴らすだけだった。

「はン。田舎のクソバイトよりや時給がいいんだぜ？ 最低賃金スレ
スレのコンビニバイトの店長を殴りたくなるレベルにはなア。人類
最後のアルバイトにしちゃ最高じゃねエか？」

「え、うつそマジかよ。そんじや俺の時給も高いんかな？ 今度所長
に聞いとこ」

もしコイツより低かつたら、どうしてくれようか。

密かにオルガマリー所長の処遇を考えながら、俺はスマホを操作し
つつ、ジョンと廊下を歩く。俺が向かっている場所と一緒に聞く。
カルデアの要を同じ地域に置くのはどうなんだろう？ 確かに何
かあつた時に向かいやすい反面、爆撃されたら前のようにな痺してし
まうのではないか？ さすがにドクターも所長も馬鹿じやないから、
そこら辺は対策を講じていると信じたい。既に改築工事をダニエル
に頼んでいるかもしれない。

「つか、マイケル。テメエ何スマホを睨んでやがんだ？」

「……確かカルデア以外の人類つて滅んでるんだよな？」

「馬鹿かテメエ。じやなきや人種史救う理由にならねエだろうが。オ
レ達は何と戦ってるんだ、あア？」

俺はスマホをジョンに見せた。

「妹から『醤油買つてきて』ってLINE来たんだけど」

「……」

これにはジョンも絶句する。

そして急いで自分の携帯端末を確認し始めた。

「……まあ、電波繋がってる時点でお察しなんだけどな。あ、Twit
terも確認しとこ」

「オレもLINE來た」

「何て？」

「『モンスターハンターなう』って」

どうやら写真付きで送られてきたらしい。LINEに添付された画像には『灰色の髪の美少女が血まみれの笑顔でデーモンとツーショットしている写真』という、情報量が多くすぎる上に思考が追いつかない一幕が収められていた。ちなみに写真に写っているグラマラスな美少女はジョンの妹である。遺伝子が仕事していない。

そして、写真のデーモンが冬木市で見た魔物と酷似しており、これが等が人類滅亡の原因であると推測した。

なんかジョンの妹は死んでないけど。

Twitterを確認しても『紅い月珍しい』だの『蛮神の心臓何に使うの?』とか『変な魔物と会つた。とうとう一日七十八時間労働してたら幻覚見えてきた』などと、不可思議なことが起こっているのに、日本は今日も元気なようだ。

俺等のやつてるソシャゲのTwitter救援もいつも通り流れている。

「何か海外はTwitter動いてねエようだなア。日本は存命だが」

「……そりや死んでも仕事は減らないからな」

日本の社畜精神と異世界耐性の前に、人類滅亡程度じゃ母国は搖るがない。

俺は「お母さんがワイバーン狩つて來たんだけど、今日の晩飯どうする?」という新しい通知に、思わず遠い目をするのだつた。

◆◆◆

「先輩、おはようございます。急にお呼び出しして申し訳ございません」

「マシユ、おつはー。あれ、所長いないん?」

「司令塔管制室でダニエル先輩とジョン先輩に仕事のご指導をしてい るようです。詳しい」とまでは分かりませんでしたが……」

中央管制室であるココには、いつもより機嫌が良さそうに見えるマシユと、おまけで白髪のマイペース野郎がニコニコと笑いながら鎮座

していた。話によると、花子は司令塔管制室に遊びに行つたようだ。
所長とドクターが可哀そなうではある。

裏を返せば俺達は安全なわけだ。それを今は喜ぶとしよう。

心の中で口マンと所長に南無阿弥陀仏を唱えていると、マシユがキラキラした瞳で言葉をまくしたてる。

興奮を押さえられないと顔が言つていて。

「先輩、私は昨日自室のベッドで寝たのですが、とつてもフワフワでぐつすり眠ることが出来ました！　他の職員さん達も大満足だったようです！」

「そ、そなうなんだ。……御礼なら長身で胡散臭くて眼鏡かけてる奴に言うんだよ？」

もしかしなくともダニエルである。

数十分ほどベッドの凄さを語ったマシユは、思い出したように要件を述べる。

「所長に頼まれて、先輩の英靈召喚のサポートを任せられました。ちゃんと石も用意してあります」

マシユが特異点で見たような聖晶石ガチャ石を取りだすのを見て、おとなしく業務用冷蔵庫から取りだしたカルピスの原液を水で薄めているボブが口を開く。

「あ、それでサーヴァント？　ってやつを召喚するんだね。そつかそつかー」

「何か思うことでもあるのか？」

「ダニエルがそれを自室で育ててたよ」

「育てる」

「植木鉢に生つてた」

「植木鉢に」

思わずマシユとボブの言つてることを復唱してしまった。

マシユから渡された石をまじまじと眺めてしまう。ダニエルが自室の鉢に水をやる光景を想像しながら、これつて木から生えるんだ……と呻く。この石にはサーヴァントの魔力供給やマスターの魔力ブーストにも使えるが、カルデアで所持する石は数個程度しかないと

説明を受けたので、ダニエルのアホは何をしでかそうとしているのだろうか？と疑問を持つ。

この石だつてカルデアに残つてる最後の三個だ。それが生つてるつて……お前……。

ボブの衝撃のカミングアウトを一旦置いといて、俺は改めてマシユが用意してくれた召喚サークルの前で石を握る。あの恥ずかしい詠唱をするモチベーションは限りなく低いが、戦力は俺の供給ができる範囲内で多ければいい。感覚で理解しているのだが、俺がかろうじで供給できそうなサーヴァントの数は、カルデアのサポート込みで三体程度。

残念だが今は魔術師としての格を上げている余裕はない。自分の不甲斐なさを痛感しながらも、俺は例のポエムを詠唱するのだつた。

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、

王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。

閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！

またもや吹き荒れる暴風。

前回は目を閉じていて目視することはできなかつたが、俺の魔力が

ガクツと持つて行かれる感覚と、手の石から糸の様に召喚サークルへ流れしていく光景を映す。

その虹色に輝く繊細な糸は、徐々に俺の魔力と混じり合うかのように人の形を形成していき、『英靈の座』から英靈たらしめる存在の現身を顕現させる。その形となる英靈の周囲には虹の輪がクルクル回り、魔力が循環していく。

限りなく色彩の薄い桜色の髪に、凛とした佇まい。

物腰が柔らかそうな大和撫子……という印象を見受けられるが、その瞳にはオルタとは別方向の意思の強さを感じ取れる。濃い桜色の着物に、鮮やかな紅色の袴は、大正時代の女学生みたいな出で立ち。ここまでハイカラな服装の似合う人物も居まい。

開かれた薄い琥珀色の瞳は俺を捉える。

若干頬を染めながら、英靈として召喚された彼女は口を開くのだった。

「新選組一番隊隊長、沖田総司推参！　あなたが私のマスターです！」
「え、ちょっと!?」　マスター何で逃げてるんですか!?　いやいや、
待つ――

『新選組』

『沖田総司』

この単語を聞いた瞬間。

俺とボブは脱兎の如く中央管制室から逃げ出した。

影響されやすいお年頃

私は祖国に殺された。

私は政治のために殺された。

私は――国民に裏切られた。

熱かつたのに。

痛かつたのに。

謝ったのに。

許してくれなかつた。

みんなの前に殺された。

どうして?

どうして?
どうして?

どうして?

どうして?
どうして?

どうして?

だから私は復讐したいと思つた。

私を見捨てた祖国を、私を処刑した執行人を、私の処刑を決定した連中を、私の処刑を野次馬根性で見に来やがつた国民を、私を殺す要因となつた宗教を、私の国に攻めてきた敵国を、私を生んでくれなかつた各国を、私を助けてくれなかつた人々を、私を拒絶した全人類を――

いつからだろうか。

何もかも信じられなくなつたのは。

愛なんてくだらない。私が求めるのは血だ。

友情なんてまやかしだ。私が求めるのは復讐だ。

絆なんて脆く崩れやすい。私が求めるのは怨嗟の声だ。
そんな私が、どうして――どうして――

『カイリ　俺はずつとそばにいるよ　これからも　ずっと　必ず帰る
から』

『約束だよ』

「宇多田ヒ○ル　『光』」

「ゾラ、ア、ア!!　ガイ、リ、イ、イ!!」

――たかがゲームで号泣しているのは。

マスターと共有している自室にて、テレビと呼ばれる機械の前。ハーフパンツに赤いTシャツを着て、背中に『ばすたー』と書かれた黒いジヤージを羽織り、『人をダメにするクッショーン』を抱きかかるようにコントローラーを握りしめる自分。床にはふかふかのマットが敷かれており、テレビに繋がっているゲーム機と『キングダムハーツ』と書かれた箱。

私はゲームのヒロインの住んでいる島がBGMと共に復活していく画面を見せられながら、濁音が混じった声で主人公とヒロインの名前を叫んでいた。

もはやそれ以外の感想しか出てこない。

冬木市からカルデアに戻つてから一週間程度。

他の連中が次のレイシフトする準備を進めている間、戦うことしか能のない私は暇の極みだった。

そんなときクソマスターが持ってきた「なんか感動する神ゲー」と、暇を潰すために始めたゲームを借りた。最初は何か主人公がクソ甘つちよろい幻想を抱いていると鼻で笑つていたのだが、いつの間にか感情移入してしまつていてる自分がいた。この奇妙な動物たちにも愛着がわいてきた。

ひたすら光だの絆などを連呼する主人公。

スカした中二病気質のライバルみたいな奴。

ぶつちやけゲームにほとんど出てこないヒロイン。

そんなんで物語が進んでいくのに、途中から寝ることすら忘れてプレイしていた。

主人公が動物と戯れているときは鼻で笑った。主人公とライバルが対立した時は嘲笑った。主人公が仲間を失ったときはザマアと思つた。仲間が助けに来てくれるシーンは何か涙が出た。ライバルがボスを食い止めるシーンは名前を叫んでしまつた。扉を閉めるシーンでは涙が止まらなかつた。エンディング始まつた瞬間にトドメを刺された。

そして現在進行形でタオルなしにエンディングを見れない。

「……なんで全員島に帰れないのよお」

何だこのシナリオは。

決してハッピーエンドではない。いつもならそれで喜ぶのに、どうしてこうも胸が締め付けられるほど苦しいのだろう。

「何でソラみたいな奴がフランスにいなかつたのよ……」

そうすれば少しは私の運命も変わつたのに。

いつもなら絶対思わないようなことを、何故か口に出してしまう。

最後にムービーが入る。

未来を感じさせるような最後だ。彼等の旅はまだ続いていくのだろう。

丁度終わつてセーブをしたので、クソマスターに教えてもらつた通りにゲームの電源を切り、おもむろに立ち上がって涙をぬぐう。自分が考えるよりも先に鬼畜クソキチガイマスターに会いたくなつたのだ。

「……あっちか」

魔力のラインでマスターの居場所を検索し、重い足取りで部屋を離れるのだつた。

◆◆◆

クソマスターの自室を出て、職員用居住区画の一室の前で足を止める。あのクソマスターにくつついて来た3人……名前を覚えてない

から『馬鹿共』つて呼ぶか。あれの同類だし。そいつ等の誰かの自室の前だつたはず。

鍵もかかつてなかつたので私は何の躊躇もなく扉を開ける。

礼節とかどうでもいいし、気にするような相手じやないし。

ただ、入つた瞬間に部屋の中にもいた全員が警戒したように腰を浮かせたのは驚いた。馬鹿共が化物を見るような目をしていたことに対して一瞬イラツとしてしまつたが、後に「何だよ……ビックリせんな……」みたいな表情になつたのもイラツとする。

部屋にはクソマスター、脳筋マスター、馬鹿三人組、盾女、白いモフモフが輪を作るようく座つて居た。

おもむろに一番反応が大きかつた黒髪のマスターが口を開く。

「——つ!? ……何だよ、オルタか」

「ああ？」

「んなカツカすんなよ。こちどら命の危険性孕んでんだから、それくらい見逃してくれ。ほれ、こつち座りな。ジュースと菓子あるぞ」

状況を正確には理解していないが、こいつ等は誰かから隠れているらしい。

内心ザマアと嘲笑いつつ、私はマスターの隣に座つた。白髪の奴から紙で作られたコップを貰い、胡散臭い奴からジュースを注いでもらう。

聖杯からの情報供給で、適当に手に取つた菓子が『ポテチ』と呼ばれるものであることを知る。芋に塩振りかけたものを菓子と呼ぶのかと訝しむが、口に入れた感想は悪くなかった。パリツとした食感や、塩の旨みが自分の食欲を満足させる。

さすがに脳筋のアレみたいに『ポテチ』と『コーラ』という飲み物を馬鹿食いしたりはしない。

他のお菓子もと手を伸ばしていると、クソマスターは話を進め始めた。

あんまり興味がないけど耳だけは傾ける。

「つわけで奴が来たらオルタを囮に使つて逃げる算段でOK?」

「「異議なし」」

「待つて」

私の知らないところで私が贅にされていることが決定されている。私の処刑だつてもうちよつと当事者も関与していたはず。この馬鹿共はフランスの外道共以下か。

制止の言葉に灰色の奴が「あア」と思いだしたようにクソ外道マスターへと提案する。

「コイツ来たばつかだから、話しぐらいはしといた方がいいンじやねエの？ 理由や事情も分からず座に帰りたくはねエだろ」

「一理ある」

「違う、そうじやない」

何か納得したようにしているクソ畜生マスター。

別に理解したからって死ぬことに肯定しているとは思わないでほしい。

「さつき俺が新しい英雄を召喚したんだけどさ、とんでもない化物を呼んじまつたんだよ。主に俺達の命を狙つてくるようなタイプの化物」

「アンタ等殺しても死ななきそうな連中なのに。つてかソイツ誰よ」

「——史上最悪の戦闘殺戮集団『新選組』の一番隊隊長・沖田総司」

言葉を引き継ぐように白いのが語り始める。

この白いのいつもヘラヘラしてるイメージがあるが、この時は真剣な表情をしていた。

「江戸時代末期の旧幕府軍で反幕府勢力を取り締まる活動をしていた連中、その中でも剣豪ひしめく一番隊の隊長つてんだから、沖田総司の強さは分かるよね？ 日本でも割と人気の高い幕末の侍なんだけど……」

ここで言いよどむ。

そんな強い奴のどこに不満があるんだろうか？

「新選組は旧幕府軍との戦い——戊辰戦争にも参加している。まあ、相手は反勢力の権化そのものだからね。あ、戊辰戦争で新選組が戦つ

たのは、薩摩・長州・土佐などの藩だよ。薩摩藩……今で言うところの鹿児島県。僕達の出身地だ

「オレ達の状況は、ピエール司教の前にテメエが現れるようなモンだ」

「あー……」

あのクソハゲジジイの前に召喚された日には、やることはたつた一つだ。

聞くところによると、新選組にとつてコイツ等の住んでいた『薩摩』は敵以外の何者でもないらしく、「薩奸死すべし慈悲はなし」という名言も残っているという。

そして頭を抱え始める馬鹿男4人組。

「これは非常に困りましたねえ。英靈召喚には縁のある者、または本質が似ている者が召喚に応じると聞きますが、このような形の縁があるとは……」

「ダニエルの言う通りだな。よりもよつて俺等の祖先のジジイ共ですら手を焼いた化物とか洒落にならんぞ？ 田ノ浦のじいさんをひよつ子呼ばわりする連中と、ガチの殺し合いしてた侍集団の筆頭とか悪夢かよ。熊をタイマンで殺した近所の田ノ浦のじいさんがだぞ？」
「というか江戸末期の薩摩兵子とか奇跡の世代じゃん。あのドリフトーズの豊さんがノンフィクションのレベルだつた時代でしょ？
当時は刀一振りでビーム出すのが当たり前つて、近所のばあちゃんに聞いたよ、僕」

「つか縁あるなら『島津豊久』だろうが。何で仇敵寄越してきたんだよ」

ちよつと待つて。

私の生きていた時代の少し後の日本つて、そこまで人外魔境の巣窟だつたの？

召喚された英靈と、コイツ等の祖先に恐怖を抱く私だつた。

そんな化物に私ぶつける気なのかコイツ等。

お前が新選組になるんだよつ！

俺は歴史というものを学んで、一つ理解したことがある。
英雄とは人生の失敗者である、と。

そう、例外が多少あれども、たいていの英雄は非業の死を遂げている。ジャンヌ・ダルクの異端者の烙印を押されての火刑は言わずもがな、沖田総司も新選組局長の斬首を知ることもなく病氣で死去している。ダヴィンチちゃんは割とマトモな最後だったはずだが、彼女を『英雄』のカテゴリーに入れていいのだろうか？

ともかく、ヘラクレスもクーフーリンもアーサー王も、英雄と称賛される人類の宝は、何らかの形で悲劇が付き纏っている。それを『願いを何でも叶える』というエサで、聖杯戦争というものが成り立つていたらしくから、英靈として召喚される者達は、生前に何らかの悲劇心残りがあつたのだろう。

なんと歪なんだろう、英靈召喚つてシステムは。

所長は何も考えずポンポンと、キャパシティのギリギリまでサー・ヴァント召喚しようぜ！って意気込んでいたが、どうにかロマンとダヴィンチちゃんが止めてくれた。

魔術師としては英靈なんざ『魔力の塊』、または『従順が下僕』として考えるのが当然らしいので、考え方が歪んでいるのは彼女だけのせいじゃない。いや、サーヴァントと一個人として認識している俺の方が異端なんだろう。火刑待つたなし。

「……」

ところで俺は何か悪いことでもしただろうか？

レイシフトするために中央管制室に集まつたのだが、現在進行形で祖先たちが残した遺恨の炎と対峙させられている俺は、やんちゃしてたジジババ共に呪詛の一つや二つ呴きたくなつた。険しい表情で沖田総司は俺を睨んでいる。

この状況を見れば、容易に英靈を増やしちゃいけないと、オルガマリー所長も理解してくれるだろう。今後の教訓にでもしてほしい。

ちなみにアホ共は司令塔管制室に逃げた。クソが。一緒に死ねや。

「……マスター」

「……はい」

「マスターは——薩摩の人間なんですよね？」
さて、この状況をどうしようか。

俺の出身地が看破されるのは想定の範囲内だ。よくわからん感覺だが、マスターとサーヴァントは記憶というものを一部共有するらしい。実際に俺はオルタの処刑前の記憶を夢で見だし、オルタも俺の記憶を一部夢という形で知っていた。そして記憶は本人に影響を与える。オルタは憎惡以外の感情が出るようになり、俺はフランスとピエールが嫌いになった。

そんな形で、沖田総司も俺の記憶から、俺の出身地を知ったのだろう。ちなみに沖田総司から共有した記憶は、全体的にR—18指定だつた。グロい方面で。さすが人斬りと呼ぶべきか。

令呪で何とかしようとも考えたのだが、冬木市で行われた聖杯戦争とは異なり、カルデア産の令呪に絶対的拘束力というものが存在しない。せいぜい簡単な命令であり、かつ英靈側も納得している命令じやないと、効力が十全に発揮されないので。いくら画をつぎ込んでも、たつた三回である。沖田総司を三回で止められる自信はない。

それ以前に俺が令呪を信じていない面もある。絶対権という言葉に魅力を感じるが、これに固執するのも危険だと判断したからだ。

……オルタは何で『踊つてみたシリーズ』をやつたのかは考えないでおこう。

「ああ、俺は確かに鹿児島——薩摩の人間だ。君の新選組が命を賭して戦った相手の子孫であり、余談だが俺の家系は島津の血も流れている。もう取り繕う余地もなく、俺は君の仇だな。残念ながら」

「それを知つてて私の前に現れたんですか？」

「じゃあ逃げるつてか？ この既に滅んでいる世界の、どこに？」

新選組一番隊隊長の刀より鋭い言葉に、俺は肩をすくめて皮肉を交えた。

これを見守っているマシユは盾を構えて俺を守る準備をし、オルガ

マリーは「マジかよ、こんなケースあんのかよ」と顔を青ざめている。オルタは俺の後ろに控えている。どんな表情をしているのかまでは分からん。

ちなみに花子は既に俺と沖田の間に入っている。身長ちつさいから、俺の視界に入らなかつたけど。

俺は両手を広げた。

すしげんまい。

「ぶつちやけレイシフト前で時間が押しているから、単刀直入に聞こう。君は俺をどうしたい？ 下手に遺恨を残したまま共闘なんざ死んでもごめんだ。ただの足枷になる。俺を殺す気ならさっさとしてくれ。もちろん俺と花子は抵抗させてもらうが」

「先輩！ 何を言つてるんですか！」

「とは言つてもねえ。マシユは彼女を止められる？ 対人のプロフェッショナルだよ？」

死ぬのは確かに怖いが、もう目の前に人間より数百倍強いサーヴァントがいる時点で、ある程度の覚悟はしている。そもそもライン繫がつてゐるから、逃げるにしても、もうどーしようもない。

桜のサーヴァントは刀をつきつける。

あまりにも早い抜刀だった上に、牽制であることは明白だ。俺を助けようとした者達全てが動くことが出来ない。俺自身でさえも抜刀動作が見えなかつた。

さすが、日本屈指の剣豪だ。

「貴方そのものに怨みはありませんが、貴方が『薩摩』である理由だけで、私は貴方を殺す動機になる。私はたとえ人類の危機であろうと、仇敵の命令に従うつもりはありません」

「さすが、新選組のサーヴァント。反論が何も思いつかねえ」

「薩摩死すべし、慈悲はない」

「……うーん、どうしたものか」

俺だつて言いたいことは山ほどある。

だが、彼女の言い分も理解できる。そうなると、衝突でしか解決しないだろうし、力のない俺が物理的に折れる道しか残つてない。

でも俺は困る。

解決の糸口を探そうとも、相手が会話の通じる類の人間じゃないし、最後の最後まで脳みそをフル稼働しているが、全く持つて全然思いつかな——

「……あれ？」

ふと彼女の表情が和らぐ。

目を見開き、何かをひらめいたような表情だ。

「マスターは薩摩人……それだけで斬る理由になる。でも、その点を除けば、人斬りだと怯えることもなければ、一緒に居るとなんか安心しますし、マスターとして仕えるに値する？　というか主としては最高なのでは？　うん？」

ぶつぶつと何かつぶやいている。

「マスターが新選組になれば解決するのでは？」

「お前それでいいんか？」

いや、めっちゃ名案みたいな顔しているけど、それ暴論に近い何かだぞ？　俺を斬らない理由というものを、自分なりに考えてくれていたのは嬉しいけど、根本的なものは解決してないからね？　新選組入れば、お前にとつて全員友達なの？

セイバーとして召喚された日ノ本の侍は、興奮したように花子をどうかし、俺の両肩をがしつと捕まる。そして整った綺麗な顔を、ぐいっと俺に近づけた。

どう考へても強引だとは思うが、彼女は本気で名案だと信じ込んでいるらしい。

「ま、マスター！　唐突ではありますが、幕府を守護するお仕事とかに興味はありませんか!?　今なら私が稽古もつけますし、薩摩とかいう蛮族狩りも楽しくできますよ!?」

「俺その蛮族出身なんだけど……」

「有給も取れるアットホームな職場ですよ！　あと給料が高い！　福利厚生もしつかりとしてます！」

「え、給料高いんですか？」

ちなみに鹿児島の最低賃金は日本でも三本の指に入るほど低い。しかも、ド田舎だから最低賃金以下のバイトも普通にある。

「あ、羽織りは後で送らせていただきます！　つてか私の羽織もどつか行つたんですよね。どこになくしちゃつたんでしょう？　いやー、私もうつかりしてました。そつかそつか、マスターが新選組の一員になれば薩摩とか長州とか関係ないですよね——」

「はいはいはい、そこら辺後にしてー。さつさと次の特異点行つて頂戴」

パンパンと手を叩きながら、所長がもう見ていられないと空気を切り変える。

一話半を使つた壮大な茶番の結末がコレかよと、俺は肩透かしを食らつた気分なんだろう。俺達なんかノリが完全にキチガイな英靈に翻弄されただけじゃねえか。このキチガイさが似ているとでも言いたいのか、英靈の座さん。

「さーて、気を取り直して特異点行つてくるかあ」

「マスター頑張つてくださいね！　新選組の件は後ほど……」

「てめえも来るんだよ人斬り」

ちやつかり留守番しようとしている沖田を、花子がラリアットで引きずる。

マスターの俺と花子、デミ・サーヴァントのマシユ、ポンコツサー・ヴァントのオルタと沖田による、最初の特異点修復の旅が始まつたのであった。

「俺が薩摩なのは全部ダニエルつて奴の仕業なんだ
「許せませんねソイツ！」

黒歴史の上でタップダンス

レイシフト先は、のどかな田舎道だった。

何か空がやけに禍々しい色に染まっていたが、それ以外の点を除けば、日本の辺境のド田舎を彷彿とさせる風景が広がっていた。鹿児島みたいだ。ここは草原というクソミドリが広がっているけれども、鹿児島の知覧は茶畑というクソミドリが広がっているからな。もしかしてココ鹿児島か？

「マシユ、ここ鹿児島じやないの？」

「マスター、残念ながら鹿児島ではないようです」

「えへ、残念です……」

花子の疑問にマシユが答える。

ところで沖田は何を残念がっているのだろうか？ 聞いてはいけない気がした。

まあ、ここが我等が故郷ではないのは明白だろう。だつて寒いもん。

「——先輩。時間軸の座標を確認しました」

「さつすがマシユちゃんは頼りになる。で、今何年？」

「1431年です。百年戦争の真っ只中です」

「へえ、日本だと戦国時代より少し前くらいかあ。ふーん……ん？あれ？」

百年戦争、という単語が引っかかった。

割とごく最近にそのような単語を耳にしたことがあるし、自分でもその内容を検索した記憶がある。しかし、肝心のその単語を検索した理由が思いだせない。

ちょうどその時期は、花子と所長の講義を受けていたはず。魔術師としての知識が圧倒的に不足しているため、とりあえず遺憾の意案件で不本意だけど、所長を師事していた。専門用語を専門用語で解説する教授並には分かりやすかつた。高校時代の先生って考え方が上手かつたんだなど、今さらになつて痛感する。

百年戦争はどこで行われた？

どうやらオルタも俺と同じ顔をしている。

「現在位置とか把握できる?」

「フランスですね」

「オルタ、とりあえずオルレアンとイングランドを焼き討ちすつぞ」

「魔力を回しなさい。決めに行くわよ、マスター！」

場所は理解した。

年代も理解した。

やることも定まった。

俺と竜の魔女の闘争心に火がつく中、誠の羽織を持たない新選組一
番隊隊長が焦る。

この空気についていけないのだろう。

「ま、マスター!? いきなりどうしちゃつたんですか? 沖田さんは
全くこの展開についていけないんですがっ!」

「この時代のオルレアンとイングランドは日本の薩摩と長州みたいな
もんだ。古事記にも書いてある(大嘘)」

「なるほど、つまり敵だと」

おちやらけた空気が一瞬にして、鋭い刃と化す。

沖田も俺達の気持ちが通じたのだろう。

サーヴァントの敵は主の敵。とりあえずシャルルって野郎と、ピ
エールっていうハゲは殺さないと気がすまない。ついでにフランス
も火の海にしよう。イングランドってイギリスだよな? んじやイ
ギリスもバーニングだ。

そんな固い結束が固まる中、水を差す声が。

純真無垢な我等がアイドル、マシユ・キリエライトだつた。

「あの、私達は特異点を解決するために聖杯を探さないといけないん
ですが……」

「大丈夫、大丈夫。その聖杯ってやつもシャルルってキチガイが持つ
てるはずだから。そいつシバいて聖杯ゲットすりや特異点も解決す
るやろ。オルタも満足して、聖杯も手に入るとか、素晴らしい展開だ
と思わんかね? なあ、花子?」

「よくわかんないけど、マイケルに任せる」

俺のヒトラー並の素晴らしい演説に、花子も感銘を受ける。仏頂面で何考へてゐるのか分かんない脳筋娘だが、長い付き合いのある俺には分かる。

コイツ話そのものを聞いてないな。

『許す』や『許さない』は被害者本人が決める事であり、他者から強要されるものじやない。そして『自分を害する行為を許さない者は器量が小さい』と言われがちだが、そりや大きな間違いだ。復讐や報復は被害者が有する立派な権利であり、それを使へた後にどうなるかを考えているならば、ぶつちやけ俺は何をしてもいいと思つている

「……ですが、それだと復讐の連鎖が止まりません。どこかで止めないと」

「なるほど、マシユが被害者になつた時に『許す』つて思うのならば、それは君の自由だ。誰も君を止める権利は持ち合わせていない。だけど、これだけは忘れないでくれ。誰もがみんなマシユみたいに許せるわけじやない。特に、理不尽に処刑されたオルタなんかはね」

政治的に仕方がなかつたのだろう。

確かに、ジャンヌ・ダルクを殺した背景には納得できる。

だが、俺は復讐を許容する。

ある意味、俺のその思想がジャンヌ・ダルクの負の面を召喚させたのだろう。オルレアンの復讐者の主たる者は、やはり復讐を肯定する者なのだ。

「復讐は何も生まない」とか「許すことも大切だ」とか言う連中は多いけど、その言葉を吐く何パーセントが、その言葉の重みを理解しているんだか。俺は残念ながら、復讐否定派の偽善者しか会つたことがない。偽善は大いに結構だが、偽善は時として巨悪となることを理解してほしい。

もちろん、復讐した側は報復される覚悟を持つべきだ。ちゃんとそこら辺は、オルタも承知しているだろう。

マシユは俺の厳しい持論に言葉を亡くし、オルタは驚いたように目を見開く。

俺にオルレアンとの共通点はない。ないけれど、オルタの主として復讐をサポートする以外にも、シャルルとピエールを許せない理由がある。これは、オルタの復讐する単位が国家という点だが――

「まあ、俺は権力を持った人間や権力に媚びを売る人間が、安全な場所に隠れてオルタを批判し、他人には信仰心や異端思想を強制して、処刑台送りにした行為が激しく気に入らない。ただそれだけだよ」

非常に自分勝手極まりない理由だつたりする。

「マシユは靈脈を設置して帰還システムと通信システムの確保。花子はマシユの護衛をお願い。俺とオルタと沖田は近くの街や集落を見つけに行つて情報収集。場合によつては焼き討ち。これでいい?」

「〔異議なし〕」

マシユ以外が了承して、行動開始。

――とはいかななかつた。

「――すみません、それをされると非常に困るんです」

何故か聞き覚えのある、凛とした声に止められたことで。

俺が後ろを振り返つてみると、そこには一体のサーヴァントが佇んでいた。

純白の鎧からは清楚な在り方を伺わせ、大きな旗を携えた女性。金色の長髪は後ろに大きな三つ編みとして束ね、澄んだ薄い蒼色の瞳は硬い意思を物語る。

サーヴァント、なのだろう。敵意は見えない。

だが、他のサーヴァントとは違い、何かが圧倒的におかしい。俺の直感がそう囁いている。

「あ、アンタっ……!」

「……まさか、貴女が来るのは思つても見ませんでした。もう一人の私」

オルタは恨めしそうに目前の女性を睨む。

確かに自分と同じ姿をしたサーヴァントが居れば、当然か。

この場を代表して彼女を見た感想をボソッと述べた。

「……オルタの2Pカラーニー?」

「違います」

つか姉妹か。

息もぴったりだし。

冗談はそれくらいにして、オルタとカラーリングが違うだけの存在であり、黒の魔女対極の印象を覚える相手。実際に少し話しただけで、オルタとは姿以外が似ても似つかないな。

俺は史実の彼女の姿を知らなかつたが、これだけの情報を与えられれば、どんなキチガイでも察することが出来るだろう。

「……誰？」

花子以外は。

「私はルーラーのサーヴァント。真名はジャンヌ・ダルクと申します」

敵意がないことを証明しながら近づいて来る彼女だつたが、突然よろけて前のめりに倒れようとした。あまりにも突然のことだつため、俺はとっさに支えようとする。

どうやら夢げなのは印象だけではないらしい。具合が悪いようにも見える。

手を出した俺はルーラーのサーヴァントの肩を支え——

「あ」

ようとして、思いつきり彼女の胸を驚撃む。

小ぶりのメロンのように大きく、マシュマロよりも柔らかく、しかし美しい形に比例して弾力のある感触を、俺は両手の神経経由で理解する。

T O L O V E るなら顔面でダイブしていたであろう。よく見るとオルレアンの乙女は首まで赤面させている。これはフォローしなくては。

「……ありがとうございます」

「え、あ……え、どういたしまして？」

「寝言は寝て言えクソマスター」

刹那、礼を受け入れた声とは同じような声と共に、頸に強烈な痛み

が走るのだつた。

行動力のあるキチガイは面倒

『黒は女性を綺麗にする』っていう言葉があるんよ。これダニエルに言つたら『黒が女性を綺麗にするのではなく、美しい女性が黒を着てやつてているだけでしょう』って言われたけどさ。何かこう、黒が似合う女性は大人なイメージが個人的にあるんだ』

「な、なるほど……勉強になります。ダニエルさんつて予想以上に紳士だつてことが分かりました」

「そんで同じく完全に俺の持論なんだが、黒は『濃艶』で、反対の白は『清楚』つてイメージがあるんだな、これが。何にも色がついてない』何にも染まらず純粹……つて方程式が、勝手に脳内で作られてるからなんだろうけど。もちろん色のイメージつてのは個人差があるよ?」

「ほえ……マスターは難しい事考えてますね」

フランスで野良のジャンヌ・ダルクに会つた俺達は、ひとまずカルデアとの通信環境を整えようという話になり、ちょうど靈脈の強かつた森を拠点とした。マシユが盾を使って通信環境を整えている間、くつそ暇だった俺は雑談を行う。

どうせならカルデア側の意見も交えながら話を進めたいという疑惑があつたからだ。今聞くより、後で談議した方が効率がいい。

暇つぶしの内容はジャンヌ二人組を見て思いついた『イメージカラーラー』について。マシユは盾を操作しながら俺の話に耳を傾け、沖田は何もわかつてないような反応を示す。その沖田に抱きかかえられて、マスコット的扱いを受けている花子。ぶつちやけ鹿児島県民な俺達の中では、花子が一番薩摩兵子の血を受け継いでる気がするんだが。

俺はジャンヌsに視線を向ける。

カルデア所属のジャンヌは不機嫌そうに地べたに座り込み、「私全然気にしてませんけど?」風を装つて、明後日の方を向いている。

……が、時折オリジナルの自分を横目でチラチラと確認している。

一方の特異点側のジャンヌは、オルタより相手を気にする頻度が多い。どちらかと言えば、具合が悪そうにしている彼女の方が心配だ。

さつきから身体そのものがフラフラしているし、何か要因でもあるのだろうか？

「けどジャンヌシリーズは白い方がエロく見えるよなあ」

「あ、？」

どうして黒い方が怒るのだろうか？

情緒不安定過ぎない？

なんて伏線どころか脈絡さえ持ちえない雑談に花を咲かせていると、マシユが盾のセットアップを完了させたようだ。カルデアの性格的に頼りなさげなトップと、精神的に頼りなさそうな次席がスクリーンに映し出される。

これが人理修復の最後の砦を司る二人なんだよな。

心配になってきた。

「マシユから話の流れは聞いてるわ。サーヴァントに情報を吐かせなさい」

「あ、紹介するよ。今それに映つてているアレが、俺達人理修復をして活動している機関の長。オルガマリー所長だ。俺達の間では恐怖と畏敬を込めて『オルガ・イツカ』って異名で慕われてるよ」

カルデアが何を目標として動いているのか、どうしてフランスの地にやつて来たのか、俺達がどこから来た魔術師なのか。白いジャンヌ・ダルクが疑問に思いそうなことを、俺は代表として説明した。というか現在進行形で俺以外に説明できそうな奴がない。

オルガ・イツカは「え、そ、そうなの……悪くないわね」と納得している。名付け親はジョン。理由は人理修復終わるまで止まらなさうだから。

そして、今度は白ジャンヌが持ちうる情報を提供してくれた。

——けれども、それは俺たちにとつて衝撃的なものだつた。

「フランス国王シャルル七世とピエール・コーチョン司教が殺害され、フランス全土は突如現れた竜によつて壊滅状態。それを行つたのは黒い魔女ジャンヌ・ダルク。…………つまりそこの黒いの、みたいな奴が

今回の黒幕つて考えればいいんだよね？」

「……はい」

「表出ろやクソマスター」

「……表なんだけど。うーん、随分とややこしいことになつてゐるなあ。つか、フランスのシャルル殺したことが特異点になる理由つて何なの？ そう易々とは人類の転換期つて生まれないって話だよね？」

俺の素朴な疑問に答えてくれたのはロマンだった。

「フランスは人類史上において、人間の自由と平等を謳つた最初の国家なんだ。この権利が生まれるのが遅れれば、それだけ文明は停滞してしまう。フランスという国家がなければ、今の私達は中世と同じような生活を送っていたんじゃないかな？」

「……オルタが殺したから、特異点になつた？」

「花子ちゃんが差しているのが、この世界に生まれた黒いジャンヌ・ダルクなのであれば、その認識は正しいよ。彼女曰く、この世界で生まれたもう一人の黒いジャンヌ・ダルクは、フランスという国そのものを憎んでいるんだろう？」

ただロマンは現在の状況をまとめただけである。

しかし、オルレアンの乙女と謳われた聖女様は、自分とは違う思考を持つた自分の現状を指摘され、ただでさえ具合が悪そうな表情をさらに歪める。

「どうして……復讐なんて」

「そりや自分を殺した相手は憎いですよ。薩摩死すべし」

「人斬り侍と同感つてのは癪だけど、私モドキの気持ちは分かるわ。オルレアンなんて救うんじやなかつたつて、今でもマジで思つてるわよ。アンタ甘すぎ。コーラの数千倍くらい」

例え方が俗物過ぎるが、おおむねオルタに同感だ。

やはり聖女と呼ばれるだけはある。こういう考え方の持ち主が世界を救い——そして滅ぼすのだろう。何とも皮肉な話だ。
彼女は黒いジャンヌと一度だけ対峙したらしい。

その時は他に呼ばれた野良サーヴァントの助けで脱出できたらしが、今頃そのサーヴァントたちは果たして無事だろうか？ フアフニールっていう龍もいたつて話だし、生存は絶望的と考えたほうがいい。

味方サーヴァントもいない。相手は聖杯を持っている。相手側にサーヴァントが多数。正直、俺達の到着がなければ、比喩表現なしで

フランスの特異点は詰んでいただろう。彼女も本調子には見えないし、第一特異点でこの惨状じや、先が思いやられる

「さて、シャルルとピエール死んじまつたし、こりや本格的にフランス救う理由がねえな。どうするよ、復讐者さん」

「ああ？ んなの私モドキを殺すに決まつてるでしよう？ 生意気に竜なんか召喚してやがるし、聖杯持つてるのは絶対そいつよ」

「竜の召喚つて、魔術の中では難易度が高いんだつけ？ そんじやパツとジャンヌ・オルタ・オルタがいる『監獄城』つてところに行つて、パツと黒幕叩き潰して、パツと帰りましょか。あんま長居したところで、いいこと何一つないわけだし」

「こんなクソみたいな場所に長居するわけないでしょ。馬鹿なのアンタ？ 私早くキングダムハーツのCOMやりたいんだけど」

オルタは復讐の対象を『国王とハゲ司教十欧州』から『復讐対象ぶつ殺しやがつた私のそつくりさん』へとシフトチエンジしたようだ。

俺が復讐許容したのは裏の理由として、特異点攻略に協力してくれた彼女のモチベーションを保つためつて面もある。人類救つてくれんだから、これぐらいの役得はあつてもいいよね？ って感覚である。対象を変えることでオルタが渋々納得してくれるなんなら、こっちとしても願つたり叶つたりだ。

そんなわけでカルデア御一行は黒幕の本拠地『監獄城』という目的地へと向かう準備をする。

俺は「そういえばさー」と軽い気持ちで、白いジャンヌ・ダルクへと話題を振つた。

「そういうやジャンヌ・ダルクさんは具合悪そうだよね。大丈夫？」

「か、かろうじで大丈夫。現在の私はルーラーなのですが、ルーラーとしての機能がほとんど使えません。ステータスも大幅に弱体化しており、つい先日魔力の供給も止められました」

「……え、それ相當まずいんじや」

「も、もう一人の私のところまで案内するまでの魔力はあります。そ

の後はお手伝いさせていただくことはできませんが、どうか、フランスをお願いします」

花のように可憐な笑みを浮かべる白の聖女。

俺は目を見開いた後、少し脳みそを回転させる。

打算と損得勘定、現状のカルデアが抱える問題と、魔術師として得た知識をパズルのように組み合わせ、俺は一つの結論を導き出した。

「なら大丈夫ね。マイケル、すぐに監獄城へと向かいなさい」

「……なあ、所長。一ついいか？」

「また何か面倒な事考えたわけ？」

「ジヤンヌと俺が契約したら、彼女は消えないよな？」

「はあっ!?」

所長とオルタの声が重なる。

現在カルデアの戦力は少なく、召喚を行うだけの余裕も聖晶石もない（除・ダニエルの栽培）。そして、召喚したとしても沖田の二の舞になる可能性もある。土方歳三とか呼んだ日には第二次戊辰戦争勃発である。その点、ジヤンヌ・ダルクなら性格上問題もないし、既に一匹飼つてる。

次に、ルーラーとしての機能。もしかしたら召喚の不備としてルーラーのスキルが、マスターが居ない故に正常に発動しない可能性を考慮し、『真名看破』や『神明裁決』は今後役に立つと考えられる。

最後に案内途中で消えられても困る点。俺達は監獄城がどこか知らん。

以上の点から、俺はジヤンヌ・ダルクを俺が契約する最後のサーキュulantとして推薦した。あとエロくて綺麗で可愛いし。

俺の巧みで素晴らしい説得に、ちよろさで右に出るものはない所長は俄然乗り気になる。

オルタはソウルイーターのエクスカリバー見たときのような表情をしているが、面白いゲームを紹介することを条件に渋々……本当に渋々……くつそ渋々に頷く。

よし、蒼の少女と赤いトカゲが出てくる周回ゲーを紹介しよう。

「つわけで、すまないが君にも人理修復に付き合つてもらうぞ。——

告げる、汝の身は我的下に、我が命運は汝の剣に——聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば——我に従え。ならばその命運、汝が『旗』に預けよう!」

「……ええ、分かりました。——ルーラーの名に懸け、誓いを受けます

……貴方を我が主として、認めましょう」

こうしてカルデアに最新にして最後の英靈が加入したのであつた。

「ところで……マイケルは監獄城に乗り込む準備はしてあるの?」

「ああ、城を壊す用意はしてある

〔壊すの!?〕

ジャンヌ一人はややこしい

「……あれが監獄城ね」

どつかの誰かが提唱した『馬鹿とキチガイは高いところが好き』という名言に準え、俺達カルデア一行は高台から敵の根城を見下ろしていた。望遠鏡で姿を確認した俺は、マシユに望遠鏡を手渡して、カルデアの連中と連絡を取る。

こうも敵の本拠地がむき出しだと勘ぐつてしまふ。

「ロマン、監獄城の様子は?」

「ちよつと待つててね……うーん……えーと……これは少し難しいな。城の周囲に強固な結界が張つてあるね。この魔力量は完全に魔術やサーヴァントが張れるような結界の域を超えてる。間違いなく聖杯を使つてるとみていいよ」

「データ収集ありがと。やっぱ一筋縄じゃいかないかあ」

敵が守りに入つた。この事実に俺は表情を歪める。

聖杯を持っており、尚且つ戦力は相手が上。挙げ句の果てに籠城戦と洒落込む当たり、カルデアの面々があちら側に認識されると見て間違いないだろう。

フランスを壊滅させる目標はある程度達成されており、戦力を十分に補充した状態で城に籠る。シャルル王が死去しているからフランスが完全に自然と消えるのは時間の問題だ。彼女等が手を下さなくとも、特異点を修復しなければ、文明の停滞は決定する。

黒幕たるジャンヌ・ダルクが復讐心を露わにし、強欲にも他の集落をゲリラついていただければ、こちらにも勝機はあつただろう。だが、下手に防衛に回れると手が出しにくい。

城や要塞を攻撃するには、相手の三倍以上の兵力を以て、十倍の損害が出ると言われている。

ジャンヌ・ダルク……じやねえな。バツクに有能な参謀が居ると見た。

「ジャンヌ」

「なんでしょうか」「なによ」

「……」

手遅れ感が半端ないと思うのだが、これはややこし過ぎではないか？

俺の呼びかけにジャンヌ・Sが反応するので、思わず頭を搔く。俺は白い方のジャンヌ・ダルクを呼んだのだが、監獄城を親の仇のように睨んでいたオルタも反応したようだ。

返事をした白い方のジャンヌ・ダルクは、俺が困り顔をした理由に気付いたのだろう。苦笑しながらも代替案を提示する。

マシユといい白ジャンヌといい、なんか周りの女性達が健気過ぎない？ オルタも何だかんだ良い子だし、花子や妹しか女性を知らない俺達にとって、御淑やかな女性は珍しい生き物だつた。鹿児島の女性は花子や沖田さんよりもヤベエ奴等しかいないし。

「私の姿は『レティシア』という少女の姿を借りております。よろしければ、今後は彼女の名で呼んで頂ければ、混乱することがないと思うのですが」

「いや、『ジャンヌ・ダルク』って名前は君のものだ。むしろオルタの方が贋作だろう？ なのに君が名を偽る必要はないと思うけど」

「はいはい、どうせ私はクソ聖女のパチモンですよ」

鼻を鳴らしながら捻くれ、しかも若干涙目のオルタに苦笑しつつ、言葉を続けた。

マスターの俺が自分を『贋作』と呼んだことが、何気に堪えられなかつたのだろう。でもお前は俺達のこと『キチガイ』って言うじやん。実際に俺はオルタを貶めるために言つたわけじゃない。

キチガイ共相手なら遠慮なく貶め罵り蔑むのだが。

「というわけでオルタの新しい名前をつけよう。あ、マシユは監獄城に張られた結界の規模と正確な座標をカルデアに送つてくれない？ 他の人にはできないからさ」

「はあっ！」

「分かりました！」

ぴしつと敬礼したマシユは、即座に仕事へと取りかかる。

花子は沖田とスマホのカメラ機能で遊んでいる。二人で自撮り写

真を収める姿は微笑ましい。

オルタは『何言つてんの馬鹿なの?』の意味を込めた「はあ?」を、全力で自分のマスターにぶつけたが、俺的には今までがおかしかったと説明する。

「考えりやオルタ、オルタ言つてるのが不思議なんだよ。贋作なんて言い張る方がアホみたいだ。ないなら名付けりやいい。今ここに居る贋作のお前は、『ジャンヌ・ダルク』ではない別の物語を紡いでるんだからさ。どつかの人の言葉を借りるんなら、『これは誰でもない、お前の物語だ』つてこと」

お、これ魔術師_{中二病}ポイント高い台詞なんじやない?

どうせならサングラスかけて言いたかつたなーと考え方を他所に、オリジナリの彼女は俺の提案に乗り気なようだ。わざわざ手まで挙げて候補を上げる。

「はい！　はいはい！　それこそ『レティシア』にしましよう！」
「どうしてアンタの姿の元ネタの名前にしなきやいけないのかしら？
脳みそオルレアンなの？　私は贋作という立場に満足しています。
それに、今さら、あ、新しい名前……だ……なん……て……」

前半は氣丈に振る舞つていたが、伝説のガードの名言である『自分の物語』つて部分に、思つた以上に魅かれているようだ。意外と承認欲求と主人公願望のある彼女は、『ジャンヌ・ダルクではない、新しい一個人の名前』を、失笑を以て斬り捨てるることはできなかつたのだろう。

俺はオリジナルの考えた名前は良いと思つた。

純粹に『レティシア』つて響きが良いのもあるが、他にも理由がある。

「俺も白いジャンヌの名前がいいと思うな」
「……アンタも白い方の肩持つわけ？」

「いや、実は前から『オルタつて名前はあんまりだよなあ』つて、麗しき友人達に募集かけてみたんだが……」

ひよつとこオル太郎（マイケル）

メタモン（ジョン）

オル・レアン（ボブ）

ゼアノート（ダニエル）

ポチ（花子）

「俺達のネーミングセンスって壊滅的なんだよなあ」

「花子ちゃんの『ポチ』とかどうですか。沖田さん的にポイント高いです」

「荒川・ジョセフィーヌ・万次郎は？」

「私のつ！ 名前はつ！ レティシア、です！」

例え決められた名前だとしても、彼女は自分の名を手に入れた。オルタ改めてレティシアは、新しい人生の一步を踏み出したのだ。

彼女は存在しない英靈。
実際にそうだ。『ジャンヌ・ダルク・オルタ』という名前は存在しない。

故に——彼女には帰る場所はない。

サーヴァントは消えたら英靈の座に還るのだが、イレギュラーで生まれた彼女は本体がないのだから、消滅されたら再度召喚はされない。記憶にも残らず、喜怒哀楽の感情すらも消え失せる。

だから、後に人理修復した世界で、彼女の名前は残ることはなかつた。

カルデアに召喚された記録も抹消され、名前も残ることなく、英雄として祭り上げされることもない。

だつて——ジャンヌ・ダルク・オルタは存在しなかつたのだから。

まあ、英靈の座の代わりではあるが、後に鹿児島市役所で『レティ
シア・ダルク』って名前が戸籍に登録されるんですけどね。

これは何の二次創作ですか？

僕はマシューから送られてきたデータを眺める。

監獄城と呼ばれる城の結界が数値化されていたのだが、読み上げるのも馬鹿らしくなるぐらい高い数値が載っていた。さすが魔力の炉『聖杯』とでも言うべきか。

ちょうど所長も僕のモニターに近づいてくる。

数値に眉をひそめるのは同じだつた。

「これ、どうやって突破するのよ……」

「マイケル君は何とかするつもりですが、これ一介の魔術師に何とかなるものなのかなあ？」

「どうせ邪道で突破するんでしょう」

彼女の言葉は皮肉に近いものだつたが、僅かに信頼とも呼べる何かも含まれていた。しかし、前までは下位の魔術師に信頼すること自体しない人間だつた。

これも成長なのだろうか？

昔からの知り合いであるオルガマリー所長の姿に感慨深く思つていると、隣でコンソールを弄つていたダニエルから情報提供を促される。

冬木市の特異点修復から、オルレアンの特異点にレイシフトするまでの約一週間。たつた数日でカルデアの精密機器を自由自在に弄るだなんて、彼のポテンシャルの高さを嫌というほど理解させられる。これが『二ホンのサツマ人』なのか。

「——ふむ……予想以上に大きい」

「何とかなるか？」

「想定以上でしたが、まあ、何とかなるでしょう。試作段階ではありますぐ、何事もチャレンジしなければ結果は出ません」

「んじゃ任せた。通信だけは繋いどいてくれ」

ダニエル君は頷き、何やら僕の知らないデータを操作し始める。

尋常ではない速さでモニターに文字が打ち込まれる。

……待つて待つて待つて、そのデータはカルデアの最重要機密だよ

ね!? というか他の人間には進入できないシステムなんだけど!?
……え、セキュリティが甘い? そ、そうなの?

すると、ダニエル君が操作するモニターに新しいウインドウが開き、レオナルドが映し出される。姿が見えないと思ったら、どうやらカルデアの動力機関室に居たようだ。ダニエル君が修復してくれた発電所の部分だ。

しかし、レオナルドが絡んでいるだけで、凄く嫌な予感がする。特に改築の鬼であるジョン君も一緒に居るようなので、彼等のやらかし案件の相乗効果は大変なものだろう。

「こちら司令塔管制室。準備はよろしいでしようか?」

『準備バツチリさ。まさか、こんなことを考えつくとはね。日本人が未だに焼却されていない理由が分かつたよ。私も随分と調子に乗つてしまつた』

『不具合は全くねエ。さつさと起動しろ』

ウインドウが消えたのを確認すると、ダニエル君は所長に向き直る。

ダニエル君の真摯な姿勢に、腕を組んで彼のやり取りを眺めていた所長はたじろぐ。

「所長、監獄城の結界破壊の許可を」

「……はあ。ここでNOって言つても無理矢理やるでしょ、貴方達は。早くマイケル達のサポートをしなさい」

「了承しました」

所長は『何をどうやつて監獄城の結界を破壊するのか』を詳しくは聞かなかつた。ダニエル君が所長に確認を取つたことが、彼女の動きを鈍らせたのだろう。

オルガマリー・アニムスフィアは誰からも認めてもらえなかつた。実際にカルデアの機能は僕に一任されており、職員も僕に指示を求めてる。彼女は今まで所長という立場でありながら、基本的にレフ教授の傀儡のような存在だつたのだ。つまり彼女そのものは必要とされていなかつた。

けれども、アルバイトのダニエル君は所長に確認を取つた。わざわ

ぞ『上司である所長に確認を取る』ことで、彼女を上の人間として認めていることをアピールしたのだ。承認欲求の強いオルガマリーは、さぞかし内心喜んでいるのだろう。

彼はモニターに無数のウインドウを展開させ、チェックを行う。

そして、ちょうど足元にやつて来たフォウ君を頭の上に乗せ、椅子から立ち上がり、管制室に響き渡るような大声で全職員に伝達する。

「これより、カルデア防衛機能、システムコード『イゼルローン』起動。主砲により、監獄城の結界を破壊する」

「は？」

マイケル君の言葉が終わつた瞬間、カルデアの足場が大きく揺れる。

僕は倒れそうになつた所長を咄嗟に支えたが、頭の中は混乱の嵐だつた。また敵が攻めてきたのか？という疑心暗鬼に駆られたが、爆発や停電が起こる気配がない。

しかも、ダニエル君おろか、他の職員は突如の揺れに動搖することなく職務を全うしている。まるで今から起きることを知っていたかのように……いや、ダニエル君の指示で何かをやつてている？

「聖杯の起動を確認。カルデアの上昇と同時に魔術結界の再度構築を行います」

「雪山との接続解除完了。指定域までの浮上が完了しました。カルデア動力に伝達。防護壁の形成を行います」

『動力機関室より、魔術流体金属の形成を開始。終了まで20秒』
「浮遊砲台全八十門、ステルス監視衛星全機を外部へ展開。動力機関への接続許可を」

「供給安定化を確認次第、主砲への電力供給を行つてください。主砲を指定座標に固定します」

それに、僕が聞いたことのない単語が飛び交う。どれもすべてが物騒だ。

忙しそうにコンソールで動かすダニエル君に、さりげなく質問を行つてみる。所長はパニック状態だ。

「えつと……これは？」

「前に発電システムに防衛機能を取り付けたと言いましたよね？それを起動させているだけなので心配ありません」

「全然安心できないんだけど。そもそも『イゼルローン』って何だい？」

「マイケルが愛読してゐる小説に出てくる施設の名前です。とりあえず設定と名前を引用しました。カルデアはどうも秘匿性は完璧なのですが、防衛機能が不十分だとダヴィンチちゃんに相談されまして、彼の防衛システムを真似てみたんです。ほら——」

カルデアの司令塔管制室にある大きなスクリーンに、カルデアの今の状態が大きく映し出されていた。高度60000に埋まつた地下工房『カルデア』——はそこにはなかつた。

淡いシャボン玉みたいな流体に包まれ、カルデアは雪山から離れて浮上していたのだ。流体には所々に小さな機械が動き回つてゐる。重力に逆らいカルデアは空中に停滞し、吹雪をものともせず空中浮遊に成功した天文台カルデアはそこにあつた。

「その小説の施設の名前は『イゼルローン要塞』だつたので、システムコードの名前として用いました。さしづめ『カルデア要塞』でしようか？ 地下から襲われる心配もなく、停滞し続けているため磁場の影響下にある。浮遊砲台は液体金属の中で自由に移動できるので、どの方向からも迎撃可能になつてます」

「この液体金属は……もしかして魔術が使われてゐるのかい？」

「そうです。イゼルローンは現代技術では再現不可だつたので、魔術を用いて作れたことに感動すら覚えます。液体金属には衝撃を緩和する効果と、隠密面の効果があります。ちなみにステルス機能の偵察機も展開しています。まず外部から攻撃されても墜ちることはない

でしょう

まさに難攻不落。

天文台だった機関の基地は、日本の少年達によつて軍事要塞へと変貌したのだつた。

「ほら、レフ氏が聖杯を用いて、過去の冬木市と現在のカルデアを繋いでいたではありませんか。つまり——我々が制作した主砲を時代を超えて指定の場所に撃つことになりますか？ それをダヴィンチちゃんとの合作の下、できてしまつたんです」

「ダニエル要塞防衛指揮官。主砲の充填が完了しました」

「そうですか、では始めましょう」

すでに職員から役職で呼ばれている！？

ワクワクしながら『要塞のメンバー』を演じている職員からの言葉に、ダニエル君は大きく頷く。何気に職員たちも楽しんでるのだろうか？

なんて考えていると、液体金属を悠々と動く機械の中でも一番大きい砲台の前に、大きな時空の歪みが生まれる。レフが出したものに酷似しており、歪みの先にはマイケル君たちがレイシフトしているオルレアン……その監獄城が見えた。

主砲らしき機械に莫大な魔力が集まる。職員たちから歓声が上がる。

〔聖杯の鎌、撃てっ！」

カルデアス・ハンマー

ダニエル君の指示の下、主砲から放たれた光が、結界を意図も容易く破壊し、轟音と共に監獄城を跡形もなく粉砕した。

ついでに僕の常識も粉碎した。

どんどんしまつちやおうねー

崖の下の城を眺めていた俺達は、次元の裂け目みたいな空間から放たれた眩い光に視界を染められる。

なぜか白く塗りつぶされた視界に『心か』の二文字が見えたような気がしたが、きっと幻覚だろうと無理矢理納得する。

視界だけじゃない。光の束は俺の鼓膜にもダイレクトアタックを仕掛け、一時的にだが音も聞こえなつてしまつた。そりや強固な結界を貫通するようなバ火力を城単位にぶち込めば、騒音被害は尋常なものではないだろう。ジャンヌが何か言つてはいるようだが、俺には聞こえん。

視界が晴れると、そこには何もなかつた。

ジャンヌに案内され、実際に監獄城をこの目で確かめなければ、隕石が落下した跡地ぐらいの感想しか出ないであろう有様だ。

そりや監獄城跡地にクレーターしかなければ当然か。中央にヤムチヤが転がつてそう。

「おっしゃ、計画通りだな」

「あの、先輩。監獄城の結界どころか、本体が消え失せたんですが」「誤差の範囲内だ」

実際に監獄城の結界は跡形もなく消えたのだ。

彼女等を守る防壁もなく、膨大な魔力を生み出す聖杯の一撃を受けたサーヴァントは、かなり弱体化しているだろう。ダヴィンチちゃんと構想を練つていた際に、主砲の威力を数値で打ち出した彼女が、「……理論上は並のサーヴァントが消滅するね」と述べていた。

かなり攻略しやすくなつたと推測する。

俺は双眼鏡でクレーターレを確認し、カルデアに連絡を取る。

所長とロマンは思考回路がショートしてゐるだろうから、消去法でダニエルだけが頼りだ。

「要塞防衛指揮官、敵の数は?」

〔魔力反応を示す個体は五。ジャンヌさんからの情報と照らし合わせて、黒ジャンヌ・ダルクとジル・ド・レエ、バーサク個体三騎でしよ

う

「……お前、先に計測してやがったな？ 先に情報寄せや」

「はて？ 何のことやら」

しらばつくれていてるダニエルとの情報を断ち、俺はサーヴァント四騎と未確認生命体一匹を引きつれて崖を降りる。このパーティメンバーの中には自力で崖を降りれない非力な面子もいるので、そこら辺はサーヴァントに何とか助けてもらう。

簡単に描写すると、俺はジャンヌにお姫様抱っこされながら、崖から落ちている。笑いたきや笑え。自力で崖から落ちようものなら、ミンチになること確定である。

あと聖女の胸の感触を堪能できる。羨ましいだろう？

……ところで、マシユはまだデミ・サーヴァントだから、崖からの着地も難なくできるのは分かる。でも、花子が当たり前のようになに崖の側面を走っているのは、そろそろ誰かツツコんだ方がいいのではないかのだろうか？ コイツだけ出る作品違くないか？ NARUTO じやねえんだぞ？

何華麗に着地決めてんだよ。

「ジャンヌありがとう。……マジありがとう」

「いえいえ、マスターと契約してから何故か身体が軽いんです！ これぐらいなら、ルーラーのサーヴァントとして当然ですよ」

「あ、沖田さんも何故か生前より気分がいいんですよねー。だから不思議と安心するというかなんというか」

ジャンヌは俺を地面に下ろして、力こぶを作る仕草をする。それに便乗して、沖田もピヨンピヨンと元気であるアピールをしてくる。俺としては「ふーん」程度の感想しか出てこない。

まあ、俺は歩くアロマセラピーだから仕方ないか。存在するだけで周囲に癒しと温かみを提供するマスコットキャラクターなのだから。これは日本に帰つたら『ゆるキャラグランプリ』にでも出場してみようか。「ジャンヌ・ダルクと沖田総司を癒したゆるキャラ」とか凄くない？

「ボケるのも大概にしたら？」

「レティシアは構つてくれなくて寂しいって言つてますよ、マスター」「だあれがそんなこと言つたあつ!? ほらつ、そこで間抜け面晒してないで、さつさと行くわよつ！」

レティシアにラリアットされながら、俺は監獄城跡地まで赴く。魔術師見習い以下の一般人なので、ラリアットされながらサーヴァントの速度で走られたため、何度も三途の川が見えたが、そこは気合と根性と次のソシヤゲのイベントのモチベーションで乗り切る。サーヴァントの皆さん、俺が貴様等の生命線であることを忘れるな。

引きずられること数百メートル。

俺はラリアットして レティシアの腕をバシバシ叩く。

「止まれ止まれ、ストップストップ」

「ああ？」

「まさか馬鹿正直に連中へ突つ込むつもりか?」

「……チツ」

舌打ちされたが俺は解放された。木陰で遠くに見えるサーヴァント達を双眼鏡に入れつつ、同じように木蔭に隠れる英霊と小声で意思疎通を交わす。

最初に言葉を発したのはマシユだつた。

「……怒つてます?」

「よくよく考えてみ。いきなり自分の城が木つ端微塵に吹き飛ばされたんだぞ? どんだけ温厚な人間でもブチたつて不思議じやない」「なるほど……確かにそうですね。カルデアを吹き飛ばされたら、確かに所長なら怒りそうです」

失神するんじやねーかな、オルガ所長なら。

何やらレティシアのそつくりさんが地団駄を踏んでおり、近くのローブの男性らしき人物がそつくりさんを宥めている。他のサーヴァントには特に動きはない。

他のサーヴァントを観察してみよう。

白い長髪のおじさん、猫耳の弓兵、仮面のおねーさん。

……わつかんねえ。何というか並の英靈じやないのは確かなのだ

が、「どこの誰なの?」って話になると検討もつかない。猫の耳つけて
る英雄なんざ聞いたことねえぞ。

「沖田さん的にアレって殲滅できる?」

「沖田さん的には厳しいですね。いや、人斬りとか剣豪とか呼ばれて
る身ですが、一騎当千の強さを誇った時期は一度として在りません
よ」

剣豪が必ずしも一騎当千の武者とは限らない。

日本の剣豪として知られる佐々木小次郎や宮本武蔵も、日本人なら
『剣豪』と聞いて思い浮かべそうな偉人だが、来る敵の山をバツサバツ
サ切り倒したという逸話はない。実際問題存在していたかどうかは
別として。

というか剣豪って一対一のプロフェッショナルみたいなイメージ
がある。多対一で無双を誇る英雄など、それこそ神話の時代の連中ぐ
らいじやないか? それほど『数の暴力』は強力であり、少數の兵で
数倍の軍勢と渡り合つたスバルタクスや、数年間もゲリラ戦で戦つた
クーフーリンが不朽の英雄譚として語られるのだろう。

何より沖田さんのモチベーションが低い。

さて、どうしようか——あ、

「なあ、沖田さん。俺分かつちやつたんだけどさ」

「うーん、あれはちょっと厳しいですねー。弓兵つてのがいただけま
せん。飛び道具とか反則でしよう? まったく、英靈なら剣を使つて
ナンボじやないですか——ん? どうしましたか?」

「あれ 島津貴久しまづよしひさと島津義久しまづよしひろと島津義弘しまづよしひろじゃね?」

「首置いてけえええええええええええええ!!」

島津の鉄砲隊の基盤を作つた貴久、九州制圧手前まで勢力を広げた
義久、家康すら「やべえ」と恐れた義弘の名前を出すと、どこぞの島
津のバーサーカーみたいな奇声を上げながら、三体のサーヴァントに
特攻する。聖杯の知識の恩恵が恐ろしい。

俺は新選組のバーサーカーに魔力を回すことへ集中したいため、マ
シユ達に迂回するジエスチャーを見せる。黒幕とロープのサーヴア
ントを押さえて欲しいって意味である。意図を汲み取つたマシユは、

いつもの仏頂面な花子と、黒幕を睨んでいるレティシアを引っ張つていく。

「死ねええええええええええええ！」

まず沖田さんが狙うのは弓兵。

奇襲に対応しようと弓を構える猫耳だったが、俊敏性で沖田を上回るのは非常に難しい。刀は吸い込まれるように首を切り落とした。

「マスター！」

「はいはい、【令呪を以て命じる。宝具を使用せよ】

「これは私の生きた証……誠の旗の下、共に時代を駆けた我らの誓い。
ここに——旗をたてる」

俺が令呪の一画を使用した瞬間、沖田総司の持つ宝具の中で、俺が魔力をブーストしないと使えない宝具を解き放つ。彼女が赤地に黒字で『誠』と刻まれた旗を地面に刺すと、旗を中心に一陣の風が舞う。蒼い光を纏つた神秘的な風だ。ゆらりと空間が歪む。

旗が周囲に掲げられる。

『誠』の羽織りが集う。

沖田総司が所有する三番目の切り札——対軍宝具『誠の旗』。かつて、この旗の元に集い共に時代を駆け抜けた、近藤勇などを始めとする新選組隊士達が一定範囲内の空間に召喚される最終宝具。

これは予想外だったのだろう。白髪の老紳士と仮面の美女は顔を歪める。彼等が全員サーヴァント並の強さを誇るわけではないが、隊士の中には宝具を放てる者もいる。これで数の不利は消え失せた。——だが、まだ足りない。

「——我が旗よ、我が同胞を守りたまえ！」

我が神はここにありて！
リュミノジテ・エテルネツル

俺の背後で解放されるジャンヌ・ダルクの宝具。

天使の祝福によつて味方を守護する結界宝具であり、宝具を含むあらゆる種別の攻撃に対する守りに変換する。展開中は彼女は動けないが、果たして今の彼女は動く意味はあるのか？ 数の優位は得ているのに？

沖田総司の対軍宝具。

ジャンヌ・ダルクの結界宝具。

オルレアンの聖女に守られながら、俺は笑みを堪えられなかつた。「あの消滅寸前の裁定者^{ルーラー}」^{ルーラー}が、どうして!?』という顔を見て、笑わずににはいられないだろう。

なあ、絶対的な有利を崩された気分はどうだ？

勝てる戦いに敗北しようとしている今をどう思う？

レフ教授、貴方が夢見る人理焼却とは、この程度のものなのか？

「まあ、今はそんなのどうでもいいつか。——沖田総司、最後まで共に戦い抜こう。ジャンヌ・ダルク、手始めに世界を救おう。なに、どうせ懸かっているのは所長の胃痛だ。個人の自由と権利に比べりや、対して価値のあるもんじやないさ」

俺は確信した。

この人理修復の旅は『勝利か、死か』ではなく、『勝利か、より完全な勝利か』を得るために戦いだと、今さらながらに理解したのだから。

「——さあ、そろそろ始めるとしよう」

オルタVSオルタ

アイツは良くも悪くも普通だった。

もちろん聖杯の知識で得られる『普通の人間』というカテゴリーに入るわけではなく、あの神代よりも神話してるアイツの故郷の住人と比べたらの話だ。確かに、あの町で暮らしていたのなら、こんなキチガイが生まれるのも無理はない。

私の知らない異国之地『日本』は想像以上の魔境らしい。
マイケル——~~X~~は引き連れてきたキチガイと比べるとマシな存在であり、アイツ等以上に厄介な思考回路を持つキチガイだと、クソマスターの記憶を共有して知ることとなつた。

この能天気なマスターは幸せで恵まれた環境で育ち、温室育ちの御坊ちやまは、周囲を引っ掻き回すように生きていた。

『目には目を、歯には歯を、復讐には復讐を……ってな。ハンムラビ法典万歳、報復最高。そんなわけで地べた這いすり回つて、適当に死んでくれ』

『なら「虐められる方が悪い」って考えを尊重してみよつか。というわけで、こつちも「虐め返される余地を作つたお前等が悪い』って考え方で動くから』

『相手を平氣でサンドバックにするくせに、自分がいざ殴られる立場だと、「暴力だ！」とか喚く輩が多いのなんの。反撃しない相手を嬲るのは実に楽しいんだろうな。羨ましい限りだ』

『聞いたか？俺は奴等にとつて「慈悲のない卑怯者」らしいぜ？暴力だの法律だのうるさいから、正規の手続きをとつて、法に基づいて社会的に殺してやつたつてのによ。……弱者が国の法を守ることは、寄つてたかつて一人の女の子を虐待することよりも卑怯で卑劣な行いのようだ。やっぱ他人の考えていることなんて、よつくわづかんねえなー』

ああ、本当に最高だ。

私の根本的なものを許容してくれる。私の偽りを面倒臭そうに受け入れてくれる。世界を敵に回そうとも、このクソで鬼畜で外道なマスターは私を正してくれる。

「は——ははははは、はつははははははははつはは。ははははははははははあはつは!!」

「——馬鹿な」

狂つたように笑う贋作の英靈。もう一人の私

唚然とするジル。

今回の元凶となる二騎の英靈を前にして、フランスを私より先に滅ぼしやがつた奴を前にして、私は気づいてしまった。今さらながらに気付いてしまったのだ。

あの『マイケル』を詐称するマスターは言つた。

この特異点にレイシフトする前に、無駄に料理スキルの高いクソマスターの料理を口にしている最中、まるで明日の天氣を語るように言つた。

『オルタ、お前が復讐したいのはフランスの全国民なのか?』

『老若男女関係なしに、それが対象なのか?』

『お前の裏切りや処刑に携わった人間だけじゃ足りないのか?』

『……そうか。まあ、お前がそう考えるのなら別に構わん。それを遂行するだけの力があるんなら、止める必要性も権利も俺は持つてないからな』

『だが、これだけは覚えておいてくれ』

『全く関係ない人間に復讐することは、お前が想像する以上に——

「——楽しくない』

あの腐れキチガイに共感するのは不本意だ。

だが、フランスを滅ぼした『もう一人の私』を、シャルルでもピエー

ルでも私を殺した兵士でもない『もう一人の私』を見て、自分が想像する以上に拍子抜けしてしまっていたのだ。

クソマスターが言つた通りのことが、今ここで起こつてしまつたのだから。

私がコレを殺す？

復讐対象の代わりに？

こんなのは殺すの？

——何が楽しいの？

私の靈基が壊れてしまつたのか。キチガイ共に汚染されてしまつたのか。復讐に苦楽もないだろうに、この空虚なサーヴァントを前にして、憤怒や憎悪よりも『落胆』を覚えてしまつたのだ。

復讐するに値しない黒色のサーヴァントを見て、私は自分でも驚くほどにモチベーションを失つていた。あのクソ王でもハゲ司教でもない、この偽者を殺して私の復讐に何の意味がある？

「ホント、ばつかみみたい……」

故に理解した。

マシユに復讐の価値観を語つていたマスターだつたが、それ以前に『復讐問答』は幾度となく行つたのだ。しかし、復讐を許容すると言つておきながら、なぜかクソマスターが私の『全人類に対する復讐』を、強制とはいかないまでも止めようとした。

最初は甘つちよろいガキの戯言だと嗤つた。

でも、あのマスターの言いたいことを今理解した。そして——今の

我なら受け入れられる。

「ああ、やっぱ最高ね。最高の気分だわ」

「ジル！ 私は狂つてしまつたのかしら!? もう一人の私が存在するなんて！ ……で、私に何の用でしようか？」

「用、ねえ。ここまで来るのにアンタをブチのめす理由なんて、数え切

れないほど用意してきたのだけれど、もう意味を成さなくなつたわ。
でも……そう、ねえ。しいて言うなら——」

フランスへの正当な復讐者ではなく、ただの殺人鬼もどきに成り下
がつて いる自分を見て、私はドヤ顔で口を弧に歪める。

こうすると効率的に相手を挑発できる。

あのキチガイ共から学んだ。

「——シャルル7世とピエール・コーチョンの敵討ち、かしらね?」

「はあ!?

あ、確かに面白い。

他人にこんな面白い表情を作れるのなら、あのキチガイの煽りも悪
くない。

私としては『王と司教をご丁寧に私よりも先に殺しやがった』とい
う意味を込めたのだが、それを知らない二人には狂人に見えるだろ
う。

「……氣でも狂つたのでしょうか？　もう一人の私は」

「それはこつちの台詞なんだけど。さつきまで神に祈りを捧げてた
じやない。あの詐欺師よりも詐欺臭い神に祈り捧げるとか復讐舐め
てんの？　私からしてみれば神も私の敵よ。つか居ないわ、神なん
て」

「おかしなことを言うんですね。神は言いました。『この存在そのも
のを間違えているフランスを滅ぼせ』と。だから私は正しい」

「……ふうん、そう。そういうことね」

何故か同じ存在のはずなのに、会話が全然噛み合わない。その理由
を自分なりに考えてみたのだが、キチガイマスターの斜め上から切り
込む推測法に影響されたのか、割とすぐに答えを導き出すことが出来
た。

同時にマスターへの恐ろしさを覚える。もう一人の私の正体を把
握して、私をコレとぶつけて いるのなら、やっぱリアレは真性のキチ
ガイよ。脳みそ何で出来てんの？

「マシユ、さつさと盾構えなさい。あの私と聖女様を足して二で割つ
たような不良品をシバキ倒して、聖杯回収するわよ」

「それはジャンヌであろうと聞き捨てなりませんね。これはまさしく
ジャンヌ・ダルク！ フランスを憎み、神の名の元に正義を下す存在
！ 人は皆等しく、裁かれる運命にある！」

「あつそ」

マシユは私を守るように盾を構え、同時に敵も各々の得物を構える。

私は黒い剣を抜いて、もう一人の私へと向ける。
アイツは私を正してくれる。

例え、私が間違った道を歩んだとしても、あの男は頭を搔いて面倒臭そうに諭すのだろう。私が真に望んでいる願いを共に夢見て、あの外道な思考回路で導き出すのだろう。マイケル……いや、~~×~~なら、地獄の底まで共に死んでくれるだろう。

クソマスター。アンタはこう言いたいのでしょうか？

「要するに、『復讐者の純粹な復讐を異物で穢すな』
私 関係ないもの

復讐する先は私を辱めた者。

フランスとか人類とかどうでもいい。それはただの八つ当たりに過ぎず、私の正しく清く美しい復讐劇には似合わない。ジャンヌ・ダルクの怨念ではなく、レティシアの名を持つ私が夢見るは、何者にも文句を言わせない復讐だ。

「偽物がっ！ 私の前から消えなさい！」

「ええ、私は偽者よ！ 覚悟は当の昔に決めてるわ！ 他の誰でもない、
レティシア ジャンヌ・ダルク
偽作と偽作。

マシユとジル。

もう言葉を交わす必要はなく、互いが互いを殺すために駆け出し——

「邪魔」

「「がああああああああああああああ??!!」」

「何してんのよおおおおおおおおおお!!」」

——理不尽を具現化した少女に鳩尾をブチ抜かれる。

合間から割つて入ったキチガイマスターその二は、振り向き様に衝撃波を伴つた拳を叩きこむ。駆け出していた私とマシュは、風圧に耐えられず数メートルくらい滑り、直撃した二人は訳も分からず座に還る。

座に還る。

座に還る。

座に、還る。

カラッと小気味良い音を鳴らして転がる聖杯。

万能の願望器を何のためらいもなく拾つた金髪のマスターは、いつもの仏頂面で私たちに声をかけるのだった。

「終わり」

「こんな終わり認められるかああああああああああ!!」

共に地獄へ参りましょう

「お帰り、マシュ、マイケル君に花子ちゃん！ お疲れ様！ 補給物資も乏しい、人員もいない、そして実験段階のレイシフトという最悪の状況で、君たちはこれ以上ない成果を出してくれた。生存している全カルデア職員を代表してお礼を言うよ。本当にありが——」

「クロネ〇ヤマトから注文した物資が届いたよー。これどこに置いてけばいいー？」

「……」

特異点から帰ってきた俺達は、ロマンから手厚い出迎えを受ける。が、ロマンの感謝の言葉の大半を、フォークリフトトラックに乗つて物資を運ぶボブに邪魔された。補足だが、カルデアの廊下はフォークリフトが余裕で操作できるくらい拡張されている。白衣姿で手慣れた運転で、ボブが巨大な段ボールを乗せたフォークリフトを動かす姿は大変シユールだった。

フォークリフトが過ぎ去った後、遠くからカルデア職員からの歓声が上がる。

ところで今のカルデアって浮遊要塞だよね？

クロ〇コヤマトさんは、どうやつてココまで運んできたの？

「ま、まあ、本当にありがとう。初のグランドオーダーをたつた一日で攻略するなんて驚いたよ」

「それはココにいる期待の新人、ジヤンヌ・ダルクさんの御蔭だな。とレイシフトした先が黒幕の本拠地が近かつたのもある。運が良かつたつてことさ」

あとカルデア要塞だな。

俺はレティシアにほつぺたをむにむに引っ張られている花子から、特異点で回収した聖杯を強奪する。

「……ところで花子ちゃんは何で顔を弄られているんだい？」

「見せ場を奪われたからだろ。……これが聖杯か。ふーん、えつちじやん」

「先輩、その聖杯に何の性的要素があるんですか？」

一見すると金で作られた器。

しかし、魔術師の端くれである俺には、聖杯から漂う魔力の塊を感じする。

この『聖杯』つてのは神話的に何が由来なのだろうか？ キリスト教に出てくる聖杯か？ でもキリスト以前の英靈も呼べるよな？ 今度所長にでも聞いてみるか。

「あ、忘れてました！ マスターは新選組に加入するんですね!? いやー、マスターの采配は近藤さんや土方さんもニッコリでしたよ！ これはますます薩摩に置いておくのは惜しい人材だと！ というわけで加入は書類と血判で簡単なので——」

「あ、ダニエルやん」

「薩摩死ねええええええ！」

少し沖田さんの瞳がハイライトになり始めたので、ちょうど中央管制室を通りかかったダニエルに押し付ける。沖田さんにとつてダニエルは薩奸なので、なぜか靈基がバーサーカーになつた人斬りは、薩摩の血を求めて縮地を用いて追いつめる。

一方のダニエルも負けてはいない。己の危機を悟つた胡散臭い紳士は、魔改造したセグウェイで脱兎の如く逃げる。

カルデア一物騒な鬼ごっこだ。

俺は沖田が出ていった方向を指差す。

他四人に向けてだ。

「ほら、マシユもアホも早く物資貰いに行けよ。所長なんか奇声上げながら柿ピー貰いに行つてるぜ」

「私の……分もですか？」

「レイシフト前に補給物資で欲しい物のアンケートをボブに出しただろ？ アイツがAmazonで注文したものが今日届いたつてわけよ。ロマンも、な

「え？ あれ本当に届いたの!? あー、もうちょっと本気で書けばよかつたなあ」

何を書いたのかは本人とボブしか知らないが、余程自分が必要なものだつたのだろう。

ロマンはスキップしながら中央管制室を出て、マシユは花子と共に並んで歩く。

ちなみに所長が書いたものが分かつた理由は、奇声が「柿ピいいいいいいいいいいいい」だからである。これで目当てのものが柿ピーじゃなかつたら何だつて話だ。それを柿ピーだと思い込んでいる精神異常所長だな。

俺も管制室を出ようとする。

……が、それは「クソマスター」という呼び声に止められた。俺はジャンヌに花子を追いかけるよう指示し、呼び止めた声が聞こえたほうを振り返る。俺のことをクソつけてマスターと呼ぶサーヴァントは一人だ。

「何だよ、レティシア。俺も早くスルメイカ欲しいんだけど」

「……」

「……レティシア？」

「……」

頬を搔いたり、明後日の方向を向いたり、視線を泳がせたり……いつものレティシアらしくない動きに、俺は眉をひそめた。あの彼女に瓜二つの黒幕を倒したことで、何か異常をきたしたのかとも考えたが、どうにも理由は他にあるらしい。

明後日眺める彼女の表情は見えない。

だが、ようやく決心したのか、黒の復讐者は頬を赤く染めながら言葉を紡ぐ。

「あ、ありがと……」

「……俺達の最後の希望も、敵に対しては難攻不落のまま、ついに内側より潰えさる、か」

「何言つてるのか分からぬいけど、とにかく馬鹿にしていることだけは理解したわ。表出なさい。首と胴体に今生の別れを与えるから」
え、だつてカルデア墜落するんでしょ？

あのレティシアが感謝の意を述べたのだから、天変地異が起きててもおかしくはない。

堕ちた聖女は腰に手を当てながら大きく溜息をつき、ジト目で理由

を語る。自分の言葉に変な勘違いを起こさせたくないが故の行動だろう。

別に「ありがとう」って言われたら「あ、うん」程度の感慨しか思
い浮かばんから、勘違いもクソもありやしないんだけどね。

「アンタが言つてたことの意味を理解しただけよ。ほら、復讐云々の
件」

「うん？ ……ああ、アレか。『復讐』って行動に決まつた形はないつ
てコトを、俺の実体験からアドバイスしただけだ。個人的に経験則を
全面にアテにするつもりはないし、レティシアの復讐に比べたら微々
たるものだろうが」

「復讐に大きい小さい関係あるものですか。まあ、私の存在意義を苦
楽で考えるのもどうかと思うけど。アンタのキチガイ思想に染まつ
ちゃつたせいぢら？」

「せつかくの復讐なんだぜ？ 楽しまなきや、やつてられねーつての」

少なくとも俺の復讐は代理的なものであり、レティシアがフランス
を滅ぼした今回の黒幕を倒す構図と非常に似ていた。一般的に復讐

に『楽しさ』なんぞ必要ないだろうが、俺は楽しもうとした。復讐に
「絶対苦痛に満ちた顔で、血反吐を吐きながら、相手を呪い殺すかの如
く存在しなくてはならない」という決まりもないし、それが復讐の重
みに直結するとは俺は考えない。

俺の人生に嫌なことをする暇はない。だから、俺は復讐代理という
面倒を、せめて楽しもうとしてたわけだ。

その心理思考を覗いたレティシアは、己の存在意義に少なからず影
響してしまつたのだろうか。もしそうなら、水を差してしまつたかも
しない。

俺の言葉にレティシアは首を横に振る。

気にしてないと言わんばかりに。

「最初は『何してくれちやつてんの、このクソガイジマスターは』つて
心底思つたけど、今は気にしてないわ。だって、『過去に私の死刑に携
わつた連中への復讐』は、『神の名の下にフランスへ裁きを下す』こと
に固執してた黒幕とは違う、私が自分から思い描いた復讐なんですよ

？」

「……そう考えることもできるな」

「まあ、黒幕はジルが思い描いた私なんだけどね」

え、 そんなの？

衝撃の事実にビックリする俺だが、黒い聖女はまるで俺が予知してたかの如く語るので、表向きは「や、 やばそうやつたんやな……」と言葉を濁す。

あれジャンヌ・ダルクの負の面じやなかつたんだ……。なんか違和感あるなーって思つてたけど。

「それに……もし私が真に復讐する対象を間違おうとしても、アンタが正してくれるんでしょ？ 一緒に地獄へ落ちてくれるんでしょ？」

「え、 嫌だけど」

「は？」

今のはガチトーンの「は？」 だつた。

だつて俺死にたくないし。

「お前俺の記憶知つてんだから、 この答えは予測できるだろ……」

「ここで嫌つて言えるアンタの神経を疑うわ」

「つか、 お前現在進行形で復讐しとるやん。シャルルとピエールに」
どういう意味？ とレティシアが首を傾げるので、俺は苦笑いしながら説明する。これは完全にこじつけなのだが、俺は割と本気でそう思つてる。

「オルレアンの連中は魔女だと断定して殺したのに、 今のお前は世界を救いながら日常を謳歌してる。今のアイツ等は地面の下で眠つてんのに、 ジャンヌ・ダルクはゲーム遊んで第二の人生を楽しんでる。これつて最高の復讐じゃないか？」

「……それ復讐つて言えるの？」

「さあ？ でも、 クソ国王とハゲ司教は俺達に文句は言えず、 俺達は堂々と馬鹿共に唾を吐きかけられるわけだ。それで許すつもりは毛頭ないが、『お前が幸せになる』ことも復讐の一つの形だと思うぜ。何より——」

「何より？」

そう、これは俺の行動理念の一つ。

俺が考えつく言動は、全てこの一言に集約してるといつても過言じゃない。

「——楽でいい」

一瞬啞然としたレティシアは噴き出す。

この言葉の反応を、彼女は語らない。だが、顔には「確かに」と書かれていた。

つか、こんなこと話し合つてる場合じゃない。

だって——俺とレティシアの人生に、しなくていいことをする時間の余裕など存在しないのだから。

俺は彼女に手を伸ばす。

彼女は俺の手を取る。

「んなことより物資漁りに行こうぜ。ゲーム頼んだんだろ?」

「はいはい、分かりましたよ。ご主人様」

さあ、今日も人生^{復讐}を楽しもう。

俺とレティシアの復讐劇は、今日も面白おかしく始まるのだつた。

第二特異点 永続狂気帝国 セブテム

これが私の日常

アホから携帯電話をもらつた。

最初は構造が不可解な板で何が出来るのかと思つたが、そういえば何かとキチガイ共はコレと同じようなもので遊んでいるのを目にしてた。

この携帯は遠くの相手と連絡を取れるだけでなく、ゲームをしたり、音楽も聞けるとか。あの分厚い機械^P_{S⁴}でゲームが遊べるのだから、あそこまで小型化もできるのだろう。私の生きていた時代には考えられないことだ。建物が浮いているのだから、今さら驚くこともないわね。

というか使い方を説明されたけど、どうして機械というものは複雑で使いにくいのだろう。まずこちらが言語を理解できていないのに、そう簡単に使えるはずがない。

学のない田舎娘を舐めるな。

「——はあ？ また虹出なかつたんだけど。私の幸運値Cに上がつてるのよね？」

とか思つていた時期もありました。

人間であれサーヴァントであれ、慣れるときは慣れるものだと学んだ私。とりあえず聖杯の加護で言語の壁は乗り越えたのだが、聖杯ではサポートされない造語はクソマスターに教えてもらう。

そのような形で携帯電話——スマホを使い続けること一週間。ある程度は思い通りに動かせるようになつた。

現在遊んでいるのは『スマホアプリ』の中でもゲームに分類されるもの。

これは片手で操作できるのがいい。現に、食堂へ向かいながらも遊ぶことが出来る。

「周回しなきゃ……素材全然足りないんだけど」

蒼い女とトカゲの物語をオススメされて、最初は「何が楽しいの？」と鼻で嗤つてたが、少しずつだが成長していく過程が面白い。レイシフトで訳の分からん素材を集め、ゲームでも周回している自分がいる。どうやら私は、こういう単純作業が好きらしい。

人斬り侍は性に合わなかつたようで、アクション系やFPS系のゲームが好きだと言つてたが。

努力が報われるのは楽しい。あのキチガイ共が「現実はクソ」と吐き捨てるのも理解できる。

そこまで考えたところで、私は思わず苦笑する。

本当の聖女ならゲーム狂いにはならないと断言できよう。つまり、今の私は頭のおかしい女とは全くの別物という証拠にならないだろうか？ 不純すぎる証明ではあるが、自分は自分であるという確信が嬉しい。

私は無駄に豪華な食堂へと入る。

「——あ、レティシア、ちょうどいいところに来ました。武器欲しいんでマグナ手伝つてください」「……」

まあ、その聖女もゲーム狂いに堕ちているんだけど。

青いTシャツに、カルデアのサーヴァント全員に配布される黒いジャージ（背中に『アーツ』の文字）、ハーフパンツを着用したオルアンの聖女は、食堂の椅子で体育座りをしながらスマホを弄つていた。同じくクソマスターから支給されたものだ。

そして目当てのドロップが落ちなかつたらしく、悲痛な面持ちで天を仰ぐ。

「——主よ、どうして私の願いを聞き届けてくれないのでですか……？」「アンタの願いが不純過ぎるからじゃない？」

まさか神なんぞに同情の念を抱く日が来るとは思わなかつた。

その願いはアンタが信仰する神じやなくて、KMRにするべきでしよう？ と、いうか何で『万人に博愛をもたらす紛れもない聖人』と称されるコイツが、全力でゲームに愛注いでいるわけ？ 最近は愛だけじやなくて金も貢いでるらしい。

おかげさまで、カルデア職員たちは『ゲーマー姉妹』って言われてんだけど。

しかもコイツは元々が鉄壁の自尊心、鋼の如き信仰を持つ精神キチガイ女。それがゲームに傾倒してしまつたら……お察しの通りである。何で始めて一週間でグラシ編成作つてんのよ、頭おかしいんじやないの？

これを現代のフランス人が見たら何を思うだろうか。私よりもオルレアンのゲーマーの方が、存在するだけでピエールに復讐している気がする。

最近では『キチガイ共』の中にコイツも含めてるわ。

「ここにちは、レティシアさん！」

「……ええ、マシユ。ここに——」

元気な挨拶で現実に戻された私は、声のする方を振り向く。

カルデアに所属するサーヴァントの中では、一番の古株であり、特異点での戦闘においてメイン盾を司る少女。前は純真無垢で私と正反対の性格をしており、どちらかといえばゲーマーに近いマシユが苦手だった。しかし、今はキチガイが跋扈^{ばっこ}するカルデア内で、唯一無二の癒しとも言えよう。マシユの存在が私の心労を癒す。

特異点に行かない日は、午前中に脳筋^{花子}女と戦闘訓練をしていると聞いた。アレの猛攻を防ぐ練習をするだけで、相当な経験になるんだとか。私なら三秒も持たない。

カルデアの天使は笑顔でスマホの画面を見せていた。

そりやもう、満面の笑みで。

「朝にガチャを引いたら、凄く強い召喚石を当てたんです！ 先輩に聞いてみたところ、『凄い幸運なことだから、皆にその幸せを共有してもらうといいよ』って言われて——」

「シヴァ煽り、ダメ、絶対」

ガチャ結果報告するだけで、持たない者VS持つ者の戦争へと発展するレベルの人権を掲げるマシユに、私は涙目になりながら諫める。たしかクソマスターも持つてなかつた筈なので、その苦しみを拡散させるつもりだつたのだろう。

ちなみに聖女は持つてる。自力で引き当てたらしい。

マシユにシヴァ煽りの危険性を解説していると、徐々に食堂の座席が埋まりつつあることに気付いて、慌てて席を確保しようとする。

聖女の前なのは不服だが、知らない職員の前に座るのも気が引ける。

マシユを含めた三人でゲームの共闘を進めていると、隣に人斬り侍が腰を下ろす。

手に携帯ゲーム器を携えて。

「丁度良かつた。レティシアさん、夜の十時からレースのゲームやりません?」

「まだ（ゲームの）日課終わってないからバス」

「サーヴァントチームVSキチガイチームつて考えてるんですけど……」

「前言撤回。フルボッコにしたるわ」

日頃からキチガイ共に弄られ、物理的に制裁しようとも逃げ足だけは超一級品の薩摩民。

そんな連中でもゲーム内なら堂々と仕返しが出来ることに気付いたので、何かと理由をつけてはキチガイ共とオンライン対戦をする機会を作るようになつた。スマブラとかマリカーとかスプラとかガンダムVSとか。

胡散臭い眼鏡男や、マイペースサイコパス医師には歯が立たないが、クソマスターとは接戦になるから、報復が割と可能なのである。

いつもできる日課よりアイツ等との対戦が最優先だ。

どのキャラを使うかを脳内で計画を練つていると、食堂にカルデアの職員に就職したキチガイ二人衆が入つてくる。基本的にカルデアの本物の職員は、私達へ不用意に近づこうとしないが、薩摩の国生まれ

の洗練されたキチガイ共は話が別である。

ケラケラ笑いながら、白髪の医師が私の席に近づき、人斬り侍とは反対の椅子に座る。

「ボブ君はマグナ消化しちゃいました？　自発お願いしたいんですけど……」

「アンタさつきからソレしか言わないわよね……」

「僕の自発は残ってるからいいよー。でも共闘三十連部屋入ったほうが良くない？」

「もう済ませちゃいました」

騎空士共が武器掘りを再開し、

「クッパの使い方を教えて下さーい、ジョンサーん」

「うつせエな、人斬り侍。んなの重量の暴力で雑魚を落とすに決まつてンだろ」

「割とコースにも左右されますよねえ。私としては沖田嬢にキノピオを推したい」

夜のマリカーニ備える者もいる。

あれこれ雑談をしていると、厨房からクソマスターと脳筋マスターが姿を現す。

手には並々注がれ、香ばしい匂いで胃袋を刺激する、特製カレーの姿。

「ほれ、飯が出来上がったぞー。大盛り希望は先に言えー」

「――「はいっ!!」――」

私も他人に負けじと手を擧げる。

こうでもしないと無くなっちゃうから。

これが、私の日常。

魔術師とはキチガイのこと

「ほら、所長。さつさと石回収しに行くぞー」
ログインボーナス

「アンタそれ本気で言つてるの!? この状況で私に行動選択権があると思つてるの!?」

「ないだろうな」

そりや花子が車椅子押してりやそうなる。

しかし、まだ本調子ではない所長の車椅子を押している花子は楽しげで、仏頂面で鼻歌を奏でながら、カルデアの壁を勢いよく爆走している。重力が仕事してないね。

現在俺と花子、所長はダニエルの部屋へ向かっている。

特にこの人選に意味はなく、暇してそうな奴を適当に引きつれているだけである。

ボブはロマン、ジョンはダヴィンチちゃんにそれぞれ用があると言いい、朝から姿すら見かけていない。レティシアと沖田さんは、今日は非番である職員の方々とスプラ大会してるつて聞いた。ジャンヌはガチャで爆死して、当分は俺の部屋から出てこないと思われる。

「……人類史の危機だつてのに、ちよつと呑気過ぎないかしら?」

「次の特異点を観測するには時間がかかるんだろう? 職務放棄してるつてわけじゃねえんだから、少しくらい大目に見たらどうだ? 部下の体調管理も、上に立つ者の仕事だぜ」

本来ならば、俺達が第一特異点を修復している間に、同時並行として第二特異点の観測を行う予定だつたと、レオナルド・ダ・ヴィンチは語った。

それが今だに成されていないのは、単純に俺達の攻略速度が異常だつただけである。故に、特異点レイシフト組や、レイシフトしてゐる俺達をバックアップする担当の職員は、休暇という名の暇を与えられているわけだ。もちろん、現在も特異点の観測を行つてゐる職員もいるし、今休憩してゐる面子と交代制で、ゆっくり確実に仕事をこなしている。

所長を宥めながら、俺達はダニエルの部屋の前に辿り着く。

アイツが『育つた石を回収してほしい』と言っていたので、こうして赴いてやつたわけだが。

「ダニエルいるか？ いるな？ お邪魔しまーす」

「……日本のことわざよね？ 『親しき中にも礼儀あり』って」

「別に親しくも何ともないから問題ないな」

カルデアの個室は内部の人間の承認によつて開くので、面倒だから花子が物理でこじ開ける。たつた今ダニエルん部屋の扉がお釈迦になつた。

部屋の作業机で本を読んでいたダニエルは、唐突な来訪に頭を上げる。

「ああ、もうこんな時間でしたね」

「聖晶石を回収しに来たで」

「それならベットの横に置いてあります。ちゃんと石が100個あるかどうか確認してください」

「……魔術関連の資料？」

聖晶石がちゃんと使えるかを確認しながら、品質確認と個数管理を花子と行つていると、ダニエルの机の上に散乱している資料に目をつけた所長。それは、カルデアの書庫で管理されている、割と希少性の高い魔術の研究資料だつた。

特に魔術関連の書籍は厳重な管理をしていると耳にしたが、コイツにセキュリティ対策は意味を成さない。なので、所長は「何でコイツこの本を読んでいるの？」という意味での疑問なのだろう。

「ええ、少々魔術のお勉強をと思いましてね。今回的人理修復が終わつたとき、魔術師の家系でも築いてみようかと考え、今のうちに見聞を広めているというわけです」

「あー、なんこと言つてたなあ」

「正確には『魔術使い』の家系ですけどね」

俺も最近学んだ話なのだが、『魔術師』とは『根源』に到達することを目的とする連中の総称だ。『根源』を目指す過程で魔術を用いているため、魔術師と呼ばれているのだとか。

『根源』とは全ての始まりであり、その結果である世界の全てを導き

出せるもの。ぶつちやけそれ何? って話なのだが、『根源』に到達した例はないとされているため、魔術師にも『根源』が何なのかは知らないんじゃないだろうか。

そして、ダニエルが言い直したのは、コイツが『根源』に何の興味もないからだろう。他の目的のために魔術を扱う者は『魔術使い』と呼ばれる。そして『根源』への研究対象ではなくツールとして魔術を使う者は、魔術師からは軽蔑の視線を向けられるらしい。

だから俺も正確には魔術使いだな。もしかして根源に一番近い存在なんじゃね? って感じの花子も、彼ら基準で言えば単なる魔術使いである。

「でも一子相伝の魔術つて、基本的に魔術師しかしないよな? 魔術使いの家系って珍しくないか?」

「一代では決して到達できない根源に行くために何代も技を継承していくのが魔術師ですからね。ふと気になつたのですが、アニムスファイア家の命題つて何なのでしょうか?」

「柿ピールの製造、販売」

「……」「……」

亀田製菓は既に魔法の域へ到達していた――?

日本が誇る柿ピールの製造会社と、柿ピールに命題を乗っ取られたアニムスファイア家に、畏怖の念を抱いていると、ダニエルが俺に資料の束を寄越してきた。

俺はパラパラと紙を捲る。

内容は『聖杯戦争』に関してだ。

「2004年での冬木市が最初にして最後の開催地とされている聖杯戦争の記録です。サーヴァント七騎で行われた魔術儀式であり、セイバーが勝者となつたと記されました」

「……今更だけど、聖杯戦争つて面倒だよなあ。わざわざ異なるクラスで召喚する意味が分からん。アサシンとかライダーとか誰召喚するやいいのって話。セイバーなら適当に七騎くらいパツと思いつくだろうに」

「セイバー、ランサー、アーチャーの三騎は最優のクラスとされていま

す。この聖杯戦争自体は御三家が関わっていますので、外来の参加者との優劣をつけるためかと」

「俺なら喜々としてアサシン呼ぶけどな」

御三家が最優を呼ぶのなら、わざわざ真正面からぶつかることはしない。サーヴァントよりもマスターを暗殺した方が確実だろう？

「で、この記録が何だつてんだ？　お前が聖杯戦争に興味を示すとは到底思えないんだが」

「肝心なのは御三家の一つ。アインツベルン家の情報です。私はこれが欲しかった」

「アインツベルン？　あの鍊金術の名家の？」

パツと分かるくらいの家門なのか、それとも所長ともつながりがあるのか。アインツベルンと言う単語に、所長はいち早く反応した。

俺にはそれが分からぬし、花子なんて完全に聞いてない。聖晶石でタワーを作つているくらいだ。

「所長はアインツベルン……だつけ？　そこを知ってるん？」

「知識程度には、ね。ドイツに居城を構える、千年以上の歴史を持つ魔術師の家系よ。鍊金術を修めていて、人造生命体^{ホムンクルス}や貴金属の製造を得意としてるわ」

「鍊金術ときたか……」

まさか人生で鍊金術の存在に関しての話を聞くとは思つていなかつた俺は、真面目な顔で鍊金術のあれこれを語る所長に苦笑いを浮かべた。ぶつちやけ、それ以外の表情が出来そうにない。

鍊金術つてあれでしょ？

人体鍊成ダメなんでしょ？　扉の向こうに持つてかれんでしょ？

「でも、ダニエルは何で鍊金術の勉強なんかしてるんだ？　本気で人造生命体を作ろうとか思つてんの？」

「E_xa_ct_ly！」

人造生命体の話を持ち出した瞬間、ダニエルは興奮したように机を叩く。

いつもは紳士的な物腰の彼が、魔術の一分野で豹変する姿を見て、

所長は目を見開いた。鍊金術のどこに彼が希求する物があるのだろうかと、割と真剣に考へる程度には。

しかし、俺はダニエルがこんな感じになる傾向を知っている。ダニエルの興奮具合と、ホムンクルス云々の話だけで、コイツが何をしようとしているのを理解しただけだ。

俺は溜息をつく。

「アインツベルン家のホムンクルスの情報は一通り目を通しました。実に素晴らしい！ 最高とも言つていい！ 確かに鍊金術で作つた人型の生命を『人間』と定義するのは難しいでしょう。ましてや、生命の創造など、現代社会では大罪と忌避される行為です。ですが、そんなんのは関係ない！ 私はホムンクルスをこの手で創造したい！ そう――」

喜々として掲げるのは方眼紙のノート。

そこにはダニエルの執念を感じ取れるほどに、ノートびつしりに文字が書かれていた。

「――妹系幼女を作り出す……！
「やつぱりか、このロリコンが」

それはロリコンを拗らせ過ぎた変態紳士の姿だった。

良く目視すると、ノートには彼が思い描く幼女を事細かに記した、言わば犯罪記録と呼べる代物だった。

身長や体重、髪の色から、瞳の色。それだけだつたらギリアウトだつたのだが、口調や学歴設定、好きな食べ物、スリーサイズ、太腿の大きさ、性格などがパツと見ただけで知ることが出来る。
しかもノートはそれだけじゃない。

机には広辞苑数冊分のノートが積まれている。

そして口リの素晴らしさを小十時間語りだすダニエルを他所に、俺達はひつそりとダニエルの部屋から退避する。幸いにも妹系幼女の

ジヤンルを語る変態には気づかれなかつた。

車椅子を引く俺に、所長はジト目で睨んできた。

「……別にアンタ達が魔術の道を目指すのは勝手だけど、それが一般人に露呈することだけはしないでよ。神秘の度合いが下がつちやうし、肃正の対象になるんだから」

「お気遣いどうも。ところで所長」

「何？」

「そこで聖晶石を食つてる花子を、『まだまだ青二才の未熟者』と評価する連中が闊歩してる鹿児島県民を、果たして『一般人』とカテゴリーしてもいいんだろうか？」

答えは返つて来なかつた。

マシユ・キリエライトの歴史教室

「何か妹からLINE来ただけどさ、鶴丸城の御楼門が復活するらしいんよ。工事中の門を背景に『復元なう』って言われても、どう応えればいいのか分かんないけど」

「いまさらかよ。ンなことすンなら、城そのものを直せつてハナシ」「でも黎明館あるから無理じやね？」

食堂での何気ない会話。

人理継続保障機関『カルデア』改め人理継続保障要塞『カルデア』には、大人数で集まるるような部屋が幾つか存在する。これは人理修復が終わつた後にも、カルデアが人理を見守る拠点として機能させるために、ジョンとダヴィンチちゃんとで設計したものだ。

しかし、曲がりなりにもカルデアは所長をトップとする機関のため、その大部屋を借りる手続きは非常に面倒臭い。

なので複数人で遊ぶ時は食堂を利用することが多い。

食堂は最低でも50人は入れるようになつてるので、カルデアの施設の中でもそれなりに広い部類に入る。

だからマリオパーティしてる俺たち以外にも、少し離れたカルデア職員集団が人生ゲームで盛り上がつていた。何気にロマンも入つているし。

「鶴丸……城？ 黎明館……ですか？」

「そこ。鹿児島にある城」

マシユは聞き慣れない言葉に首を傾げる。日本人でも県外の人間が知らない単語なので、俺とジョンはマシユの反応を気にすることはなかつた。当然の反応だろうつて感じ。

沖田さんが年頃の女の子がしちゃいけない表情をしているのは無視する。

「鶴丸城は江戸時代初期に『島津忠恒』が築いた、上山城跡の城山と、その麓に築かれた鶴丸城で構成された平山城だな。ちなみに鶴丸城は通称で、今んところの正式名称は『鹿児島城』だね。現在では城の代わりに、歴史資料館的な『黎明館』と、市立図書館や美術館が建て

られている……つて w i k i に書いてあつた

「つまり鶴丸城を復元するには、黎明館を取り壊さなければいけない……ということでしょうか？」

「おお、マシユちゃんは呑み込みが早いなあ」

俺は純粹にマシユの頭の回転を称賛し、ジョンは鼻を鳴らしながら懷から飴を取りだしてマシユに渡す。さすが『力のマスター、知のサーヴァント』と揶揄されるわけだ。

当の力のマスターは何も考えずにコントローラーで適当に遊んでいる。

既に歴史資料館として機能している黎明館を取り壊すことは、事実上不可能なので、鶴丸城が現世に蘇ることはないだろう。そもそも現物を見たことがないので、復活しようが二度とお目にかかるないことになろうが、俺にはさして問題はない。

すると、『くいっく』のパークーを着たセイバーが俺のプレイを妨害する。俺のパークーを引っ張る形で、だ。無理やり着せられた『誠』の漢字を背負ったパークーが着崩れる。

「どーせ薩摩の城なんてハリボテ以下に決まってるんですー。復元する必要のないくらいいやつちい城なんですよー。税金の無駄なんですよー」

「さすがに沖田さんでも、その言葉は感心しないな。いくら鶴丸城がゴミカスだからって、言つていいことと悪いことがあるぞ」「なんの擁護にもなつてねエがな」

頬を膨らませた桜の少女のほっぺたをプニプニ突いてると、マシユが再び首を傾げて、俺に質問を投げつけてきた。好奇心旺盛な女の子である。

俺達が知らないレベルの世界史の知識を持っているマシユだが、日本の一地方の歴史までは把握していない。ましてや、自分のマスターが生まれ育った、悪鬼羅刹が跋扈する土地だ。盾のサーヴァントは興味を持つたのだろう。

俺もその期待に応える。

内心あまり言いたくない部類の話だけど。

「いや、まあ、天守閣や高石垣がない城を、城と呼んでいいのかは謎なんだけどさ。薩摩つて鶴丸城が建築される当時は77万石の大名だつたんよ。けど城はお世辞にも立派とは言えなかつた」

「補足だが、石高つてのは日本独自の数え方だなア。当時の日本は米の生産性で測つてつから、領土を面積は関係ねエ。島津の77万石は日本でも有名な『加賀100万石』に次ぐ規模……要するに日本でも三本の指に入る大名だつた」

米の生産量を石で測つてたから『石高』と言われている。77万石の規模を有する島津の城が、どうして天守閣も大きな石垣もない城になつたのかは不明であるが、諸説では『江戸幕府に対する恭順の意味があつた』や『城をもつて守りと成さず、人をもつて城と成す』などと言われている。むしろ家臣の外城の方が立派だつた。

でも77万石の大名なら、もつと立派な城を築いてほしかつたよう

なあ。

お隣の県にある『熊本城』の方が、防御力もあつて立派じやん。噂によると波動砲や重核子爆弾、空間磁力メツキにハイパー放射ミサイル、反射衛星砲が完備されてるとか。

「おかげさまでイギリスとの戦争では寺が天守と間違われて砲撃されたしさあ」

「え、江戸時代に日本はイギリスと戦争してたんですか？」

「幕末だけどね。薩英戦争つて呼ばれてるんだけど、マシユは知らない？ 当時最強とも呼ばれてた大英帝国と、一地方に過ぎない薩摩藩との戦争なんだけど。ぶつちやけ国と州の戦争つて珍しいよね」

それに長州も四国相手に戦争してるし。

薩摩の蛮勇をオブラートに包んでみたが、

「国に喧嘩売るとか、やつぱキチガイですね」

「何を今さら」

新選組の一番隊隊長が許してくれなかつた。

控えめに言つて戦力差を考えて欲しい。英國がグレート・パンジヤンドラムさえ使わなければ勝てたんだけどなあ。

俺と不良少年と人斬りは笑い合う。

ジョンは鼻で嗤うような感じで。沖田さんはにこやかに笑つて可愛いが、目が笑つていなかつた。なので俺の笑いは必然的に乾いた笑い声となる。

一方のマシユは思案するようにうつむいていた。どうしたのか尋ねてみると、

「いえ……そのカゴシマというところに私も行つてみたいです」

「来なよ、来なよ。くつそド田舎だけど、それなりに観光する場所はあるからさ。パパッと人理修復なんて面倒なモン終わらして、みんなで鹿児島行こうぜ」

ロマンからの情報ではあるが、マシユは一度もカルデアから外に出たことはないらしい。理由は聞かなかつたし、あんま聞いちやいけない類の話だらうと尋ねもしなかつたが、盾の少女が外の世界を望むのならば歓迎するのが正解だろう。

当然、その話はジョンも花子も知つている。二人もマシユの願いに肯定的だ。

「はン。あそこに来るくらいなら東京や京都行く方が遙かに有意義だと思うが……来たいってンなら止めはしねエ。地元の美味しいラーメン屋教えてやるよ」

「マシユと旅行。楽しみ」

勿論、彼女だけじゃないがな。

「聖女sは確定として、ロマンと所長も強制的に拉致るか。沖田さんも来る？」

「……………行きます」

苦虫を三千匹噛み潰しても、ここまで歪にはならないだろと断言できるほどの表情を浮かべながら、かされるような声で新選組の志士は了承する。

元敵地に観光で乗り込むなんざ死んでもごめんだが、何か楽しそうだし着いて行きたい。ああ、でも新選組の仲間たちに合わせる顔がないのでは？ けど、現代の薩摩は敵じやないから問題ないよね？ でもでも、そんなの副長が許す筈が。あー、でも美味しいラーメンは食つてみたい。——みたいな顔してる。

「後で観光スポット調べてみるか。俺達は地元民だから、逆に行ける場所知らんのよね。桜島登る？」

「黒豚……黒牛……じゅるり」

花子の呟きは聞かなかつたことにして、俺達は来るであろうその時の楽しみに心躍るのであつた。

「ンで、今さら鹿児島の歴史語るなんぞ、どういう風の吹き回しだテメエ？」

「いや、ね？ 鹿児島への風評被害が激しいって話だから、ここで媚びておこうかと」

「火葬後の心臓マッサージよりも効果ねエよ」

つまり薩摩もローマ

約一ヶ月ぶりとなるレイシフト。

集まつたのは所長やロマン、ダヴィンチちゃん。そしてサーヴァントの面々。いつものキチガイ共。しかし、マスターとして現地に赴く俺に、ロマンが放つた一言は最悪とも呼べる事実だった。

「——は？ ゴメン最近難聴系主人公目指していくさ。もう一度言ってくんない？」

「君達が今度レイシフトするのは中世ヨーロッパ。場所はローマ。けれども、ローマは既に滅んでる。」

難聴系& a m p ; 鈍感系で乗り越えてみようとしたが、現実は非情で残酷であった。冬木市といいオルレアンといい、なんか普通なら詰んでいる状況多くないか？

二つの特異点が攻略できたのだつて、お世辞にも自分達が優秀だつたからだとは言えない。双方とも単に運が良かつただけで、一つ対応を間違えれば奴さんの思惑通りになつていただろう。今回は万全を以て特異点に臨もうとしていた手前、この知らせは俺のモチベーションを最低限まで下げる。

そのあとも五回くらいはロマンと同じ問答を繰り返してみたのだが、最終的にカルデア団長に止められることとなつた。

「そろそろ現実逃避は止めなさい」

「あ、柿ピー」

「柿ピいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい」

「所長こそ現実見ろや」

魔改造して、縮地している沖田さんレベルに速い動きをするよくなつたルンバに、柿ピーのファミリーパックを積んで爆走させる。

所長はいつものように奇声を発しながらそれを追い回す。カルデアではいつもの光景だ。

俺は「あんなに逞しくなつて……」と涙するロマンに詳細を求める。まさか何の根拠もなしにローマが滅んだとは言わんだろう。

「本来ならば転移先は首都ローマになる予定だつた。ちゃんと座標軸を固定し、安全に、そして確実にマイケル君と花子ちゃんをレイシフトさせる……はずだつた。けど、僕達が観測した首都ローマは既に敵性サーヴァントに占領されていたんだ」

「ドクター、一つ質問をしてもよろしいでしょうか。カルデアは特異点を観測した時点で敵性サーヴァントの位置まで把握できるようになつたのですか？」

「あんまりオレ達をなめんなよマシユマロ。人類だつて十数年前までガラケーだつたのに、今ではスマートフォンなンぞ握つてんだけ？ カルデアの観測システムも進化すンだよ」

盾の少女の質問に答えたのはカルデアの臨時不良職員だつた。自分の自信作にケチをつけられた技術者のようにふて腐れたアホは、そもそも外に出たことすらない少女に吐き捨てる。

これが会つて数日の関係なら、か弱い少女を罵るクソ野郎にしか見えない。しかし、長年付き合いのある俺達には分かる。これは「カルデアのシステムは自分が強化したから安心して攻略してくれ」と翻訳するのが正解だ。何でコイツこんな難儀な性格してんだか。

男のツンデレに何の需要がある？

それが許されるのはCV釘宮だけである（偏見）。

「実際には観測した時点で敵性サーヴァントの集団と、史実側のローマ帝国軍が衝突している最中でした。情報を集めていた間に、残念ながらローマ軍は壊滅。ローマ側についていたと推測される味方サーヴァントも最後まで粘つていたのですが……」

「こちらが準備完了する前に首都が占領されちまつた、つて訳か。そりやもう仕方ないつてもんだ。下手に不安定な状態で放り出されても、こつちがマジで困る」

ダニエルが珍しく申し訳なさそうにしているところを鑑みるに、スタッフの方々も力を尽くしたのだろう。誰を責めることもできないし、今回は運が悪かつたとしか言いようがない。

「しつかし、こりや困つたなあ。ロマンの滅んでいる発言は言い過ぎだとしても、既に首都が陥落しているとなると、巻き返しは絶望的つ

てもんだ。そもそも俺達がレイシフトする予定のローマ帝国の皇帝って誰?」

「ローマ帝国の第五代皇帝ネロ・クラウディウスだね」

「ネロ……ああ、あの暴君と呼ばれたローマ皇帝ですか」

「ネロ……ネロ……誰だっけ?」

何か名君だつたけど、壯年期に暴君になつた皇帝つて習つた記憶があるのだが、それ以上にそのローマ皇帝の知識を持つていな。仕方ない、後で天下のWikipedia様のお力を借りするか。

……ちよつと待つて。

俺は今から狂つてるオツサン助けるために無謀なことをするん? 「うつわ、くつそヤル気でねー。何が楽しくてローマ人のオツサンの国を救うために、積んでる特異点に赴かねーといけねーんだか」「アンタねえ……」

「沖田さん的には戦国無双できればそれでいいです」

モチベーションが底辺どころか腹滑り状態な俺に、腕を組みながら俺達の小会議を傍観していたレティシアは呆れ、視線をゲーム画面から離さずに沖田総司は自分の意見を主張する。

ん? 聖女様がいないつて? 今古戦場中だから来ないよ?

「ああ、くつそめんどくせえけど……ロマン、俺達がレイシフトする場所の地図くれ。地図」

「ちよつと待つてね……えつと……あ、これだ。敵本拠地のど真ん中だよ」

「控えめに言つて頭おかしいんとちやう?」

確かに安全に確実にレイシフトさせるだけで、安全な場所にレイシフトするとは一言も言つてないんだよな。ローマが陥落してから首都に舞い降りるわけにはいかないが、敵の大将の前も相当頭おかしいからな?

場所は城の近くの森の中。周囲は敵性サーヴァントと配下の人間が布陣しており、敵を示す赤い点がイクラ丼みたいに密集している。

これは所長に希望を見せすぎたかな?と俺は肩をすくめる。なんもしてないのに所長のせいにする。

聖杯砲で吹っ飛ばした後の奇襲作戦。被害をこれ以上増やさない上に、最短で特異点を攻略するために準備したが、これが所長に「人理修復簡単じゃね?」と思わせてしまったのだろう。こんなことなら時間をかけて挑むべきだった。

そもそも今回の特異点なんか絶望的ってレベルじゃねえぞ?

寡兵が多兵に勝つなんざ、用兵の基本を逸脱し――?

「……あ」

「なんか物凄く嫌な予感がするんだけど」

察しの良い竜の魔女が嫌な顔がしてるけど、俺は地図を睨みながら額に手を当てる。

物凄く頭の悪い作戦を思いついたが、もし成功したら起死回生の一
手となるだろう。成功する確率はかなり低い。でも不思議と出来ない
気がしない。

「こうなつた以上、たいへん不本意だが第二の特異点もパパッと解決
しよう。今回はレティシアの出番は少なるかもしけんが、代わりに沖
田さんに大活躍してもらうからな? マシユも要だ」

「え、人斬つてもいいんですか!?

「ああ、おかわりもあるぞ」

できれば聖女様にもご同行願いたかったんだがな、とは口が裂けて
も言わない。聖女様を引き合いに出すと、決まって魔女様が不機嫌に
なるからだ。

加えて、沖田さんにも我慢してもらわなきやならないことがあるから、
その分新選組こと弱小人斬りサークルの面々には存分に腕を振
るつてもらう。

それに、今回の作戦の要は花子だ。

一ヶ月ぐらい練習してきたアレを、お披露目する機会がこんなに早
いとは思わなかつたが、むしろこんな機会がめつたにないのだから、
出し惜しみする理由はない。

「……浮かない顔をしているが、君らしくないな。大丈夫かい?
おっぱい揉む?」

「ダヴィンチちゃんや、この状況で浮かない顔しないほうが無理つて

もんじやない？　いや、俺も何だかんだ考えて動いているつもりだったけど、根本的にはキチガイだったんだなあってさ

「そんな自明の理を今さら？」

「おい天才表出ろ。あとおっぱいお願ひします」

この後レティシアにスカイアツパーをかまされたが、それ以外は特に問題がなかつたので、三個目の特異点を修復する旅が始まつたのだつた。

◆◆◆

「本当にいつものように、あんな無理難題を抱えてレインシフトしちやつたなあ。やっぱマイケル君は凄いね。……僕とは全然違う」

「そんな心象に浸つてる君に朗報だ」

「うん？　レオナルド、どうしたんだい？」

「回収した聖杯が一つ行方不明だ」

「……はい？」

暴君とキチガイ

「——レイシフト完了つと」

「敵のど真ん中」

「言うなよ脳筋マスター。悲しくなるから」

不吉な言葉を残してうま○棒を頬張る花子を諫めながら、俺は周囲に気を配る。それは一緒にレイシフトしてきたマシユは勿論のこと、ゲーマー姉妹の片割れたるレティシアや、早く人を斬りたくて仕方がない沖田さんも、同じように警戒を解かない。

俺達がレイシフトしたのは、ひらけた森の中。若干だが木の生えていないスペースであり、野宿やら何かをするには適した広さを持つ場所だった。あまりにも不自然な空間だったため、俺は勝手に『当時のローマ軍が何らかの軍事目的で使用していた』と邪推する。兵などを隠すにはぴったりの広さだしな。

野営にぴったりな場所を選んで転送してきたあたり、新生レイシフトシステムの正確さを伺える。

それにして、これが約2000年前の森林かあ。

我等が故郷のド田舎の森と大して変わらんな。若干だが空気が澄んでいるくらいか？

「……マシユは通信機器の調整を。レティシアは寝床の確保」

「了承しました、先輩！」

「要是テントを立てろつてことでしょ？ ……普通女の子にやらせる？」

俺の指示にマシユはピシツと敬礼し、レティシアは不満を表す。後者はブツブツ愚痴を零しながらも、ちゃんとテントを立てるための骨組みを用意するんだから、生糸のツンデレ少女ここに極まれりって感じだ。

紳士なら女性に力仕事を押し付けないだろうが、俺は自他共に認めるクズ野郎なので、立っている人間は親でもサーヴァントでも躊躇なく使う。

俺は厚めの皮手袋をはめながら、竜の魔女を煽る。

「別に俺がテント立てるのやつてもいいんだぜ？」元聖女様が日曜大工やってくれるんならな。お前だつて俺が乗るための荷台を作りたくはないだろう？」

「……テント立てる」

「納得してくれたのなら結構」

俺は作業を始めたレティシアを横目に、手の空いている二人にも指示を出す。

というか、二人のが一番重要な仕事だつたりする。

「よし、二人はバーベキューの用意よろしく」

「はーい」

「ちょっと待つてや、クソ雑魚セクハラ変態マスター」

謂れのない誹謗中傷を浴びせてくる、テント立て係。失礼な、俺がセクハラしたのは後にも先にも白い方の聖女様だけだぞ。しかも合意の上だ。

俺は黒いのを無視して、二人に詳細な指示を伝えた。

「沖田さんはそこの野菜を洗つて来てくんない？ 確か近くに川があつたし、それ採れたての野菜だから泥も少しついてるからさ。野菜のつまみ食いも許す」

「マスターの作つた、あのタレをつけて食べるんですね？」 つまみ食いなんてしませんよ。もつたいないじやないですか」

「花子は動物を狩つて来い。そういうの得意だろ？」

「わかった」

近所のババアより継承された秘伝のタレの虜になつてしまつた沖田さんと、よく狩猟会のジジイ共と素手で熊狩りしてた花子は、俺のお願いを喜んで引き受ける。スキップしながら川へ向かう新選組の人斬り侍と、残像を置いて走り出す花子を見送り、作業に戻る俺。レティシアは何か言いたそうにしていたが、複雑な表情を浮かべながら作業に戻る。

何を呑気にバーべキューしてんの!? というツッコミ魂と、でも炭火

の肉を食いたいという欲望がせめぎ合い、後者が勝利したのだろう。

竜の魔女様の心境の何と読みやすいことか。ちよつろ。

とは言つても俺の作業は、最初の二人よりも重労働であり、物凄く時間がかかる。

先に仕事を終えたマシユとレティシアは、設置したカルデアとの通信システム経由で、狩りゲームを楽しんでいた。ちなみに参加プレイヤーは盾の後輩と竜の魔女、暇を持て余した医療チームのホープや技術班の不良少年だ。

何やら所長の怒号が聞こえるが気にしない。

俺は彼女等の笑顔を背景に、黙々と作業を続けるのだつた。

◆◆◆

「花子、俺は食える動物を狩つて来いつて言つたな？」

「うん」

「つまり、お前は俺が女を（性的に）食うと思つてるわけだな？」

「うん」

何断言してやがんだ、この脳筋クソマスターが。

俺は花子が狩つて来た（と本人は言つている）獲物を前に、怒りを通り越して呆れるしかなかつた。

足元に転がつてゐるのは金髪の女性。現地の方なのは明白として、赤を基調とした服を身に纏う綺麗な人だつた。割ときわどい衣服なので娼婦か何かかと思つたが、それにしては服の素材が上等すぎる。まあ、その服もボロボロであり、さらにエツチ度が増しているんだが。

しかし、ボロボロであつても彼女の美しさは損なわれない。

コイツ本当はどつかの貴族の令嬢でも攫つて来たんじゃないだろうな？

彼女の扱いに困つてゐると、野菜を洗つてきた沖田さんが帰還する。

幕末の少女は俺と花子と今日の肉（仮）を交互に見て、首を傾げた。
「……？ 私に人肉を食す趣味はないですよ？」

「俺にもないけどね」

あつてたまるか。

さすがにカニバリズムを掲げるほどのキチガイじゃない。

沖田さんもそれを分かつて冗談を言つたのだろう。……本当にそうだよな？

洗つた野菜の入つたかごを地面に下ろし、ついでに汲んできた水入りバケツの一つを掲げた彼女は、何の躊躇もなく中身を気絶した女性にぶちまけた。

「うわっ、いきなり水かけんじゃねえよ！ 涼しいけど」

「これで水も滴る良いマスターにな——」

花が咲いたかのように楽しそうな、年相応の笑みを浮かべた侍少女は、いきなり目を見開いた。漫画なら集中線が描かれていたんだろうと考えるくらいには。

俺も思わず「うつわ……」と表情が引きつった。

そりや人斬り侍も注視するだろう。

水に濡れた赤服の女性は、同性異性問わず見惚れるほどの美しさを醸し出していたからだ。純金色の髪に、陶磁器のように白い肌。整った顔立ち。元々の素材が綺麗というのもあつたが、肌に張り付く水滴は彼女の美を際立たせる宝石に相当する。

これは純真無垢な俺には刺激が強すぎます。えつちすぎます。

「つかふと思つたんだけどさ。この人の顔つて沖田さんに似てね？ というかジャンヌsもそうだけど、英靈組の顔パーツつて似たり寄つたりだよなー」

「え、それ今言います？」

「理ある」

かなり失礼なことを言つた気がするが、遠回しに英靈組の顔面偏差値が高いと言つてゐるのだから許してほしい。綺麗だなーとか、エツツツツツツツツツとかいう感想より先に、花子が持つてきた彼女を見た感想は「ジャンヌの3Pカラーかな？」だ。めつちや可愛いから不満そのものは感じていなが。

俺の素朴な疑問に、沖田さんは困惑し、花子は同意する。

人の顔を覚える記憶力のない花子にとつては、顔が似通っているといふのは、俺達が思つてゐる以上に苦痛だろう。この前聞いた話によると、花子は英靈組を色で覚えているとか。ジャンヌは白、レティシアは黒、沖田さんは水色、マシューは茄子色らしい。レティシアが黄色い服を着ていた時に、彼女を「所長」と呼んでレティシアを泣かし、その光景を見ていた所長も泣いていた。

そんな下らない話に花を咲かせていると、今日の夕食（仮）が呻きながら目を開ける。

エメラルドを淡くしたような瞳を俺達へと向ける。

「——つ!? き、貴様等は何だ!? まさか連合の者か!?

「連合って何? ……ああ、俺はマイケル。そつちが花子で、それが沖田さん。貴女の名前を教えて下さいな」

とりあえず敵意がないことと、簡単な自己紹介をする。連合という単語に引っかかつたが、まずは彼女がどこの誰なのか、そして俺は花子のやらかしをどこに謝らなければならぬのかを確認することが優先だ。

彼女はバツと立ち上がり高らかに名乗る。
左手を自分に向け、右手を羽のように広げる姿は、どこかのオペラ歌手のようだ。

「余がつ! 余、こそがつ! ローマの全てにして、ローマそのもの!
ローマ皇帝・ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・
ゲルマニクスであるつ!」

「

皇帝かよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!

皇帝は聞く相手を間違える

草木も寝静まる丑三つ時——訂正、大体23時より過ぎくらい。

明日の作戦決行前に十分な睡眠は必要。そのため、カルデアのマスター&サーヴァントはレティシアの設置したテントの中で英気を養う。簡単に言うと寝てる。テントそのものが物凄く大きく、10人寝ても余裕があるので、各々が自分の布団などを敷いて寝ているだろう。

そりや、バーベキューでみんなに馬鹿騒ぎしてたら寝るのも早い。

肝心の俺は荷台の調整を行っていた。

今回の特異点でしか使わないアイテムだが、使い捨てだからこそ調整が必要なのだ。

俺は黙々と作業する。

ひつそりと、静かに。

彼女等の眠りを妨げるのは酷だろう。

ウイイイイイイイイイイイイイイイイイガガガガガガガガガガガガガガガ
ガガガガガウイイイイイイイイイイイイイイイイイイガガ
ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ

「ん？ 皇帝陛下おはよう。まだ寝ててもいいぞ？」

「それを本気で言つておるのか？ え、マジで？ え？」

荷台作りに飽きた俺がチエーンソーートで遊んでいると、自称皇帝陛下が恨めしげに起きてきた。『余だよ』と日本語で書かれた白いTシャツ、黒のハーフパンツ、カルデアから至急取り寄せた『ばすたー』のパークー……要するに『カルデア英靈だらだらセット』に身を包む皇帝は、一見するとめつちや可愛い女子高生にしか映らないだろう。

皇帝は俺が用意した光源の近くに腰を下ろす。

光源はただの古びたカンテラにしか見えないだろうが、これはボブのポテトフライ実験の副産物で誕生した『半径五キロ以内に虫を寄せ

付けないライト』である。魔術つてスゲー。

荷台側面にチエーンソーで薔薇をほどこした俺は、そこの出来栄えに満足しながらチエーンソーを地面に置いて、紅いペンキで色付けを開始する。

只の荷台じや面白くない。

「——余は、間違つてしまつたのだろうか?」

「ん? 何が?」

薔薇が掘られていない部分に金箔を貼りつけていると、体育座りで俺の様子を見ていた皇帝陛下が、力なくボソッと呟くのが耳に入つた。今日会つただけの関係ではあつたが、その短時間でも『自分がめつちや大好き』という印象を抱くほどの人物だと記憶していただけに、正直彼女の発言は予想外だつた。

さつきまで、バーベキューの光景に歓喜乱舞し、俺の分の食事まで平らげた少女だとは思えん。

俺は荷台のタイヤにイルミネーションで使う豆電球をつける作業を続けている。

そのため彼女の顔は見えない。あえて見ないと言つた方が正しいか。

「話したであろう? 余のローマを篡奪した連合、その王は……」「ロムルス、だつけ? ローマ帝国を建国した凄い人……つて認識しかないんだが」

「何おうつ!?

ロムルス誰それ美味しいの?

荷台の中に45口径51cm連装砲を取り付けながら、適当に返した俺の反応が気に食わなかつたのだろう。一転してネロ・クラウディウスはロムルスという人物についての歴史を語る。さすがに作業しながら聞くのは無礼だと思つたので、道具を置いて彼女の言葉に耳を傾けたが、それが間違いだと後になつて気づく。

俺が相槌をうつたり、時折質問したり、素直な感想を述べるものだから、皇帝陛下のロムルス話はヒートアップしてしまつた。ついでに連合に所属しているカリギュラやカエサルの話にも飛び火する。

話は長かった。

俺が荷台の後方にジエットエンジンを設置する作業に戻るのは日付が変わった後だった。

「そんで？ その建国の王がどうしたつて？」

「……余は、負けてしまった。ローマを奪われてしまつた。せつかく余を支えてくれた者達——スバルタクスや呂布、荊軻……そしてブーディカ。そのような者たちまで失つてしまつた。余はロムルスに会つた。……ああ、彼の建国王は偉大であつた。余は——連合に下りたいとさえ思つてしまつたのだ」

「そんな凄い人と今から戦うのか。面倒臭え、俺も下つていいか？」

俺は荷台側面の片方に丸十字の旗を掛けながら嘯く。俺の言葉は冗談半分であつたが、それは赤の皇帝を笑わせるには不足していた。いや、さらに自虐的にしてしまつたというのが正しいだろう。また作業に戻つているため皇帝の顔は見えないが、小さな体をさらに小さくして いるに違ひない。

「逃げながら連合の街を転々とした。連合の民には笑顔がない。それは余には許せぬが、ロムルスの統治は完璧であつた。許せぬという感情は変わらぬが、国を奪われた余が言う資格が果たしてあるのだろうか？ 敗者である余が、ロムルスの統治を批判する資格があるのだろうか？」

「知らんがな。確かに、今の陛下が批判したところで、その統治すら出来なかつた奴が何言つてんの？……とは思われるだろうがな」

「そう……だな……。連合に負け、ローマを失い、惨めに逃げて、余は考へてしまつた。余は、余のしてきたことは、間違いだつたのではないか、とな。マイケルよ、余は間違つていたのだろうか？ 偉大なるロムルス王に抵抗した余の判断は、間違つていたのか？」

あの自信家の彼女にここまで言わせるロムルスという王は、確かに偉大だったのだろう。負けて、奪われて、逃げて、逃げて、逃げて。彼女は自分のしてきたことそのものに、彼女の人生そのものに自信が持てなくなつてしまつた、と。

見ず知らずの、信用に置けるとは到底思えない俺に、そんな弱音を

吐いてしまうほどには。それとも誰でもいいから聞いてほしかつたのだろうか？自分がしてきたことが全て無意味だった——まあ、誰だつて気落ちしてしまう事実なのは否定できない。

俺としては聞く相手を間違えていると思うが。

連装砲の上に紅白歌合戦で使われた小林〇子像をこしらえながら、溜息交じりに肯定の問いに答えた。

「それを民主主義の信奉者である俺に聞くこと自体間違つてるとと思うけどね。陛下の良し悪しなんざ、後世の歴史家が決める事であつて、俺や陛下が疑問に思うことじやねえと思うが。それに——」「それに？」

「俺達はまだ負けてない。それに、口ではなんだかんだ言つているけど、皇帝陛下も諦めてちやいないだろ？　まだ口ムルスん所言つて膝突いてない皇帝陛下の弱音には、あんまり説得力がないと思うがなあ」

「——つ！？」

「んー、あれ何の漫画の台詞だつたけ？　——皇帝陛下、アンタは敗者じゃない。何故ならまだ皇帝陛下は　諦めきれずにそこに座つて居るからだ。いいか？　陛下が連合という強大な敵に対して、一歩でも立ち向かおうとしている限り、人間の魂つてのは真に敗北する事など断じて無い、つてことよ」

俺は小〇幸子像の目にビーム兵装を取り付けながら、似合わないキメ台詞を放つ。言葉的にはマジで格好いいのだが、どうも俺が言うと型落ちしてしまうのが悲しいな。

「まあ、安心しなつて皇帝陛下。俺達と陛下の目的は大半が一緒だ。カルデアメンバーがアンタの味方なんだよ。ローマ帝国復興は目の前だぞ」

「……連合軍を前にその台詞。可能なのか？」

「おいおい、可能とか言うレベルじやないぜ？」

皇帝の言葉に弱弱しさが見えたが、俺はオプションを付け過ぎて目的を見失つた荷台を眺めながら笑う。

平和ボケしてしまつた現代日本の若造の一人だと思つており、自分

の祖先がやらかしてきた無謀かつ頭のおかしい言動を嘲笑つてきた俺だが、どうやら俺達の本質というものは変わらないらしい。それがおかしくもあり、尊敬する先達者もこのような気持ちだつたのだろうかと考えるほどには。

「——確かにローマの兵は強いだろうよ。だが、こつちは寝ても覚めても殺し合うことしかしなかつた島国の侍の末裔ぞ？ 今も昔も、薩摩兵子の目的は何一つ変わつちやいない。御大将の首を奪る、ただそれだけさ」

それは、島国の一地方が強大な帝国に放つ宣戦布告と同義だつた。いつも通りだな。

「あ。ローマは世界、世界はローマ。実質、薩摩もローマじやん」「いや、薩摩はいらん」

集え！ 我等が夢想の軍勢よ！

「よつし、準備完了つと」

「……マイケル君、本当にやるのかい？」

「いや、これ以上にスマートな攻略方法があれば教えて欲しいんだけど」

荷台前方に座る俺の言葉に、ロマンは反論なく押し黙る。時間さえあればもつと安全かつ確実な策を実行しただろうけど、如何せん俺等には時間も人材も余裕もない。

荷台後方にちよこんと顔を出す皇帝をさつきと復権させなければならぬ理由がある。超簡単に説明すると、連合の政をローマ市民が良しとさせる時間を与えないわけだ。下手に時間をかけると市民が「お、ロムルスの政治つてマジ良くね？」と思ってしまうからだ。

そうなると連合が消えても、ネロの政治に不満が出るもののが現れる。

M^{ミッドフィルダ} F^が俺とマシユ。 D^{ディフェンス} F^が沖田さん、 レティシア、 皇帝陛下。そして F^{フオワード} W^に花子を配置した超攻撃的フォーメーション。要するに荷台を花子が引っ張るだけである。

とりあえず移動準備は終わつたので、最後の仕上げとして花子に指示を出す。

「例のアレをやつちまいな」

「りよーかい」

脳筋マスターは無駄にデカい胸の谷間に手を突っ込み、目的の物を公にする。

自分でもちよつと何言つてるか分かんないっすね。

現れたのは黄金の器。

膨大な魔力を内包した万能器の成れの果て。

人はそれを『聖杯』と呼ぶ。

「じゃじゃーん」

「じゃじゃーん……じゃないよ！ どうりでカルデア内を風漬しに探したのに見つからないと思つたら、花子君が持つてたの!? というか

それで何するの!? 僕物凄く嫌な予感がするんだけど!?

「ん? そんなの簡単じゃん」

ロマンが嫌な予感と言ったのは、花子が聖杯を持っていることと、沖田さんが物凄く嫌そうな顔をしているからだろう。しかも嫌そうな顔が、今までの比じやない。レティシアでさえ明後日の方角を眺めている。

俺だつて同じような状況なら不安になる。主に前者の理由で。

「このローマにロムルスがいること自体が理不尽で不条理な現象だぜ? それを正攻法で何とかしようつてのがそもそも間違いじゃない? なら、攻略法は簡単だろう。理不尽には——もつと理不尽な存在をぶつけんだよ」

もつと理不尽な存在。

そりやもう俺達の中では一つしかない。

花子は硝子のように透き通った声を紡ぐ。それを女神の歌声と認識するか、悪魔のささやきと解釈するかは、人によつてさまざま違う。いや、どう足搔いても後者やる。

それは魔術の最奥。術者の心象風景で現実世界を塗りつぶし、内部の世界そのものを変えてしまう結界——を花子の理解不十分によつて作りだされてしまった『空想具現化』の亞種。

「——首を奪れ。手柄を挙げよ。死を恐れるな。いにしえの武士共 もののふ
よ、帰るまでが遠足です——『島津ノ引口』

魔術に携わつたことのあるものならば、その凶悪さに吐き気を催すほどの爆発的な魔力が、花子の詠唱によつて放出され、それは一瞬にして霧散する。

そして一陣の風が舞い、そこに現れたのは300の兵。日ノ本の武者だと外見上判断できるが、一般的な武者とは出で立ち若干が違う。足軽の装備が足りない部分があるし、乗馬している武者も軽装に近く、全体的に防御力に難がありそうな格好なのだ。

しかし、その紙装甲に反比例して、兵の一人一人の目は殺意に満ち

塊だ。 狂氣はないはず。 ましてや甲冑武者に至つては、その在り方が殺氣の なくとも招来された足軽のように全てを喰い殺すと言わんばかりの ている。 日本における戦国時代の足軽は農民などの一般人であり、少

強大なる連合に立ち向かうには數が少なすぎるだろ？
前の大作戦の失敗を教訓として、今度は必ず勝つぞ！

もう皇帝なんか半泣きの状態である。

「なななななななな何なのだ貴様等は!?」あれかスバルタか!「スバルタなのか!? 少しは殺氣をおさめよ! 余は泣くぞ!」

「うーん、史実的にはスバルタの方が殺意高いよなあ」

さすがにスバルタのように20万の敵を7000で、30万の敵を10000で……みたいな経歴を見ると、花子が呼び寄せた日ノ本の兵の経歴は見劣りしてしまったろう。さすがに薩摩民でもスバルタはやべえわ。

だからと言つて、花子が招來した化物共の格が落ちるはずもなく。俺は前方の荷台正面に足をかけながら、大声で兵を鼓舞する。

まさか自分が——日ノ本一のキチガイ帰宅部を指揮する日が来るとは思わなかつたが。

「場所ん変われど、薩摩兵子の目的ば同じ！ 狂うは神祖口ムルスば首が一〇！ 全軍、手丂ば討う取え、！」

「三木は誰か耳にしないよ。」

かつて主君を逃がす為に命を賭した、我等が祖先。
総大将・島津義弘を筆頭とし、島津豊久、中馬重方、長寿院盛淳
などの錚錚たる面子を取り揃えた、薩摩兵子のドリームチームであ
る。

俺の下手な薩摩訛りの号令と共に、今か今かと待ち構えていた島津兵は、奇声と共に進軍を開始する。一見すると只の蛮族、もつと悪く言うと賊の類かと思う人もいるだろう。だが、その足取りは統率を成しているのが分かる。指揮してみないとこれは分からぬだろう。指揮している俺も内心ウツキウキである。

語彙力が低下するオタクレベルに興奮しているのが自分でも理解できるのだ。いや、マジでこれヤバいって。ただでさえ世界各地の偉人と出会得る旅つてだけで心躍るのに、自分の推しが目の前にいるのだ。

「……うわあ」

ドン引きしているレティシアを乗せた荷台も、島津兵に遅れんとばかりに動き出す。

作戦とか言つてゐるけど、簡単に説明すれば敵陣中央突破である。後世の歴史家どころか、小学生ですら正氣を疑う、作戦とも呼べない代物だが、なんと不思議なことに敵陣中央突破に近い脱出劇を繰り広げた経験者が300人もいるのだ。

控えめに言つて頭おかしいでしょ。

そんな増殖されたキチガイ共は森を越え、連合軍拠点までの平坦な道のりを進軍する。場所は知つてたが本当に城が目視できるくらい近い。ほぼ近所じやん。

もちろん重要拠点なだけに、防衛のための人員はいるようで。

城門から統率されたローマ兵が出撃し、城壁から弓兵が矢の雨をこちらに浴びせてくる。

「レティシアっ、幸〇砲用意」

「え、ちょ!? いきなり言わないでよ! ……これ? このボタン?」「撃てつ!」

確かに背面辺りにボタンがあつたはずだが、レティシアはボタンをちゃんと押してくれたようだ。全長30メートルの像の目からビームが発射され、敵軍の矢を全て焼き捨てる。

「「……」」

その様子に英霊組は絶句する。

皇帝陛下は既に泡を吹いて倒れてる。

「……待つて待つて待つて、え?」

「ああ、これ? ボブのポテトフライ実験の副産物で誕生した『小〇幸子砲EX』らしいぜ? いやー、城攻めに便利だよなあ」

「そろそろ実験の副産物が実験結果を大きく超えそうな気がするんだ

けど!?

手段が目的化しないことを祈るばかりだ。

さて、進軍に關してなんだが、順調過ぎて怖いレベルで進んでいる。そりや地の利や數的にはローマ兵に軍配は上がるだろう。しかし、こちらにはキチガイじみた思考回路と、種子島などのオーパーツがある。

火縄銃特有の安全性皆無な殺意の高い銃弾と、二発目以降は死の象徴ともなる爆発音が、ローマ兵の士気を大いに低下させる。爆発音がしたら隣の人間が死んでいる……なんて現象が起きているんだ。逃げ惑う敵兵さんには同情を禁じ得ない。

敵の進軍を防ぐために城門が閉まるが、それを45口径51cm連装砲で吹き飛ばす。間違えて城壁も一部吹っ飛ばしてしまったが。

俺はマシユ達と共に荷台から降り、沖田さんと島津兵の皆様に指示を出す。

「沖田さんと御先祖は城門前を守つてくれ! 援軍来た時にはローマ兵を一匹たりとも入れないでくれよ!」

「……はーい」

「おう、坊主! きばい 張 頑れ ゃんせよ!」

この状況は『捨て奸すてがま』に近い状況であり、要するに「死ぬまで足止めよろしく」の意に近いが、祖先の皆様は笑顔で応じてくれる。

まあ、○子像と連装砲あるから足止めはかなり楽なんんですけどね。

氣絶している皇帝陛下を背負い、脳筋マスターと盾の天使、竜の魔女を引きつれ、俺は拠点内部に待ち構えているであろう神祖とやらの元へ向かうのだつた。

なんか総大将も同伴してくれた。

さらば、レフ・ライノール

「来たか、^{ローマ}私こそが」

「ええええええええええええええええいいいいいいいいいつつ！」

城塞の最奥。

必要最低限のそうしょくが施された大広間に、その巨躯な男は存在していた。どちらかと言えばアマゾンの原住民族の長老と言われても納得してしまいそうな服装の男は、俺達を——特に皇帝陛下に視線を注ぐ。彼の瞳には優しさは慈しみを内包しているにもかかわらず、なぜか本能的な恐怖を覚えてしまう。いや、これは恐怖じやなく『恐怖』なのだろうか？

俺の人生では出会ったことのないタイプのサーヴァントだ。

さつき鬼島津に吹っ飛ばされたけど。

「神祖おおおおおおおおおおおお!?」

縮地した沖田さん以上の速度で、義弘公はロムルスの懷に入り、手に持った大槍を神祖の首に振り下ろす。結果だけで推測したから他に工程があつたかもしれないが、義弘公が槍を振りおろしたモーションで止まつており、ロムルスが壁にめり込んでいるから、あながち間違つてはいなかろう。

薔薇の皇帝はダッシュで建国王の神祖に駆け寄る。敵に無防備に近づくなど愚の骨頂だが、状況が状況なだけに俺は止められなかつた。

本来ならば皇帝が神祖を止めるはずだつたのだ。

ウチのバーサーカーが名前通りに暴走しただけなのだ。本当にすみません。

「神祖ロムルスよ、大丈夫か!?」

「いや、どう見ても致命傷だろソレ」

「……案ずるな、我が子よ。あれもまた、キチガイなのだから」

ローマつて単語便利だな。

自分を介抱する皇帝陛下にかけたロムルスの言葉に、俺は呆れ半分で溜息をつくのだつた。

しかし、さすがは建国の祖。ローマの礎となつた偉人だ。

花子のバーサーカーの首を狙つた一撃は致命傷だったと思うが、未だにロムルスの首はつながつたままだ。島津のバーサーカーも、その事実に首を捻つてゐる。

「……うむるす生きてる？　トドメ刺す？」

「良かど！　首ば扼ぐ——」

「オーバーキルは止めなさい」

皇帝陛下のようにロムルスへ駆け寄る二人を止める俺とマシユ。やはり花子の奥の手は間違ひだつたか？

「……ねえ、クソマスター」

「んだよレティシア。俺は脳筋×2を止めるのに忙しいんだよ」

「アンタの忙しそうな面でメシウマだけれど、そもそも言つてられないお客様の登場よ。ほら、現時点での黒幕ね」

俺達の立つてる場所を接点として、ロムルスたちとは逆の空間に、その人物は立つていた。

モスグリーンのタキシードとシルクハットを着用し、ぼさぼさの赤みがかつた長髪の紳士。不自然なほどにこやかに微笑む人物は、手に黄金の杯を握つていた。

俺は一瞬誰か分からんかつたが、ロマンと所長の言葉で思いだす。レフ・ライノール。カルデアがこんなにも苦労して人理修復している原因を作つた張本人であり、現段階で俺達の敵性勢力側の魔術師。コイツがそもそもの原因なのか、他にも仲間が居るのか定かではないが、紳士風の魔術師が現れたのだ。

過去にいる俺達が警戒色を示す中、未来にいる所長が声を絞り出す。

「レフ……」

「やあ、オルガマ」

「ちえすとー」

「ぐぎやぶれお、お、お、お、お、おああああああああああああ」

所長の何とも言えない切なさを含んだ言葉に、紳士風の男——レフ教授は皮肉の一つでも飛ばそうとしたのだろう。その証拠に、にこや

かな微笑みは残虐な笑みに変わっていたのだから。

しかし、それは小柄な一人の少女に阻まれる。

高速で相手の懷に潜り込んだ花子は、レフの腹部めがけて光速で殴打を何千発も繰り出す。ワンパンマンのサイタマを実写で見ているような気分だつた。レフはキチガイの猛攻を受けて壁にめり込む。

聖杯は連續殴打でレフの手を離れ、空中にとどまつている間にレフを片付けた花子が、落下と共に格好良くキャッチする。

そして俺に差し出す。

「〔……〕」

「はい、聖杯」

「はいじやねえよ！お、おいレフ教授！お、お前大丈夫か!?」

まさか彼を心配する日が来ようとは思わなかつたが、花子を無視してレフ教授の元に駆け寄ろうとするが、何かレフの身体が黄金の粒子となつて消え去ろうとしている。

いくら不意打ちとはいへ脆すぎないか？ それとも花子が馬鹿力なのか？

「教授？ 何やつてんだよ、教授！」

「ぐつ……、く、くそおおおあああああ——」

「うつさい」

死亡フラグ満載の呼びかけを行つてみたが、オルガマリー所長殺害未遂の容疑者はこんなところで諦めるほど貧弱ではなかつた。彼の目はまだ死んでいない。彼は迫真の表情を浮かべ、最後の力を振り絞らうとする。

よろよろと立ち上がつた彼は、喉から力を絞り出して叫ぶ。刹那、彼の周囲は禍々しくも濃厚な魔力を纏う。聖杯とはまた違つたベクトルの暴力的な魔力であり、それこそオルレンに出たと言わゆる悪魔を彷彿とさせる歪さだ。あのドラゴンはカルデア砲で木つ端微塵に吹き飛ばしたが。

つまり幻想種とかと類似する存在なのだろう。

しかし、そのような悪あがきは神話生物を打倒するには至らなかつた。

花子はレフ教授を黙らせるために、今回の成果である聖杯をレフ教授に投げつける。只の投擲じゃない。オルレアンの黒幕だつたキャスターを一発で座に還すレベルの威力だ。瀕死のレフ・ライノールでは耐えることはできないだろう。

鳩尾に聖杯を受けたレフは、せき込むように倒れ込んだ。

「はあ、はあ、はあ……。なんだよ、全然歯が立たないじやないか。クソつ……」

「きょ、教授……あつ……ああ……」

「あ、私この流れ知ってる」

そんな重症でもなお、教授は立ち上がる。

光の粒子を撒き散らしながら。

そして竜の魔女は何かを悟ったように自分のスマホを操作している。

「なんて、声、出してやがる……キチガイイ」

♪BGM：フリージア♪

「だつて……だつて……」

「私はレフ・ライノール・フラウロス、七十二柱の魔神が一人、魔神フラウロスだぞ。我が王の為、このくらいなんてことはない……っ！」
「……フラウロス？」

何か伏線やら何やらを詰め込んだ発言を聞いた気がするが、それは今重要なことではないだろう。せつかくレティシアが最高に面白い感激できる舞台を用意してくれたのだから、俺はそれを演じるべきだ。

皇帝は消えゆく神祖と会話しているし、花子と義弘公は邪魔する気配はない。

「そんな……（誰かは知らんけど）王様なんかの為に……」

「人類史を壊すのが私の役目だ」

「でもっ！」

「いいから行くぞ。我が王が、待つてんだ。それに……。（我が王よ、やつと理解しました。神殿から離れていて力を出し切れなかつた——何て関係ありません。この下等生物共は何やつても止まりませ

ん)」

ちなみに()の部分もレフは口にしている。

確かに俺達は何があつても止まる気はないし、花子のせいで止まる要因が思い浮かばない。というか花子がダメだったら何やつてもダメだろう。

レフの脳裏には彼が忠誠を誓う王の言葉がよぎる。

『お前何やつとんねん。連中シバくまで戻つて来んな』

「ええ、分かつております」

レフは俺達を睨みつける。

最後の最後まで下等生物と見下していた連中に、最後の言葉を残すのだろう。

彼は膝から崩れ落ち、俯せになつて倒れる。

左腕を上げて、人差し指で前を差しながら。

「我が王は止まんねえからよ、貴様等が止まんねえかぎり、その先に我等が王はいるぞ！だからよ、止まるんじやねえぞ……」

止まるんじやねえぞ。

その言葉を口にした瞬間、レフ・ライノール・フラウロスは光の粒子となつて消えた。ぶっちゃけレフ・ライノールって結局は何だったのか、何をしたかったのか俺は知らんけど、最後の彼は何かを悟つかのように満足していた。

彼は何に満足したのだろう。それともキチガイに感化され狂つたのか。

俺は粒子となつて空へ消えた彼を見上げる。

特異点を解決した証として、時空が歪んでいく現象を眺めながら、俺は小さく呟いたのだつた。

「……オルガ？」

「……え、何？　何で私呼ばれたの？」
お前じやねえよ所長。